

白き闇は正義になれない？

ソウクイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生先の事を知らずに貰つてしまつたのはとある特撮の悪役の力。中は普通○の人。

※ゲートの知識ほぼ有りません。

※…作者は見切り発車をします

※編集が良くされます。初期とだいぶ違います。

m () m

不安 亜神 確信 報告 対話 接触 友好 後悔 蹤躅 飛龍 闘争 始動

140 129 118 109 94 85 72 61 51 34 19 1

目
次

始動

200X年、夏の日。

今日の東京全体の天気は雲が少なく青い空が広がっている。普段なら良い天気と言えるが暑さが厳しい夏となると最悪な天気だ。気温は30°Cを記録。ほぼ雲に遮られる事なく眩しい陽光がモロに降り注ぐ。所狭しと密集したビルの窓に太陽光が反射してギラギラと光る日差しは肌を焼いた。

其処は銀座。

土曜日だからか人が多い。銀座を歩く人、人、人。服を透けさせるほど汗を搔きながら休日を楽しむ人や、今日も仕事らしい制服姿の人に行き交っている。気温は殺人的だがほのぼのとした平和な日本の1コマ。戦後復興から何十年と続いた何時もの平和な光景。騒乱や危険とは無縁な空氣。日本は今日も平和であつた……が、これから先も平和であると言うのが絶対という事もない。

平和というのは崩れることもあるのが必然。

平和がこれから崩れると想像するとしたら、それはどんな事態によるものだろうか？海外ならテロか大規模な犯罪等を想像し。日本なら突発的に起ころる地震などの天災を想像するだろうか。

もし今地震が起きればどうなるか：日本人は良くも悪くも日本に住んでいると天災との付き合いが深い。言い方が悪いが天災に慣れている。慣れているからこそ日本人なら地震に際してある程度は適切に行動もできるだろう。付き合い深い深い天災だからこそだが、もしそれが自然の猛威でなく海外である人による大規模な人災ならどうなるか：テロや戦争、人の惡意により命の危険も有る状態となつた場合……日本人は秩序を保ち他人と協力できるだろうか。それは難しいだろう。

命を奪いに来るにかが要るなら、誰もが混乱するのが自然。誰もが自分の事を優先するのは当然。だがもしそんな中でも命を救う為に命を懸けて動く事が出来る人が居れば、ただ勇気のある人とも言え

るが、大袈裟に別の言葉でいえば、それは……英雄とも言える。

しかし、そう言う命の危険がある場所で勇気も命を掛ける氣すらもなく人を助ける時は……なんというだろう。

昼前の頃から銀座では宴が行われている。銀座の誰も行われる事を知らなかつた宴であり、銀座に居れば誰もが強制的に参加させられる宴でもあつた。

その宴は所謂：

血と恐怖に彩られる宴。

銀座の町に響く宴の声は数えきれない悲鳴、四方から聞こえてくる怨嗟や怒声、聞こえてくる音は全て負の感情に満ちていた。

「た、助けてくれ……」

地面に倒れ伏す老人が傍を走り抜けようとした男性の足を掴んでいる。日常なら老人を助けっこすだろうが……

「は、離せええええ——!!!!」

「が!?」

男性は老人の頭を蹴飛ばす。頭を蹴飛ばされた老人の首から枯れ木が折れた様な音がし、老人の頭は本来向かない方向に向いている。老人の掴んだ手から力が抜ける。男性は老人を見ずに走り去つた。公の場所で行われた凶行にも、動かなくなつた老人にも誰も見向きもしない。

それ所ではないと言うように我先に逃げ回る人達、そこら中で聞こえる助けを求める声、自分が逃げるのが必死で他人を助ける人は殆どいない。救助に動いてる人も居るが焼け石に水：他者を押し倒して逃げている人の方が多すぎた。

多くの人が他人に対して氣を使う余裕を無くし必死に逃げている。車道や歩道も関係なしに逃げる人で溢れ、空から見ればまるで蟻の巣

に水を入れた後の様な光景が見えるだろう。

「きやあ!!」

一人の少女が倒れた。

十才位に見える年頃の少女、幸いと言つても良いのか、人の流れから少しだけ外れていて後続に踏み潰される事はなかつたが：

「い、いたい…あ、あし…」

少女は直ぐに立とうとするが呻き座り込んでしまう。足を抑えている。どうやら転んだ時に足を痛めたようだ。立つことは辛うじて出来るかもしだれないが走ることは不能。満足に動けない。数分も有れば回復する程度だが、今は満足に動けない。それが意味するのは：「誰か!!誰か!助けて!おねがいじます!」

少女は助けを求めた。喧騒の中に紛れる少女の必死の助けを求める声。誰にも反応されない可能性の方が大きい。それでもただ一人、スーツ姿の男性の耳に少女の声が辛うじて届いた。

男性は助けを求める声に反射的に振り向く。男は振り返り倒れる少女を見て咄嗟に引き返そうとして……少女の後ろも見てしまい凍りついたように動きを止めた。

「す、すまない…!!」

「え」

振り返った男を見て助けてくれると顔を明るくする少女を見た：が：男性は謝つて顔を背け逃してしまう。彼は余裕がない中でも少女の助けを求める声に反応する性根が善良な人だつた。

しかし“どう見ても助けらない”少女を助けようとする勇気のある人でもなかつた。

「ま、まつて！なんで、あしが！た、たすけて！ねえ！置いてかないで！た、たすけて！誰かたすけ……て……」

男性に向かつて少女は助けを求めた。

必死に助けを求め叫んだ。後ろから聞こえる音に気づくと声を出すのを止めた。

後ろから足音が聞こえた。喧騒の中でもハツキリと聞こえる重々しい足音。足音に続いて漂つてくる野生の獣の様な臭い。ドンドン、

ドンドンと足音は近づいてくる。……少女は強く願う。どうかこのまま通りすぎてくれば、それが叶うと思えなくとも必死に願つた。

「…………」

足音が止まつた。

少女は自分の後ろに何かがいる気配を嫌でも感じてしまう。大きな影が少女を覆つてゐる。自分の後ろにいる相手の確認なんて出来ない。怖くて振り返る事が出来ない。いや、そもそも振り返らなくても、少女は相手が何なのかわかつてしまつていた。少女を含めた皆が必死に逃げてゐる相手だ。

「にげなきや…にげなきや」

少女はただ其れだけを言いながら、震える手で体を動かして這うようすに影から離れようとする。お気に入りの服が汚れるのに構わず少しでも逃げようとしている。そんな少女の頭を何かの手が掴んで持ち上げた。

「いやー！いやああああ！！！」

持ち上げられる少女は暴れたが大きな掴む手は微動だにしない。少女の頭は持ち上げた相手の顔の近くまで上がつた。

「ひ！」

自分を掴んだ血管の浮き出た丸太の様な腕の本体を少女は見る。体重は少女の10倍は軽く越えそうな動物の頭をした怪物。オークといわれる魔物に似ていた。掴んだオーカの後方にも沢山のオーカも見えた。

銀座に突如として現れた化け物達。

銀座で殺戮を繰り広げてゐる化け物たち。

少女はオーカの持つた棍棒から血の零が垂れてゐるのを見てしまふ。そして更にオーカの口からも血の零が垂れているのも…。歯に服の切れ端が見える、人が着ていた服の切れ端が口にある。つまりは……少女はわかつた。

服を着ていた誰かの末路が今度は自分の番だと。

「――――!!」

少女は叫んで暴れる。少女はなりふり構わず暴れるが掴まれた手

はビクともしない。逆に少女の頭を掴む手に圧力は増す。ミシリと頭蓋骨の軋む音、少女の叫びが途絶える。か細いうめき声しか出ない。頭の骨が軋み少女の口の端に漏れる泡。次の瞬間、頭はまるでプロレスラーに掴まれたリングの様に：

グシャア

と破裂した。

スイカを割つたような音を鳴らし“オーク”の頭がザクロの様に破裂していた。

「うあ！」ドサツ

頭を無くしたオークの手から少女の体は落ちる。血の噴水、頭を無くしたオークの首から噴出する血が少女に掛かり、首を無くしたオークがドサリと倒れる。後ろにいたオーク達が後ずさつしていく。視線は少女の後ろを見て怯えている。これは、つまり、少女の後ろには……オークが怯えるような……

（なに…なにか、いるの…）

ガシヤガシヤと近づく足音。聞こえる足音の大きさはオークより小さい。しかし目の前の前のオークたちが逃げ腰になるような相手。いつたいなんなのか。状況のせいなのか、それとも後ろの何かのせいなのか、少女は呼吸が困難な程の圧迫感を感じていた。

「ヅギパビリダヂグゲロボザ」

言語のようだが少女が聞いたことのない言語。

謎の言語が聞こえてから一秒だろうか、一分だろうか。時間の感覚も曖昧になるほど緊張。目の前のオーク達も怯えた様子のまま動かない。怯えているのは：おそらく後ろにいる謎の言語を出した相手がオークの頭を破壊した。

オークの敵なのは確実だろう。だが、タイミングを言えば少女は助けられたとも感じるが……少女の敵なのか味方なのか。

少女を助けたのかかもしれない。銀座に現れたオークとは別の化け物の可能性も頭に浮かんでしまう。横取りする獲物として少女を奪おうとしているのかも知れない。

少女は期待と不安の狭間の中で恐る恐る振り返る。振り返りそこ

に居たのは…

(…人?)

何の光なのかは解らないが強い光が少女の方向に向いていた。強い光のせいで少女に見えたのは鎧を着たように見える人型の影。

人影は少女から見て大きいがオークより小さい。なのに…その存在感はオークとは比較に成らないほど巨大な何かと感じるのは少女の錯覚か。

少女にはわからない。それが緊張による錯覚なのか、本能に感じる何かのせいだつたのか。

影は手を上げた。

手には何も持っていない。

何なんだろうと不審に思う少女。

何をするつもりなのか…

何かは少女の後ろで起きた。

『!!』
「!?!」
「え!?」

突然後ろで聞こえた野太い悲鳴と熱さ、少女が慌てて振り替えると

⋮

「……もえ…てる?」

まるでトーチのように“オーク”が燃えている。逃げるのに必死だつた少女は気付いてなかつたが、それは…銀座のアチコチで発生している突然の発火と同じ現象だ。

そのまま短時間で多数居たオークが全て燃え灰と化す。燃えた力の臭いが少女にまた吐き気を誘発させる。瞬きする様な時間で自分を殺そうとしたオークが死んだ。そうオークは死んだ。

「……」

オークが簡単に死んだ。どうやつたか判らないが、タイミング的にどう考えても正体不明の影に殺された。オークの脅威は無くなつた。しかしオークを一瞬で燃やし殺した力が少女に降りかかるないなんて保証はない。

頭が破裂したオークの死体が目にはいる。此方も少女の未来だと
いう可能性もある。

影が少女に向かい歩いている。

影は近づいてくる。少女は再び通りすぎてれと願つた。今度も
強く願う。震えながら必死に願う。現実に幼い少女の願いを必ず叶
えてくれる優しさなんてない。しかし、優しさが無くとも願いが叶う
ことはある。

影は少女の横を通りすぎた。

「え」

思わず少女がそう漏らすほどに影はアツサリと少女の隣を通り過ぎ、少女を放置して進んでいく。少女の困惑した声が聞こえたのか影は少しだけ振り向く。すでに光の逆光は無く少女に影でない姿が見えた。

みえた姿は…人のモノと違つた

兜の様な頭には王を現すような黄金の角。
金の装飾で飾られた白い鎧を着た様な体。
顔は仮面の様だ。

それは怪人

人とは違う白い怪人。化け物達の仲間に見えたのか少女の顔に恐怖が浮かんだ。

怪人は興味がないのか少女を一別しただけで再び前を向き歩きだす。進む先を見て少女は氣絶しそうになる光景、先程より多くのオーケやその他多数の化け物たちがいた。

「…」

白い怪人は腕を前に向ける。すると無数の炎の柱が立ち上り化け物たちが燃えた。銀座の人々を襲つていた逃げ惑うしかなかつた化け物達が一方的に燃やされていた。

その光景を見た少女は…白い怪人が天罰を下す神さまにも殺戮を

楽しむ悪魔にも見えた。

宴が始まる数時間前：

ガタン、ガタン、ガタン。

電車の中は涼しいが外は暑い。こんな暑い日にどうかと思う白衣を着た彼は椅子に座り外を見ている。大学生ぐらいの年齢だろうか。見掛けは霸気が抜けた様にボンヤリした顔の青年。

「……あ、ここつて」

高校生時代の通学時に毎日見てた風景と似てる。”一度目の”高校の通学の時に嫌になるほど見てきた風景に似てるな。ホント似てる。まあ違うんだけどね。地名も路線も同じだけど似てるだけで違うんだよね。

移動時間は同じか。高校時代の通学が電車で片道で二時間、つまり往復で四時間。待ち時間とか除いて一日で四時間。それを高校の三年間、1095日、休みを削つて、通学回数にして、まあ8000としで、 $800 \times 4\text{時間} = \dots$ 考えんじゃなかつた。

“前の”高校時代で電車は懲り懲りだと思つてずっと乗つて無かつたし、電車移動は何十年ぶり。こんなのは久し振りだけど、今のこの気持ちを一言で言えば：

飽きた。

心底飽きる。

ダメだ。だいぶ久し振りでも電車移動なんて懐かしいと思えない。

懐かしさとか有つても五分も有れば消失するね。せめて電車が満員で暑苦しくて汗臭くなかったらもう少し長く感傷に浸れたのかな。

時間を無駄にしてると思えるのもマイナス点かな。ホント長い。ケチらないで特急にすれば良かつた。それかいっそのこと：力を使つて移動か。今さら考えても遅いか。

目的地の東京はもうすぐ

東京に行く理由はネットでの其なりに付き合いのある友人に誘われたつて理由。オタク御用達らしい即売会への参加。あんまり即売会自体には興味ないんだけどネットだけの友人と直接会うのには興味があつたから、たまたま暇だつたし行つてみることにした。

『———、降りの方は右手ドアが開きます。ご注意ください』

と、降りる駅だ。

人が多いけど出れるかな。登山用並みに大型のリュックを背負つて電車の外に出た。

帰りたくなつた。

外が暑い。それに人がスゴい。東京だからつて予想より人が多い……シャレにならない人がいる。満員電車の中と変わらない人の群れ。見てるだけで吐きそう。人混み揉みくちやにされながら勝手に移動していく。どうしようかこれ。嫌になるほど人が多い。どうにかこうにか人の流れから抜けた。人混みから抜けれた。抜けた場所で人も人が多い。

(見なさい。人がゴミのよう…ゲフン、ゲフン)

さつきの発言は、発言してないけど無し。人がゴミなんて思つてない。ゴミは掃除したいなんて事を思つた訳じゃない。言つてないしネタだし言い訳とかする必要とかない。それでも、不謹慎と言うか、今の自分だと危ういと言うのか：

まあ今はそんな事より、目的地につくことに全力を傾けないと……待ち合わせ場所の改札口に行かないと……いけないんだけど……目的の改札口は…………うん

そもそもその話だけど……此処は何処なのかな？

「……こ、かな」

よかつた。ようやく目的の改札についた。改札に辿り着くだけで大冒険をした気分、今更だけどもつと大変そうな即売会行くのが怖い。時間は、待ち合わせ時間にギリギリ。

幸い待ち合わせしてる相手は来てるかな。時間的にはもう居ても良い頃あいだけど……。

約束を破る人とは思えないし居るかな。まさか向こうも迷子になんて訳はないだろうし。誰か此方を見る。キヨロキヨロしてゐるから…あの人…がそうなのかな。

あの人…が?

本人を直接見たこと無いけどなんとなく本人だと思えるような気もする。此方に来た。比較的若者向けの服を着た30代に見える男性。着てくると聞いてた服装と一致、あの人…がネットでは自称自衛官の…どうなのかな。

確認するのに事前に決めといた待ち合わせの合言葉はある。あるけど、あの合言葉…人が居ない所でしか言えないよね。ここ人混み「……イエスロリータ」

真剣な顔付きで決められてた合言葉を言い出した。わりと人に聞こえる大きさで、もう間違いないけど合言葉の続きを言わないとダメかな。

「…」

言わないと駄目?

言えつて目をしてる。

しかたない。決めた事だし…

「ノータッチ」

「二次元ならゴータッチ」

お互いに真顔で言つた。

いや、うん、何してるんだろうね。この馬鹿な合言葉を提案したのは向こう。周りの視線になんて提案をしてくれたんだと思う。少しは楽しかったけどね。

「白野くんで合つてたか。良かった。本当に良かった。間違つてたらどうしようと思つた…」

冷や汗流してゐる。確かにいきなりイエスロリータとか知らない人に言つたらどうなるか。うん想像したらゾッとする。なんでこんな合言葉にしたのかな。ネット経由で合言葉を決めた時は問題だと全

く思わなかつた。ネットのノリつて怖いね。

「はじめまして伊丹さん」

顔を見たのも初めて…伊丹さんとの直接の顔合わせは今日が初。だけど、まあ初対面な気が全くしない。ネットでの付き合いは四年ぐらいだし。合言葉みたいなノリはネットでは何時もしてたし。

「はじめまして？……あー一応は初めましてになるのか白野くんとは」

御互いに苦笑い。どう

いだね。

「それにしても白黒くん思ってたより若いね」

「おおい、そこは思つたより若いだろう。ジックリ見てからフケてる

とか言うなよ」

いやだつて30代つて年齢聞いてたけど、ネットでのハツチヤケぶり的に若い感じが。数日前にもブルマやスク水について熱く語つてたりしたしね。

「まあ良いや、さて！ホワイトくん！」

「ハンドルネーム呼びは止めましょか。さつき白野くんて語つてしま
したよね」

ホワイトって安直なハンドルネームをリアルで言われると恥ずかしい。

「そう？では改めて白野くん！今日は遠い所から良くなれてくれた。今日は同人即売会と一緒に楽しもうか！」

伊丹さんがいきなりグツと拳を振り上げた。
そのままの体勢で止まつた。

一度手を下ろしてまた振り上げた。何を?こんな人が一杯の所で何してるんで?

ああそういうえばネットだと毎回（へー）／オー！とかやつてたかな。うん現実にやるのはダメだね。合言葉と違つて約束はしてないし今度はやらない。なので静かに見まもる。

「…………」

拳を上げたままの伊丹さんがチラチラ見てくる。やれと？ネットの乗りをまたやれと？ネットなら乗るけど、悪いけどリアルは二回も自爆するほどテンション高いタイプでないのでスルー。裏切り者みたいな目線もスルー。『こっち見んな』と返…まあそれは酷いから…

「なにこの人」

他人ですとアピールする。

「うおい！それは酷いだろ！」

伊丹さん不審人物的な視線で見られてるし。彼処から通報しようか相談しててる鉄道警備員。ほい人が見てるし仕方ない。

「……くつ！！：楽しもうか!!」

え、またやる！ツツコミしたタイミングで止めないの。本気で反応に困る。意地になってる。なんで意地になるのか。

「楽しもうか!!」

自傷をする姿は痛々しい

そんな事をされたら『ハシャグ、自称自衛官のオタク中年ww』と題名つけて動画投稿したくなるよ。それが『鋼メンタル自ーー』

「……行こうか」

「そうですね」

意地をみせて一分ぐらい痛い空気に晒されて伊丹さんはようやく諦めた。心臓に毛でも生えてるのかな？さて、こつそりスマホで撮影した動画は後で……。

「撮ったの消してくれよ」

「了解」

目敏い。さすが自称自衛官と褒めるべきか。仕方ない消そうか。まあ他の人にも撮られてたし意味はないと思う。親切にも撮影されてたの教えた。自称自衛官はわざとらしくサメザメ泣くように顔を覆つて遠い地平の彼方に沈みたいと言いましたとさ。めでたしめでたし。

「めでたくない」

気にするなら伊丹さんは中学生みたいな事しないでほしい。伊丹さんは今年でもう33でしかも…既婚者。（自称）奥さん持ちとか言つてたね。

奥さん持ちで即売会に来る。伊丹さん年齢考えろ…つて年齢のことを考えたらブーメランか。ある意味で30半ばの伊丹さんよりも年上だから、意識があつた年数で言えば50代は越えてる。

ボクは前世の記憶もち。中二な病氣的なモノでなく本氣でボクは転生したヒューマン…たぶんヒューマン。因みに転生については輪廻転生みたいなモノでなく、転生は神さまのお陰？

神様なのかな…恐らく神様だと思う、転生させてもらつて、あと転生した時に力を貰つた。つまり神様転生。神様転生と言えば物語の世界への転生。この世界、転生先はゲートとか言う作品に酷似した物語の世界と教えられてた。

教えられて意味が有つたかと言えば……うん、前世の世界にあつた物語としても…肝心の作品を見たことがない。物語は知らないけど転生前は危ない物語世界だと思っていた。転生する時に力を貰えたの危険だから渡されたんだと思つてた。

思つたのに……全く平和な世界。

前と同じ地球で日本で平和に見えても何かが有るんだと思つていただけど、2度めの小学校入学から始まり、魔法少女とかには出会わざ小学校を平穏に卒業。そのまま中学も平穏無事に無事、そして一番なにかありそうな高校までも平穏無事に卒業。ファンタジーに巻き込まれそうな王道な学生時代は何の波乱もなく過ぎ、もう成人するぐらい時間が経つたのに何にもなし。酷い肩透かしを喰らつた。

本当に物語のある世界なのか疑うのも仕方ない。日常系の物語だつたなら気付かなかつた可能性もあるかな？聞いてた物語の名前のゲートつて名前的に日常系は無いと思うけど、日常系だつたのかな。

ゲートつてどんな物語だつたのか。映画でゲートつて作品があつた記憶がある。別の世界か遠くに繋がるゲートつて門がある作品。舞台が地球でないとか？物語の主人公が別世界に繋がるゲートで

別世界に行つてたりするとか……物語には関わらないのかな。

何にしても本当に何事も起きないし。平穏な2度目の人生を送れそう。ホツとすべきなんだろうけど……ひどく残念と思えるのは危ういかな。

「考えてみたらさ、ゲームの一週目とか強くてニューゲームって、チート転生系の始まり？」

時刻は10時過ぎ、目的地に行く前に銀座を観光をしてると、伊丹さんがナゼか唐突に出した話題、伊丹さんがゲームの一週目とか言い出してビクッてきた。話題がちょっとね。自分がリアルに体験中な事に気付いてないよね？

「どうなんでしょう。始まりとか言うなら、死後に復活して凄くなるつて事で、チート転生の始まりはもつと昔の死後に復活するキリ⋮」

「よしその話題やめよう！怒られそうな感じがするからな！」

「そう言うものなのかな。

「じゃあ話を戻して強くてニューゲームと言えばスパ○ボですよね」

「スパロ○なの。俺としてはクロノトリ○ーかな。周回の回数で言えばスパロボだけど」

スパロボ、前世でも今世でもやつてる作品。因みに伊丹さんにスパロボをオススメしたのボク……

「スパロボで周回は何回ぐらいします？」

「大体一周くらい？主人公機でスーパークリアルで一回ずつ、4周やる場合もあつたな。主人公が4人の時は⋮」「主人公全員分りますよね」

第三次は面白かったけど……キツかつた。

「周回やり過ぎると迷走しますよね」

「例え？」

「使わないユニットやら最弱ユニットの育成とか、二軍だけの部隊で出撃、ほかには嫌いな敵を弱い攻撃でチマチマ削つて、手加減で10まで削つて、それで最後は公用無いのに無傷の全員で囮つて脱力、必

中、魂掛け最強技のオーバーキルとかやりました」

一桁まで削つたこともあつたなあ。面白いとは思つたけどあまり楽しくはなかつた。やつぱり楽しいのは一周目の対等な戦闘の時だよね、一回で十分かな。周回も人生も

「やだ光景想像したら完全に敵側より悪党側だわ」

敵側より悪党、ちょっと刺さる言葉。

わりと楽しいけど、銀座を歩きながらお互い何でネットで話してることと同じ事を話してゐるのか。オサレな町に場違いな感じがスゴい。人混みで殆んど銀座がどうなんて見えない?田舎者にとつては銀座つてだけでオサレなんだ。

「そう言う伊丹さんは何かしませんでした」

「オレか?オレは…あーー俺もボスキヤラはしこたま改造した三軍キヤラに倒させたりするな。雑魚とか言つてた機体にボコボコにされて倒されたボスとか想像したら面白いし。リガズイどころかジエガンでササビーを倒すみたいな。情けないMS以下に負けたシャ○乙」

「((この人、歪んでるわ))」

何処からか同類だろうと言う声が?気のせいか。そんな感じで伊丹さんと銀座を見学しながら雑談。楽しいんだけど、20代と30代の男が休日に男二人。片方既婚者、休日でカツブル多い。カツブルを見ると謎の敗北感が。

「白野くん、背負つてるの登山行きみたいにリュックだけど、買い込む気か。体力大丈夫?」

「ええまあ大丈夫ですよ」

信用していない顔だ。見掛けはそんなに体力無さそうだし信用できないかな。本当に大丈夫なんだけどね。

特にこれといった運動はしてないけど、力の影響が素の肉体の方にも影響が出てるからね。人を逸脱したレベルで、あと誤解されてるけど別に訂正は良いか。リュックは買い物と言うより持ち運び用。：なんで今回に限つて無理矢理着いてきたのかな。

ん?

「どうした白野くんいきなり向こうを見……向こうから何か聞こえるな？」

「聞こえますよね」

騒がしい沢山の声。騒がしいのはずっとだけど今までとは声の種類が違う。怒号やら悲鳴が混じってる。事故か通り魔でも出た? 「なんだろな。何か起きてるのは確実なんだけど」

「まさかテロとか」

「それは……ないよな?」

冗談で言つたのにもしかしたら有るかもつて反応をされると困る。ほんと何かな。おさまるどころか騒ぎがさらに大きくなつてる感じがする。

「うーん此処で考えてもわからんし確認してみるか……」

気にはなる。けど漫画で有りがちな野次馬モブにはなりたくない。だから野次馬みたい邪魔にならずに見れそうな場所は……

「彼処のデパートなんてどうです」

上の階がガラス張りで外が見えるタイプ、彼処からなら野次馬になつても邪魔には成らない。

「彼処なら良いかもな。よし! あそこに行こうか

「ではお先に」

「はや!」

何が起こつてるか気になつてたから伊丹さんを置いてかない位の急ぎ足で向かつた。

さて着いた。

「はあはあ……早すぎ……息切れしてないし。し、白野くんお、オリンピック出れるんじやないか。で、……なにが起きて……ん??」

伊丹さんとデパートの中に入つて上から騒ぎのある場所を見た。

「?」

ちよつと理解できない光景がみえた。

「…………なんだあれ??」

数秒沈黙した後に伊丹さんから出た言葉が其れだつた。伊丹さんの言葉に全面的に同意するしかない。デパートの窓から見える光景

は…なんだあれ。

先ず見えたのが道の真ん中にある可笑しな建造物。少し前に通つたんだけどあそこに門なんてなかつた。話しながら歩いてたけど流石にあんなの見過ぎとかない。突然現れたとしか考えられない？上から落ちてきたのか、下から生えてきたのか、ワープみたいな事なのか。門の近くの地面に大きな損傷とか見えないしワープ……？

「伊丹さん」

「な…なんだい白野くん」

「東京つてスゴいですね。あんな建物がいきなり建つなんて地元では有りませんでしたよ」

「イヤイヤイヤ！ 東京でもあんなの普通は無いから！」

勿論伊丹さんに言つたのは半分は冗談だよ？ 天然ボケではない。念のための確認でやつぱり常識的な物件では無いと。あんな門ぽい建造物が多分東京の往来に突然現れるなんて”現実的”には有り得ないと…なるほど

現実ならあり得ない。

転生の時に聞いた『ゲート』

ゲート＝門。

うん、どう考へても聞いてた『物語』が道路の真ん中に建つたあの門ぽい建物関係ある。なかつた場合の方が意味不明。まさか二十年も経つてから、しかも偶然来た東京で、この世界の物語要素に出会う事に成るとはね。偶然にしては出来すぎでないかな？ 東京に誘つたの伊丹さん、伊丹さんは神様の手先とか？……ないか。

なんにしても物語の始まりつて感じがする。改めてゲートつて一体どんな物語だつたのか気になる。ワクワクする。知らない方がよかつたかな？ どんな物語か知らないからこそ一体何が起こるか楽しめる感じもする。この世界でどんな物語が繰り広げられるか楽しみだ。

不謹慎か。

物語にあるのは夢と希望だけじゃない。むしろ盛り上げる為に理不尽な不幸がわりかし多い。見てる分には楽しくても現実にはあつ

てほしくない物語の方が多い。どうやら門から“出てきたモノ”を見ると多くの人にとつて現実にはあつてほしくない部類：

ようやく自分の目の前に現れた楽しみにしてた物語の始まりは：

随分と…

血生臭いね。

闘争

東京銀座

戦後からは平和な時が続いていた日本、日本の首都の東京で尤も栄えている地区の一つの銀座にこの日訪れたのは混沌。まるで長く続いた平和だった時の反動が纏めて来たような争乱が、何の前触れもなく突如として起きていた。

伊丹と優男と言った風情の大学生ぐらいの青年、白野はデパートの大きな窓から外を見ている。白野の無自覚に浮かべる表情、銀座で起きている光景に薄く笑う口、銀座の騒乱を楽し気に見る目……伊丹は隣にいる年の離れた友人の場違いな表情に気付くことは出来なかつた。

もう淡くしか思い出せない前世に生きていた頃の白野の記憶。まだ正真正銘見かけ通り幼かつた頃、親は共働きで幼い頃から家で一人で居ることが多く。白野は家でよく一人でテレビを見ていた。見ていたのは年相応にアニメや特撮系作品等の子供向けのもので、特にヒーローや怪人が出てくる空想の作品を良く見ていた。作品の影響からか白野は子供心に何時も大冒険の様な世界を体験したり、ヒーローと会いたいと思つたりした。子供としては普通だ。子供の多くは白野と同じ思いを抱くが、大人になる頃には現実を知り忘れているだろう。白野も大人になる頃には忘れていた。

そんな白野は1度生を終えた。

白野の魂は神の様な存在に出会い前世の記憶を持ちながら転生することになった。さらに二度目の生では、力を持つ事になつた。死後に自身が幼い頃に出会いたいと思つていた空想の存在へと成り果てた。そして転生したのも物語の世界と教えられた世界。同じ地球としか思えない世界。しかし白野は元の地球の様でも幼い頃に夢見た物語の世界だと信じた。しかし白野は元の地球の様でも幼い頃に夢見た物語の世界だと信じた。その内に物語と遭遇する。物語の主人公であるヒーローとも出会える。前の現代と変わらない世界も、物語に

よつてどういう風に世界は変わるとかと期待して楽しみにして生きてきた。

しかし二度目の生が始まってから20数年にもなると、何時か物語と遭遇すると思いながら白野が生きたのは前世と変わらない平凡な人生。もうすぐ社会人、物語と遭遇するのは学生時代だと思っていた、もう物語と関わる事は無いのではと思っていた。その思いは間違っていた。

銀座で物語の始まりとしか思えない出来事と遭遇する。前世の幼い頃に夢にまで見た物語と遭遇したとしか思えない事態に白野は：

とても喜べない類いのモノだと、今自分が無自覚に浮かべた表情を知らずにそう思った。

周囲から漂つてくる濃い血の匂い。人の悲鳴や断末魔のような叫びが辺りから聞こえて、人が襲われ人の体から出た血液で銀座のビルも道も朱に染まつていく。今の銀座に広がる景色は……テレビならモザイク加工で画面の全面が見られない様な悲惨な光景と成つていた。

老人も幼子も女性も亡くなっている。凶悪事件、それも何日も連日放送される様な猟奇的な殺人事件。無差別の通り魔殺人など、犯人の残虐さに死刑を求められる様な事件。悪い意味で日本の歴史にも残る様な事件の犯行を何百倍にも規模を大きくした様な残酷な光景が、少し前まで平和だった銀座の街に広がつている。治安が良いと言われてた日本の姿が見る影もない程に変わり果てている。今の銀座は混沌の坩堝となつていた。

銀座に突然現れた門の様な建造物。その門からワープするのか続々と出てきた存在が銀座で暴れている。中世の兵士のような人居たが他にもトロル、オーケ、ゴブリンに見える魔物としか言えない生き物もいる。空を飛ぶ翼竜、ワイバーン、まるで童話の生き物が飛び出してきているようだ。

童話の中にだけ存在した生き物達が銀座に居た人達を無差別に殺戮をしている。内から沸き立つ思いを意識しないようにビルの窓から見ながら白野は冷静に考えた。

襲つてる理由は…みたままだろうか？

国旗の様な旗をもつてるので何処かの国か組織に所属してゐる兵士。国家に所属する兵士が攻めてくる。有り得るのは今行われてゐるのは略奪目的か侵略戦争。想像の翼を広げれば他の答えも出そうだが、侵略者という認識で良いだろう。

つまり日本は何処かの国から…侵略戦争をしかけられ日本人が虐殺されている。二度目の人生の祖国が侵略を受けている。そう認識した白野だが怒りは特には感じない。ただ惨劇を他人事の様に見ながら自分はどうするべきか考えていた。

教えられた物語の始まりと思える事態にどうすべきか、白野は生まれた頃は物語を見たい。場合によつては関わりたいと思つていた。なら実際に目の前にして何かすべきか…関わるとすればどう関わるか…

当然だが銀座事件を見ながら考へてゐる事ではない。倫理観もそ
うだが自身の命の危機。普通なら他の人達同様に逃げる事しかない。
普通なら此処から逃げなければいけない。しかし白野は普通とは言
えない。白野には力がある。それこそ殺戮をしている侵略者を見て
も極自然と脅威と感じない程の力。

白野としては物語と関わりたい。そうするとどう関わるか。思
付くのは…見学を続けてただ物語を外から見てるだけか。それと
も積極的に物語に関わるとして…地位も立場もない力が有るだけの
一個人で出来ることは……個人で戦いを挑むぐらいか。

白野は喧嘩すら前世を含めてただの一度もない。身に付いた力を
使つたことすらもない。力が使えるのか。力が使用ても素人が戦え
るのか。負けて自分が死ぬかもしれない。生き物を傷付け殺せる
のか。こうした本来なら有るべき不安や恐怖は不思議に思うほど感
じない。…戦う事に対しても不安や不快をまるで感じないどころか、戦
うと考へると高揚感まで感じていた。

ある作品の物語のキャラクターと同じ姿。姿が不味いと試しにでも力を使ていなかつた。しかし……参加しないのは勿体ないと思えた。

「あーもう!」れだと即売会中止だ!」

隣から聞こえた場違いな声。

(あ……隣に伊丹さんが居る事を忘れてた)

うん台詞がスゴい。ボクが思うのも何だけどそこを気にしてる場合かな。伊丹さん図太い。

伊丹さんをどうするかな。離れない方が良いよね。なんか離れたらアツサリ死んでそうな気もするし。物語云々より、まずは友人が優先かな。…………まあ、騒ぎは直ぐに終わるわけでもないだろうし。逃がした後でも十分……十分、伊丹さんを逃がしてからどうするか改めて考えよう。

でも出来ればこう言う時は一緒に逃げるのは可愛い女の子が良いかな?贅沢言つてられないか。グズクズしてたら不味いし。空の竜とかもう間近まで近付いてるし早々に逃げよう。今の身体能力なら素でもあれぐらいの竜なら倒せそうな気もするけど、倒したら不味いって意味で不味い。今はまだ我慢しないと……何を我慢するんだろう?

「残念ですがまた来年つて事で今は逃げましようか」

「あー」

伊丹さん何で頭を搔いてるんだろ。逃げるのに迷う要素なんて無いよね?結構急がないと不味いんだけど、空の竜もそうだけど下から來てるのも結構近くなつて來てる。

「白野くん、悪いけど一人で逃げてくれ」

「ん?伊丹さんはどうするんです」

伊丹さんが苦笑してる。

「俺つてこれでも一応自衛隊員だしこんな現場から逃げるのは不味い

んよ。戦う事は出来ないけど避難誘導ぐらいはできるからちょっとやつてくる」

伊丹さん、自衛隊員つて本当だつた？ネコミミメイド服について激論を交わしてた伊丹さんが。本当に自衛隊の……じゃなかつた。そこは今はどうでもいいんだつた。

「避難誘導に俺はいくけど……つて」

ボクを見た。

手伝つてほしい？

「白野くんを先に安全な所まで送らないダメか…避難誘導するつもりしそこに、いや、下手に外に行くより建物の中に隠れてる方が良いのか…いやアイツらが出てくるあの門の近くだし不味いか…」

違つた。ボクの事で悩んでるのか。

友人としてはありがたいけど…

「伊丹さん一人で何とか逃げますからボクの事は気にしなくても大丈夫ですよ」

「…い、いやいや、大丈夫つて銀座にきたのも初めてだろ」

「大丈夫ですよ。逃げ切れるぐらいの足の早さはありますから」

さつき伊丹さんに足の早さは見せたから説得力はある。

「…………わかつた…たしかにあの足の早さなら一人で逃げた方がいいか…白野くんうまく逃げてくれよ！あとそのリュックは絶対に邪魔になるから置いて行きなよ。後でネットの何時ものところで！」

結構の間を開けた後に伊丹さんがそう言うと駆け出した。最後まで心配そだつたなあ。まあ友人としては嬉しいけどね。

それより本当に伊丹さん避難誘導しに行くつもりなのかな。別に本物の自衛隊員だからつてこんな状況なら逃げても問題ないと思うんだけど、自衛隊ならそれが普通なのかな。普通なわけ無い。友人として助けたい。けどそうなると…

「うーん、なんというか…厄介」

全く厄介な友人をもつたと思う。厄介だけど、好感度的にはだいぶ上がつたんだけどね。：男への好感度なんてホモでもないからあん

まり上がつて欲しくない。

さて伊丹さんが見えなくなつた。

伊丹さんには悪いけど逃げる気はない。

路地裏方向にある非常階段のドアに向かう。鍵が掛けられてたらから蹴破る。路地裏にある外に出たら人目が無いことを確認したら：其処から跳んでデパートの屋上に…シユタと着地は成功。シユタをショタつて聞こえたなら病院に行つてね。

何メートル跳んだかな。

自分の中身がどうなつてるか考えたくないね。

デパートの屋上から眼下を見渡す景色は…

なんとまあ…：

更に見渡せる所から見たら予想より凄まじい事になつて。所々真っ赤。沢山悲鳴が聞こえる。まるで町全体がホラーハウスかな。そんなに時間も経つてない筈なのにあの門から来た侵略者が相当に広まつて。門は一つしか無いみたいだけど、侵略者の数が予想よりも多い。オマケに増援も来てる。侵略者の出入りはあるの門一つだけ：あの門を壊したら増援はこない？

壊すのは：不味いかな。

あの門は転送装置みたいなモノだらうし。転移に相当なエネルギーが必要のはず。そう考えたら門を壊したらエネルギーが暴走して銀座ごとドカン!!が無いとも言えない。某仮面ライダーの怪人みたいに倒したら大惨事みたいな事が起るかも。なら門を制御する装置を探す。制御をする装置が存在しないかもしれない。あつても装置を操作出来ると思えない。門はどうにもできない。
まあ何もしなくても…。

警察の人とか頑張つてたけど今は日本側の一方的な敗退。それでも最終的には日本の負けはないとは思う。侵略者は身の程知らずとしか思えない。兵士の武器は槍やら剣やら弓矢やら中世レベル。魔物みたいなのは大型のを除けば拳銃ぐらいでなんとかいくてる。大型のも重火器の軍隊相手に勝てると思えない。あくまで奇襲で民間人を襲つてから被害が酷いだけ。何もしなくともその内に撃退さ

れて終わる。相手側にすごい切り札でも無ければ

伊丹さんは何処かな。避難誘導するなら、避難される人の流れがある場所に居る筈。あれかな。一定の方角に人が進んでる。人の流れを遡ると…伊丹さんが居た。

本当に伊丹さんは避難誘導してる。警察とか他の人達とも協力して避難誘導をしてる。指揮をしてるのは伊丹さんぽい。伊丹さん案外リーダーシップがあるのか。避難に協力してる人や避難誘導されてる人達、伊丹さんが薄い同人を買いに来たと知つたらどんな気持ちになるかな。終わつた後に伊丹さんと最初にあつた時に録つた動画を是非とも見せたいな。そんなことも今はどうでも良いか。

避難つて何処に行くんだろ。アレだけ避難民を受け入れられる大規模な施設で防衛に適した場所つて…何処がある？

銀座に詳しくないのも有るけどそんな都合が場所か建物なんて想像つかない。伊丹さん達の避難誘導で向かう先は、方角的に…ある方角にあるのつて…皇居？

え、あそこに避難しようとしてる？

方角的に皇居しかない。スゴい方向に向かわせてる。良いのかなあれ？堀もある城みたいなモノだし：防衛にも避難にも適した場所とは思えるけど、許可とかどれるの？許可でないと行き止まりに誘導してる事になるけど

避難先とか伊丹さんの独断？

それか他の人が提案したのかな。

もし伊丹さんなら決断力すごい。

あ、竜に伊丹さん空から狙われてる。警察の人の射撃に伊丹さんはギリギリ助けられた。ボクが動く直前なぐらいのピンチ：映画のシーンをみた気分と、友人が無事でホツとした。

伊丹さんはまだ避難誘導してる。まだやるんだ。さつきのは本当に運が良いだけで紙一重だつたと思うんだけどな。伊丹さんと同じ様に狙われて殺された人は何人も見てる。怖くないのかな。今のボクだと怖いとは感じないけど、仮に力が無い前世のボクが同じ立場だつたら…他の人みたいに逃げるかな？逃げてるとと思う。

伊丹さん何でやつてるんだろ。

自衛隊としての使命感…は無さそう。職業的な事で命をかけるとか伊丹さんはそう言うタイプではないと思う。命知らずでも熱血でも正義感が強いつてタイプは絶対ない…ならなんでかな?何となく動かすにいられなかつたとか?これが一番シックリくる。

伊丹さんって意外とヒーロー気質だつたのかな。伊丹さんがヒーローって言うとスゴい違和感あるけど…とにかく伊丹さんはスゴいって認識は持てる。

伊丹さんは避難が終わるまで逃げれるか。このままで生き残れるかな。ヒーローみたいな行動をして生き残れるのはアニメや漫画の世界ぐらい。正義が生き残れるのはフイクションだけ…この世界つてそれに近いのかな?主人公なら多分大丈夫だろうけど…主人公じやないと…改めて友人として手助けをしたいと思う。
どうしようか。

直接助けるか…間接的に助けるか。

どちらにしても戦う事になる。友人への手助けとして戦う…元から戦う事に忌避感は無いし。物語に私的に関わる理由も有る。姿で騒がしくなる程度は…大丈夫?…だけど、何なんだろうな。踏ん切りがつかない。

何となく周りを見回してると視界の端に小さい男の子が見えた。親とはぐれたのかな。…男の子にワイバーンが近づいてきてるのが見えた。

口が開いてる。

文字通りの獲物として少年を狙つてる?

悲惨な結末は予想できるけど、これまで何度も似た光景を見てなにもしなかつた。今回も動こうとは考えなかつた。けど友人の伊丹さんが命がけで頑張つてるのを見た後だ。

反射的、咄嗟つて言うのかな。気付くと手を翳して男の子を助けるのに”力”を使つていた。

!!「??」

侵略者はワイバーンごと燃えて燃え尽きて男の子は助かつた。正

直助かつた事はどうでも良いと思つた。それより自分が助けた事に困惑した。

「…………」

自分の腕を見る。
白く硬質な腕。

なんで助けたのかな。友人の行動に感化されたのかな？

この腕や力は“人を助けるようなモノじやない。自分は善人とは言えない。友人を助けたいと思った事に嘘はないけど、それ以外の人々が襲われているのを見ても自分でも不気味に思うぐらい感情が動かなかつた。だから特に助けたりしなかつた。

ボクは日曜の朝に放送される様な、人を助ける特撮のヒーローが格好いいとは思う。見てる分には好きなだけで、なりたいと思った事は一度もない。だから転生の時に白と黒どちらかの力かを選べて、白を選んだ。黒のヒーローとは真逆の力を望んだ。

なのに助けた。

やつぱり友人の伊丹さんへの手助けとしてかな……それか前世の感覚の名残か……まあそんなことよりも重要なのは：一度やつたしもう良いかな。

それに正直：力を使うのは悪くない氣分だつた。ボクは戦いに対して興奮する様な性格じやないと思う。むしろ喧嘩も避けるような質……自分に予想外な一面があつたのか、力の影響が精神にも来てるのか。

動くと決めた。
戦うと決めた。

理由は友人の手助け、物語に関わる。それと東京まで遊びに来たのに台無しにされた怒り。それと何よりも……思うまま戦うのに力を使つてみたいって欲望が何よりも一番大きい。理由に人を助けるつて理由はない。利己的だ。けど結果的に助かるなら他の人にとつても悪くないよね。

やろうか。

戦う意思に呼応して腕だけじゃなくて全身が“変身”していく。人とは違うモノになつていく身体……身体は人外にかわつて……心は：何時間も並んだ遊園地のアトラクションによく乗れる直前の様な感じだ。…これ不味くないかな？

な、何が起きてるんだ。あの魔物はなんだよ……なんて……俺が死ななきやいけないんだよ。

食われた！おれの腕が……こんな死にかたはイヤだおあ！！

誰か……だれでもいいから……誰かたすけ……！

街に突如出現した門、門を通りこの世界の外からやつてきた侵略者が銀座の町に解き放たれる。侵略者は魔物や飛竜、そしてそれらを従えた馬に乗り鎧兜を着て剣や槍を装備した中世の時代の様な人間の兵士達。侵略者は物語りの中の世界にしか存在しない幻想の様な軍勢。幻想は人の思い描く様な楽しい夢でなく血みどろの悪夢。

異界の侵略者、彼等は銀座の街に突如進出すると言語の判らない言葉で宣戦布告。魔物も人も目に付いた一般人を容赦なく殺し始めた。女子供でも気にせず容赦なく次々に殺す。一般人には逃げる事しか出来ない。一部警察が抵抗するが蠍之斧、兵士や魔物によつて狩りの獲物の様に命を狩られ増えていく死者の山。戦後何十年、平和だつた銀座の街は地獄と化す。

殺戮をする侵略者の一人は思った。

ハハハハ!!調査から判つてたが、この世界の人間は弱い。弱すぎる。其処らの農夫にも劣る。建物ばかりが立派では意味がないな。これならこの世界なんて他の國の様に帝國の力で簡単に征服出来る。この戦いは異なる世界初の勝利と讃えられるだろう！俺達は伝説の英雄たちとして語られるんじやないか！それに上手く一番の武勲上げればこの土地を貰える可能性も出てくるか？いや無数にある建物

を1つ貰えるだけでも良いな。モツト手柄を！俺が一番この弱小蛮族共を駆除してやる！はは、それにしても情けない奴等だ。こんな簡単な狩場は早々ないなあーー！！

強者の立場で虐殺を続ける兵士。相手は蛮族、彼等のルールでは弱者は殺しても問題ないと虐殺を行つてゐる。自分達こそが弱者だと欠片も思つてはいな。

「ハハハハハハ!! 蛮族よ！ 少しは反撃したらどうだ」

彼は逃げるだけの男性を背後から槍で突き殺す。男性は体に穴を開けて倒れ伏す。彼は生温い返り血を浴びる。兵士は自身の強者の証し、そして手柄を立てた証しとして人の血を浴びる事を悦んだ。男女関係なく獸を殺す様になく殺す。その度に沸き上がる自分は英雄だ最強だと感動に身を震わす狂気の全能感。

「…お…おかあさん……」

兵士は親とはぐれたらしい少年を見付ける。それはまだ十歳にも満たない幼い少年。

兵士が次の標的として狙う。

今は無力でも少年が大人になつた時、力をつけて復讐をしてくるかもしれない。将来の禍根を消すために殺す……なんて真つ当な理由何てない。兵士は理性がとび殺戮の狂気に犯されている。残酷な事ほど殺人鬼と化した兵士にとつては喜びとなる。

肉を食べる為でなくただ獲物をいたぶり殺すために狩りをする狩人。絶好の哀れな獲物（少年）を見て笑う。槍で突き殺そうと思つていたが、騎乗しているワイバーンが腹がすいたと鳴いた。

兵士はより深く笑う。食事をして良いと言う意味を込めてワイバーンの首を叩く。歓びワイバーンは口を開き少年の元に向かう。少年は絶望に顔を歪める。それを見て感じる喜び。兵士は、いや殺人鬼は殺戮に酔いしれ興奮し体温を上げていき遂に——燃えた。

少年を喰らおうとしたワイバーンごと文字通りに燃えた。

今まで一方的な殺戮をしていた殺人鬼とワイバーンは突然体内から噴出した炎に包まれ、ワイバーンごとそのまま悲鳴を上げる事すら出来ないで焼死。肉が残るどころか骨も残らずに全てが灰となる。

身に着けていた鉄の装備ですら同じだ。まるで神からの罰を受けるかの様に一人の殺戮者は骨すら残さずに消えて無くなつた。

「…な、何がおきた!？」

目撃した馬に乗った騎士は困惑しながら周りを見回した。元凶になるような何かがないかを探した。兵士が燃え尽きた後に残つた灰が風に飛ばされる。それが偶然なのか焼死を目撃した騎士の元に向かつた。

「…う！」

灰を被る。同僚の名残が口や鼻にも入り身の毛もよだつ嫌悪感を感じた。騎士は灰を振り払おうとするが、灰はまるで一人で逝くのは嫌だと言いたげに騎士の身体に纏わり付き——

——その騎士も燃えた。

周りには兵士や騎士が複数居たが騎士が燃えた事を誰も注目していない。周りの彼等も同じ被害にあつていたからだ。

無数の炎の柱。

空や地上の人々が魔物の目や口から突然火を出し、そのまま灰となつていく。彼方此方で火の氣も無い地上や空中でも関係なく突如体内から燃え上がつていた。

「な、なんなんだ!? この炎は!？」

「蛮族どもの反撃!？」

「どうなつてるんだ! だれか説明しろ!」

「ひ、卑怯な! 姿を見せろ!」

侵略者達に襲い来る見えない未知の恐怖。謎の発火現象は人だけでなく魔物にも起きている。殺戮を行つていたオーガがゴブリンの群れが、例外なく無数の火柱を上げ燃えていた。

銀座の一角を明るくする松明、命を燃やす無数の炎の柱、火の柱の数は波紋が拡がる様に拡大している。そして突然襲う炎の恐怖に混乱し軍勢としての秩序を無くしていく。統制をとろうとする有能な兵士も居たが、そう言う兵士はまるで狙われたかの様に他より先に燃やされる。

発火は蛮族の攻撃だと人質として現地の人間を盾にする兵士がい

た。人質をとつた人間だけが燃やされ人質の意味がない。

敵が見えない。

指示する人間が燃やされる。

どうすれば良いのか。

侵略者はこれまでとは逆に自分達が理不尽な猛威にさらされたことになる。殺戮をする余裕もなくなり被害を一方的に受けたしかない。また一人、一人と、兵士が燃えて灰だけを残して消えていく。

「あ、ああ、こ、こんな、こんな事が出来るのは…」

震え涙を流す兵士がいた。彼はこんな理不尽な現象を起こせそうな存在の名を口に出してしまう。

「か、神よお許しください」

その謝罪は神ではなく周りに伝わってしまった。

か、神だと

発火は神の仕業なのか!?

この世界の神：か？

俺達はこの地の神を敵にしたのか

染み渡る様に広まり伝播した。迷信ではなく神が目に見える形で存在している世界の侵略者、神の恐ろしさも知る侵略者達。敵対してはいけない相手を怒らせたのかと、逃げ出す人間やその場で膝まづき赦しを請う人間までいる。

しかし、こうして恐怖に屈したのは全体から言えば極一部だけ、発火の起きてない所では侵略者による殺戮は続いていた。

ビル街の一角、人が多数集まっている其所にゴブリンの様な生き物やオーネクの様な生き物達が突入してくる、集まつた人は悲鳴をあげ怯えているが何故かその場所から逃げようとしない。

突入してきた生き物たちは燃えた。

「燃えた…な」

「あ、ああ、た、助かるんだけど……なんで燃えたんだ」

先程から同じ現象が起きている。燃えるのは魔物や兵士だけという銀座の人にとって安全地帯、だから人が集まっている。人々の顔にあるのは不信感。

燃える相手を考えると発火は意図的なモノとしか考えられないが、どういった意図なのか集まつた人の誰も知らない。誰かの仕業として自分たちの味方なのか。燃やされてないのは偶々で後になつて自分達も燃やされるのかもという不安がある。しかし少なくとも今は他よりは安全なのは確か。他は地獄。移動する人間はない。

そんな安全だが安心は出来ない場所で一人の青年が上を見ていた。飛んでいる竜でも見付けたら視点は動く筈だがその視点は一点に固定されていた。

「あれは…」

青年の見ている先、ビルの屋上に何かが居る。青年に釣られる様に周りの人も同じところを見た。ソコに居た相手を見た人は警戒した様な顔か困惑した様な表情をみせた。

屋上に居るのは白い鎧を着たような怪しい人。

「なにあれ…コスプレ?」

「あの人…こんな時になにしてるのよ」

「襲つてきてる奴等の仲間じゃないか!?!」

「何処かで見たことが有るような」

反応に連鎖する様に徐々に見る人が増えていく。正体がわからないうが一部に鎧を着てる様に見えることから兵士側と疑惑を持たれたようだ。

「な、なああの手が向いてる方向見ろよ！」

白い怪人は手を翳していた。

手を翳した方向を見ると竜や魔物の体内から火が噴出し燃えていた。どう見ても発火は白い怪人こそが謎の発火現象の発生元。

「…ま、まさか」

中年男性が人は震えるほどに驚愕をしている。あの姿に…謎の発火…。特撮好きな中年男性の脳裏には…あるキャラクターが浮かんでしかたない。

中年男性の他にも同じ特撮のキャラクターを知っている人はいるようだ。

「…超自然発火現象…だよな？つ、つまり…」

「……あ、あれが出来るつて事は……ほ、ほんもの……本物なら……銀座どころか……終わるぞ……」

彼等が知る特撮のそのキャラクターは……

『ン・ダグバ・ゼハ』

平成仮面ライダー『仮面ライダークウガ』のラスボスであり、歴代仮面ライダーのラスボスの一角。三万人もの人を殺した白き闇と呼ばれる災厄の様な怪人。

飛龍

物語は極々単純な王道物語が好きだ。

子供向けに良くある正義が勝つて悪がまける勧善懲惡の物語。具体的に言えば日曜にあるヒーロー番組みたいな悪を倒せばハッピーエンドな単純明快な物語。見ていてスッキリする。正義のヒーローと敵対する相手は悪、それか倒すしかない何か、人を助けるために敵を倒すヒーローは人に感謝される。”現実とは違う”優しさが溢れる物語りが好きだ。

ヒーローの活躍を見るのは楽しい。けど物語のヒーローを見るのが好きな事と自分がヒーローに成りたいは致命的なまでに違う。ヒーローの様な損な生き様はしたくない。だから転生の時に神のような何かに白と黒どちらかの力を選ぶように言われ望んだのは最後に黒くなる仮面のヒーローでなく。とても悪い白い怪人の方…。

正義の味方には成りたくなかつた…けど、別に悪役に成りたかつた訳でもなかつたんだよ。

銀座に突如訪れた幻想。人の夢見る空想がそのまま現れた様な幻想だが、それは夢は夢でも悪い夢と書く悪夢の部類、悪夢の幻想。

幻想は人を襲う暴虐な者。

幻想は人を殺す殺戮者。

幻想は無法の限りを尽くす無法者。

幻想でも悪夢でもなく紛れもない現実だ。

門を通りこの世界の外から訪れた兵士は銀座を赤い悪夢色に塗り潰す。戦争などもう二世代は昔、大半の日本人は人死にを葬式かテレビの中でしかみた事がない。理不尽な人の死とは遠く無縁な日本人に無法の武力の残酷さを知らしめた。

理不尽な無法な暴力はより強い暴力には勝つことは出来ない。時が来れば自衛隊が来る。魔物等の不確定要素はあるが、流石に剣や槍がメインの武器では兵器の差で自衛隊の方が暴力として上。理不尽

な暴力もより強い暴力には勝つことは出来ない。門から現れた幻想は時間が立てば排除される事に成るだろう。

銀座にて究極に近い暴力の化身が活動を開始した。

地平に沈み掛ける夕焼けよりも赤い炎が燃えて命と共に燃え尽きる。咎人の罪人を灰となるまで焼き付くす炎。無数の松明の様に燃え銀座の気温を上げている。兵士の装いの人や異形の形をした生き物が炎の柱となつて燃え盛る銀座の町。地獄が現世に現れたようだ。

空に飛び交う竜、地を掛ける鎧を着た兵士、トロル、オーク等の魔物の様な生物達、彼等の中から突如として炎が吹き出している。銀座で殺戮を繰り広げていた者達が焼かれていた。

狂氣と正体不明の炎の隣接し混沌の渦巻く銀座の町、ある区域では多くの人が集まっている。其処にあるは嘘の様な不自然な静寂の空間。いや、ざわめきはあるが周りと比べれば無音と思えるぐらい静かだ。

誰も誰かに誘導された訳じやない。ただ個人個人で安全な場所、安全な場所へと逃げてきた結果。此処には敵が居ない安全だと止まつた。空から見れば判るが人が集まる場所を中心にして炎が燃えている。空から見た炎は円形に広がつていて、円と言う事は謎の炎の元凶が円の中心にあると考えられるないだろうか。円の中心の其処には一際大きなビルがある。

「…あれつて」

一人の青年が何かを見付け今は殆どの人が空を見上げている。空でなくビルか。ビルの屋上か。それは円の中心にある一際大きなビルだ。無数の人々がビルの屋上をみている姿は不気味であつた。人の注目を集めるビルの屋上。ビルの屋上に佇む白い正体不明の人型の何かがいる。

いや、正体不明と言えるだろうか？一部の人間は良く似た存在を知つていた。

「あれつて…あれ…だよな」

「そ、そんなわけ!!：そんなわけ：あ、あの、燃えるのそう言う事なんか」

こうした会話が其処らで聞こえた。

何人かの人が白い何かと似た存在を知っていたが知らない人の方もも多い。この場所の安全に関わつてるとしか思えない何かを知らない今まで居られない。知らない人は知つていそうな相手に訊ねていた。

「あのー……良いですか」「な！なんですかね！」

知らない側の若い女性はビルの屋上の白い何かをスマホで撮影し矢鱈興奮している中年に声をかけた。中年はオタクの様に見え普段は絶対に女性の話し掛けない人種のようでもつた返事をしている。ちよつと生理的な嫌悪を持つが聞くためだと女性はその点は我慢した。

「あの…人？つてなんなんですか。ご存じの様ですが…此処が安全なのに関係してゐる様な話も聞こえるんですが…」

女性の問い合わせに中年は興奮した様子で彼としては饒舌に答えた。「き、君は知らないのか!!あ、あれは、あの白い怪人はね！平成仮面ライダー第1弾の仮面ライダークウガのグロンギ最後の敵。第0号や白い闇と呼ばれる最強のグロンギのダグバ、ン・ダグバ・ゼハなんだよ!!その強さは殆んど出てないのに圧巻で何万もの人を…あ、ゴホン！」

唐突に言い淀む中年男性。興奮していたが現状を思いだしその先是流石に言つては駄目だと気づいたようだ。そして自分が安全なんか不安になつてゐる。そんな中年の変化に気付かない。聞かされた情報に女性は困惑していた。

「仮面ライダーって…たしか…日曜の朝にやつてる特撮のですよね？まさか彼処の白い人が特撮の登場キャラだと言うんですか？」

「そ、そうだね…そうだと思うんだよ」

「…特撮のキャラ…その、あの上に居るのは、仮面ライダーのダグバの着ぐるみを着てるつて事ですか」

女性の意見は可笑しくない。男性は首を降る。そして興奮した様子が無くなり静かに話した。内容的に興奮して話せるようなモノでは無かつたからだ。

「いや……着ぐるみかは……周りで起きてる発火現象がね。仮面ライダークウガの劇中のダグバの代表的な能力でね。：偶然に別の原因で発火してるとも思えないし……本物だとしか……」

「は」

「や、やつぱりそうですね。本物ですよね！」

興奮した様子の若い男性がシャシヤり出てきた。

「（…仮面ライダーの本物の怪人？）」

女性は何だコイツと思いながらも考える。

つまりは、ファンタジーな住人が攻めてきたと思えば今度は、創作の世界の存在が現れた？上の白いのが特撮のダグバとやらで、着ぐるみでない、本物という証拠は発火能力。女性も散々に謎の発火は見てきた。いや今も周囲で発火は続いている。建物で直接には見え無いが炎の色ぐらいは見える。そしてその発火をあのダグバがやつているのは腕が向いた方向に発火が起きている。確かに聞いた男性のいう通り偶然なんてないだろう。

仮面ライダーの怪人。

⋮最後の敵

「…ここにいて大丈夫なの？」

今まで燃えてるのを見たのは門から出てきた相手だけ、自分達の様な民間人は燃やされたのは見てない。しかし此れからも発火が自分達を燃やさないのかどうか。最後の敵⋮ラスボスだ、不安を感じるのも仕方ない事だ。

「あ……あのそのダグバというのだとして⋮此所が安全と思つて大丈夫でしようか？敵と言つてましたが⋮特撮だとどうだつたんですか？」

特撮は見ないが漫画を其なりには見る女性は、敵と言つても一般人には安全な敵役も居るパターンも知つてゐる。心優しいか、誇り高く弱者を攻撃しない敵役とかだ。残念ながら…ダグバにはどちらも当

てはまらない。むしろ真逆な存在だ。

「それは…うん……」

「な、なんで顔を逸らすんですか?!」

「いや…大丈夫かと言われたら…大丈夫とは全く言えない」

男性は答えずにシャシャリしてきた若者にイヤな保証をされた。

「だ、大丈夫じゃないんですか!？」

「…いや! わからぬいよ! ……大丈夫であつてほしいなあ…」

安全の保証はできない相手だとはわかつた。安全か怪しい。だがだからといって、結局はこの安全地帯から離れるのも嫌だ。殆ど誰も離れようとしない事も合わせて考え、女性はこれ以上聞かない事にした。後々、調べて気絶する事になるかもしれないが。

女性は周囲の雑談も気にはなつたが今は離れて建物の陰に隠れることにする。他にも同じ行動をする人間がチラホラ、安全かどうか分からぬ危険な相手に姿を見せないようにするのは当然だろう。特に気にもせずに見続ける人も多数いた。

「俺達、無視されてるの…かな」

「無視されてるの今だけかもよ」

「あのゲームをやつてて、ターゲットが向こうの怪物やら兵士だけつて事ならいいんだけどな」

「げ、ゲームか。ターゲットが決められてるゲームなら今だけはありがたいな」

彼等全員の顔と声に共通してあるのは不安と不信感。

人がひしめくビルの屋上の白い怪人。

白い怪人のビルから見える範疇からは侵略者はほぼ灰となり一区切りがついた。

「こ、こつちを見る！」

白い怪人ダグバ（仮）はビルの下に集まつた野次馬を見る。人とは違う顔からはダグバが何を考えているか一切判らない。

ハツキリと意識を向けられ見られた人は震えたが逃げずにいる。恐怖で固まつたという訳でもない。次は自分達だという可能性があると思つた人間は既に隠れるか逃げるかしていた。

侵略者でも人に見える相手を燃やしてきた存在に見られている。逃げない人は何で逃げないのか。白い怪人が見掛けだけなら正義側とも言えなくもない姿のせいか。特撮の登場キャラに似た姿に現実感が薄れたか。平和ボケがこんな時にも治つてないせいだろうか。何にしても彼らが逃げないのは…今は間違いでもなかつた。

集まる視線に白い怪人は一度首を振る。そして何かに気付いたようすに顔を上げた。

鳥だろうか。

いや大きい。

侵略者の乗つたワイバーンの部隊だ。

『コイツがあの炎の元凶…なのか』

『コイツの手が向いてる方向に炎が起きていた。間違いない!』

ワイバーンに乗つた侵略者、騎士たちは機動力を生かして発火の正体を探つていた。

『どうする』

『どうするもなにも攻撃あるのみだ!』

『あの外見、相手はもしかしたら……念のためにもつと数を集めてからだ』

強硬な意見と慎重派が居る。慎重派が勝ち白い怪人を警戒し睨みあう形となる。他のワイバーンの部隊もやつてくる。続々と集まり戦力は過剰な程に集まつた。

下から見て いる民間人から見てももうすぐ攻撃を仕掛ける寸前、普通なら相手は怯えるだろう。

しかし

「ビダバ」

白い怪人が声と共に視線を向けた下の方に兵士の一団が見えた。視線に釣られて騎士たちもみた。白い怪人は手を下に向ける。その瞬間、兵士が燃えた。

言葉はわからないが態度からわかつた。

挑発だ。

怯えるどころか挑発をした。

いや仮に挑発だと解つていなくても…

『やはりあの炎はお前が犯人かあ!!!』

全員の目に見える形で発火の犯人だと知らしめた。

発火の犯人だと伝えた騎士に信用が無かつたのか犯人なのか半信半疑だつた。しかし白い怪人の手を向ける動作と燃える現象が連動してゐる事を見て、間違えようもなく犯人だと確信できた。確信はできた。激怒もした。しかし攻めない。発火の犯人だと確信できたからこそ更に警戒して攻めあぐねた。相手は何者なのか。

『貴様は何者だ！あれだけの発火を起こすとはただモノではあるまい！……まさかこの世界の…亜神、神の使徒なのか』

声に白い怪人は反応しない。それは白い怪人には彼等の言葉が判らないから仕方ない。仮に伝わっていたら神の使徒云々で誤解が発生していただろう。

「……」

返答はない。返答がなくとも現時点では彼等にとつて亜神に匹敵する脅威と認識されている事に変わりなかつた。それだけ強い相手だと思つてゐるからこそ発火の犯人だと判つたのに攻撃を躊躇していだ。

「ブスバサボギ……ギビダブバギバサガセ」

白い怪人は人差しを相手に向けグロンギの言葉で言い放つ。侵略者には言葉がわからないだろう。それは白い怪人もわかつてゐる。本命として身振りも加えた。

次に燃え盛る兵士や魔物を指差す。そして去れとばかりに手を降る。動作で意味は伝わる。あの兵士や魔物の様に成りたくなければ去れ。とてもわかりやすく伝えていた。伝わつたからこそ騎士たちは躊躇を無くすほど殺意を漲らせた。

『な、なめているのか！』

『亜神だとしても無敵ではない！やるぞ！』

『おう！騎士として舐められた今までいられるか！』

『いや少し待て』

制止する騎士の視線の先、また複数のワイバーンがきた。後ろに誰

か乗せていた。

『魔法使いを運んでる部隊だ！誰か呼んでいたのか！』

『丁度良いところにきてくれたな』

『歓迎されるようだが、発火の犯人が見付かったのか』

『よく来てくれた！ああほうだ！見つけた！アイツが発火の犯人だ！』

『なんだと!? 本当なのか！』

『此処にいる全員が発火をする瞬間を見ている。恐らくこの世界の亜神だ』

『なんと！あの白いのが…では何故まだ攻撃していない！まさか亜神だからと恐れてか！』

『発火の犯人とわかつて攻撃しようとしたタイミングでお前達が来たんだよ』

『そうか、誤解したのかスマナイ』

『謝罪の代わりと言ふわけでもないが、せつかく来たのだ。奴に発火の御返しをしてもらいたい』

『そう言うことか。発火の犯人ならただ殺すだけでは足りないと、よし！ 帝国が誇る魔法使い達よ奴に炎の返礼をしてやれ！』

ワイバーン部隊に運ばれた魔法使い達は炎を放つた。仲間を散々に燃やされたお礼だと言わんばかりの炎の弾の雨。人サイズの生き物を焼死させるに過剰すぎる火力だ。

「……」

白い怪人、ダクバは目の部分を少し細め放たれた炎を見る。なのに防ごうとも避けようともせずそのまま微動だに動かない。火の弾の一つがダグバの胸部に当たる。間髪もいれず次々に火の弾はダグバの身体に当たりダグバは当たる。当たる度に僅かに揺れるダグバの体。一際大きい火の弾の直撃にダクバの身体が燃え上がる。報復を成功させ炎に包まれるダグバの姿に侵略者は喝采を上げる…が直ぐに喝采は驚愕の声に代わった。

『バカな!!!』

数秒してダグバを包んだ火は鎮火。さらに火が消え燃える前とま

るで変わらないダグバが現れる。ダクバの身体は焦げあと一つ残さずにあるで無傷。燃えた痕跡すらない。

『効いてないのか…』

『違う。亞神なのだ。回復しているだけだ。怯むな攻撃を続けろ。疲弊されるのだ！』

『そうだ！ 亞神でも精神的な限界はある！ 怯まず燃やし続けろ！』

不死身の亞神と言う前例から動搖は少なく直ぐに立ち直れた。再び発たれる炎の弾。先程より数が多い。火に隠れ射たれる鉄のボーガンも混ぜられている。それに対してもダグバは手を上に上げた。

発火が来る！と身構えた。

しかし発火は起きない。代わりに起きたのは台風の様な突風、クウガのダグバは天候を操る事が出来る。天候の操作が可能なら突風を作り出す事ぐらいは簡単な事だろう。ダグバは風を発生させた。数百メートルは離れるワイバーンにまで届く突風。突風に突つ込む形となつた火の弾はマツチの火の様に搔き消され矢も弾きとばされた。

『か、風が…!!』

『う、腕がこっちにむいて……あああ!!!』

ダグバの手の動きに事前に気付いたが…手遅れ、ワイバーンや魔法使い達が報復の様に燃やされる。遠距離の攻撃は防がれ、ただ腕を向けられ見ただけで燃えた。発火には準備か呼び動作が必要だと相手を見つければ避ける隙も有ると思ったのに其がない。簡単に自分達を殺せる事を見せつけられた。

『か、勝てるわけない』

『冷静になれ！ 恐らくあの炎は使いすぎて消耗している！ そう何度も使えない！ そうでもなければ俺達は既に殺されている！』

『しかし… そうだとしてどうする。遠距離の攻撃は…』

『あの風も軽い矢や火は散らせて、ワイバーンなら吹き飛ばせてはいない… 箕だ！ 近づいて仕留めるぞ！』

『…わかっただ』

『て、手を抜いてるだけかもしれない!? 何時でも発火で殺せるかもしないぞ！』

『そうでない事を祈れ！消耗が回復して発火が再開する危険の方が大きいのだ！犠牲を覚悟で行くしかないだろう！』

『や、やるしかなか』

覚悟を決めた様子の騎士たちが槍を構えている、ダクバに向かい突撃を敢行しようとしている。その様子はダグバに相手が逃げるつもりが無いことを伝えてしまつた。

「…………」

ガン！と徐にダクバは屋上のコンクリートを軽く蹴つて碎いた。
『……なにをしてるんだ』

『威嚇？』

ダグバは碎いた幾つかのコンクリートの破片を拾い上げると破片を掌に包んだ。ただコンクリートを碎いて掌で掴んだ様にしか見えない。

『投げるつもりか？』

コンクリートの破片を投げる。それ以外に思い付かない。鎧を着た兵士に拳銃の弾丸を弾く皮膚を持つワイヤーバーン、距離も離れていて数もいる。投擲が危険だとは思えない。

『おい、アイツ刃物を持つてるぞ！』

『何時のまに…』

指の隙間から何本もの刃が出ていた。

それはクナイの様に見える。

何処から現れたのだろうか。掌の中にあつたコンクリートは何処に消えたのか。いつ入れ換えたのか。：まさかクナイがコンクリートが変化したモノだとは彼等も気付ける訳もない。

刃物として小さなモノだ。このまま突撃しても間近で投げられて多少の怪我はしそうと思えるぐらいの小ささ。運悪く急所に当たりでもしないと利くとは思えない、クナイは一度投げれば終わる。脅威とは思えない。

しかし何か嫌な予感がした。

彼等は攻撃を躊躇い距離を空けて近づこうとしない。危険を察知すると言う意味では正解、危険の大きさの認識と言う意味では大きな

不正解だ。

先ずもつて発火への認識、別に消耗して使わないわけでもない。風についてもワイバーンを飛行不能にする威力を持たせる事も出来た。その上で考えるとなぜ風や発火で始末せず、クナイなんて物も懲々作つたのか。

騎士たちは話すために密集していた。この距離なら発火はともかくクナイなら射程外だと油断していたが……射程内だつた。

クナイ擲きを投擲。

空気を切り裂いて飛んでいく。

ワイバーン達に向けて放たれた刃。

その数は数十はある。

明らかに分裂したように刃の数が増えていた。

空気を切り裂き飛翔したクナイは瞬く間にワイバーンの元へ、クナイが散弾の様にワイバーンを襲う。到底回避は不可能。さらに言えば距離で威力が減退しても一つの一つの貫通力はライフルよりも高

い。

!!!

ザシユ、ザシユと響く肉や金属を穿つ音、高速で飛んできた刃にワイバーン部隊の先陣は身体に無数の穴を開けられる。クナイは小口径の銃弾なら弾くワイバーンの鱗も、金属で出来た兵士の武装も、まるで紙切れの様に貫き後ろの兵士も貫いた。

『な、なんで投擲でこの様な被害が!? 距離はあつただろう!? どんな力で投げたと言うのだ!?』

予想外の大損害を出し混乱するワイバーン部隊を尻目にダグバがまたコンクリートを碎く。それに侵略者は慌てる。コンクリートを握つた後に刃物が出現した。変化してるのは知らないが、また刃物を何処からか取り出すと考えた。そしてまた異常な投擲が来ると

『ま、またくるぞ!!!』

『だれか止めろ!』

『間に合うわけないだろうが!!!』

『いや! 此処は全員で突撃をすべきだ!』

『馬鹿か！こ、後退だ!! 一度下がるぞ！』

『前進だ！』

『このノロマ！早く後ろに下がれよ！』

騎士が口々に真逆の事を叫ぶ。纏まらない。どうやら指揮官の様な上位の兵士が居なかつたか先程の投擲で居なくなつたようだ。

混乱する中で無慈悲に投擲されるクナイ、避けられず防ぐ事も不可能、侵略者の命がまた散つていく。碎かれるコンクリート。ダグバはコンクリートの破片を掴みクナイ擬きを作る。そしてクナイの投擲。數はともかく発火現象の様に理解不能な攻撃でない。刃物を投げつける原始的な攻撃。だが相手にとつてはどちらも理不尽なモノには違いない。避けるのに困難な空中で高速の無数のクナイの飛来。もし運良く防御しても腕も盾も鎧ごと貫き後ろの相手まで穿つクナイ。まるでカトンボの様に落ちていくワイバーン。高所から落ちた衝撃で酷い姿で死体の仲間に加わつていく。

『――!!』

ようやく意見が一致したのか、それか単に逃げたのか、分散し遮蔽物の影に隠れた。そのまま逃げていくワイバーンも見えたが、逆に建物に隠れ接近していたワイバーンもいた。ビルの壁ギリギリに上昇する。打合せしたかのように連携は良くワイバーンがほぼ同時に三方から同時に襲つた。

タイミングも良い。

連携も良かつた。

しかし：

「……」

飛び出した瞬間に逆に飛び付かれ一頭のワイバーンの首が掴まれる。体格差で言えばワイバーンの方が大きい。体重で言えば何倍差だ。直ぐに掴んだ手を振り払える。しかし現実には：首を動かす事すらできない。首を掴まれたワイバーンは自分が小鳥となる様な巨人に掴まれた気持ちを味わつていた。

『!!!』

そのまま首を掴んだまま片手の一本で振り回し他の二頭とぶつけ

る。二頭は野球のボールの様に弾かれ其々別のビルの外壁とぶつかり。飛ぶことも出来ず騎士を乗せたまま地面に落下。そして首を掴まれたワイバーンも振り回された時に首の折れている。ワイバーンは乗っていた騎士ごと地面に捨てられた。

『あああ!!!』

首の折れたままワイバーンに乗った騎士は絶望の顔を見せながら落ちていく。

『ば、化け物が…』

相手は発火だけの存在でないと嫌というほど解らされる。そして化け物といった騎士がダグバに見られた。

『ひつ！』

ワイバーンの上の騎士は悲鳴を上げたがダグバはなにもしない。クナイをさらに投げようとしなかつた。

騎士たちは違和感を感じた。思い出せば此までの戦いでナゼか相手は積極的に発火も使つてない。初めは此まで多く発生していた発火で消耗して使えなくなっていると考えたが……とても消耗しているとは思えない。

もし発火が問題なく使えるとして発火を使わないなら、その理由はなんだ。もしかして…発火では殺すのは一瞬……獲物をいたぶつて楽しんでいる。そんな疑惑を持った騎士は何人か。

油断してるならそれを突いて倒す!! そう考える事もできるが……

『お、俺と一騎討ちで戦え!』

一番年若そうな騎士が叫んだ。

倒せる実力に自信があるのか。それか発火を再開されない為の止めが目的か……青い顔に外から見ても解るほど震えた様子からいつて後者か。

「……」

ダグバは相手を見据える。傍目にはただ静かに見てるだけに見える。視線を向けられた騎士に襲う言い知れない恐怖、目は一体何の目なのか。赤い色の目だ。息ができない、恐怖で体が呼吸をする事を忘れてしまう。

「あ、ああおあ!!!」

若い騎士は叫び突撃をする。他の騎士が止める声をあげたが止まらない。ダグバは最初に火玉を浴びた時の様に動かない。騎士を待ち構えている。プライドをこれでもかと刺激した。

「らああ!!」

騎士もワイバーンもただなにも考えずに槍を構え最高速度で向かう。槍を突き出す形で構えている。ダグバにぶつかれば、反動で槍を持つ腕は幾ら鍛えていても脱臼か最悪骨折する。地面の上なら丈夫だが、ワイバーンに騎乗した状態で腕がダメになるのは…。

『おお!!』

勢いを付けた槍がダグバにぶつかる。槍はダグバに当たる。若い騎士は倒せなくともダメージは確実だと確信する。予想通り反動で騎士の肩の骨が外れる。予想した激痛が騎士を襲う。しかし激痛する気にする余裕は無いほど驚愕している。本来あるべき光景と違うことが起きていた。

『……ふ、ふざけるなよ』

白い怪人に槍は当たる直前だった。

当たつた衝撃があり腕の骨が外れた。

なら槍が刺さった光景がみえる筈だ。

槍は手で掴まれていた。

騎士が捨て身の勢いを付けた槍を手だけで止めている。相手の怪力と反射神経は騎士が想像した以上のモノだった。

騎士は逃げよう思考するが、思考が肉体に反映する前に騎士は持ち上げられ地面に叩き付けられた。振りかぶる勢いでワイバーンは騎士から離れ、ビルの床を転がるだけで無事ですんだが、騎士は肉を碎く音と共にビルの床にぶつけられた。

若い騎士を床と一体化させると次はまだかとばかりに他の騎士やワイバーンを見る。楽しそに見てている様に見えた。それを見て戦意が折れた。

『…本体に報告しなければ』

『ふ、ふざけるな！一人で逃げる気か！』

『後退だ！後退!!』

ワイバーンたちは逃げていく。
建物を縫うように逃げていく。

視界から消えて発火の対象外だ。

見逃したのか逃がしたのか……腕を下ろし逃げていく先を見詰めている。その姿は何処か遊ぼうとした友達に去られた子供に見えた。その時、白野が背負っていたリュックが独りでに浮かび上がった。騎士を叩きつけた時の余波に巻き込まれたのかリュックはボロボロだ。カバンの蓋が開いた。

出てきたのは金色の大きな石だ。

独りでに動く大きな宝石にも見えるその石は白野が転生した時からあつた。

石は自意識があるのか白野との距離が離れると勝手に飛んでくる事もあり、飛んでこられたら困ると銀座まで持つてきた。石が離れてもない時に勝手に浮くのははじめての行動、石はどうするつもりなのか。

石は何処かに向かう。
ビルの下に向かう。

若い騎士のワイバーンがいた。

戦意を喪失してはいるのか蹲っている。ワイバーンは自分の近くにくる石に怯えた。石はワイバーンの近くで一際強く発光。何かを伝えるように発光した。ワイバーンは暫く止まると……恐る恐るといった様子で頷いた。そしてそんな光景を見ている人たちもいた。

「あの石つて……もしかして……」

見ていたのはダグバの事を興奮していた中年男性、脳裏に浮かんだのは…テレビ越しにみていた昆虫の様な飛行物体。

石が発光している。何かを伝えているように見えた。ダグバは下を見ると突如としてビルの屋上の縁から…。

「飛び降りた!?」

高さが優に数十メートル有るビルからだ。
重力のままに落下するダクバ。

落下地点の近くの人は慌てて逃げた。

ドゴン!!

ダグバが両足からコンクリートの地面に落ちると爆発した様な粉塵が巻き起ころ。

「し、しんだ?」

多くは人は死んだのかと思つた。ダグバを知つていた中年男性などはあれで死ぬわけないとと思う。前者は何処かホツとして後者は顔を青ざめさせていた。

土煙が晴れると其処にはクレーター。

ダグバが無傷で居た。無傷で生きている。

「い、生きてる…」

なぜ降りてきたのか。目的として考えられるのは……自分達が次の獲物に成ったのかと悲鳴が上がつた。ダグバは悲鳴を上げる野次馬を一瞥しただけで通りすぎ、自分が落とした有るものを取りに向かう。それは落下し絶命したワイバーンや騎士の遺体。騎士の死体の前までいくとダグバは躊躇なく死体から鎧や武器を剥ぎ取つていく。……後ろから見れば死体を破壊してるように見えるだろう。あまりの恐怖に震えて見るしかない。

そんなダグバの側に石と：若い騎士が乗つっていたワイバーンが。

ワイバーンはダグバを見てダグバの倍はある身体を子犬が怯える様に震えさせている。ダグバはワイバーンを放置し剥ぎ取つた鎧を一ヵ所に置いた。すると石が発光し鎧等は石に集まっていく。分解され全く別なパーツとなつていく。雷光の様な光が辺りを照らした。それは物質を変える力。物質を変えるので元は何でも良いことになるが、鎧を使つた理由はイメージがしやすいからだ。

機械の昆虫の様な形となる。

石は中央に付いていた。

また光輝き。昆虫は灰色から白と金色となる。色を変えた昆虫から脈動、命の息吹き。機械の昆虫は浮かび上がり怯えるワイバーンに覆い被さる様に乗る。再び雷のような光が放たれワイバーンの体躯は進化した様に大きくなっている。機械の昆虫はワイバーンと融合

した？

「——」

其処には白と金の鎧を纏つた：機械と化した様なワイバーンの様な何かがいた。

静かに沈黙していた。

『い……一体何が起きてるんだ!?』

『おい落ち着け!!』

圧し殺した声で話しているのはワイバーンに乗った騎士、正確には乗っていた騎士・ワイバーンからは降りて身を寄せあう様に隠れている。建物の影から首だけを出してその光景を見ていた。コントの様な光景だが当人たちは至つて真剣だ。

マトモにやつても勝てないと他と同様に逃げるフリをして、逃げる一段から離れ白い怪人の動向を息を殺して見ていたが、先ほど見た光景に声を荒らげるほど困惑を隠せずにいた。

『落ち着け、落ち着いてられるか!あ……あの化物め。飛竜に何をしたんだ』

『わかるかよ……俺達はいつたい何を相手にしてるんだ。あんなの亞神どころか…』

自分達を散々に打ちのめしたこの世界の亜神と思われる白い怪人は、騎士を失ったワイバーンに何かをした。彼等は初めはそのワイバーンが殺されると思つたが、彼等からして命が奪われるよりも恐ろしい光景を見せられた。

白い怪人の元に何故か自分から降り立つたワイバーン、見ている側には自殺としか思えない行動。甲虫の形をした何かと1つとなつた。ワイバーンとは違う生き物と化している。いや生き物なのか。全身の皮膚が鉄となつた様で生物として明らかに不自然。この世界の人なら機械かロボットの竜と言うだろうか。

ワイバーンはまるで動かない。

『死んだ…のか』

その声に反応したのか、竜のロボットのモノアイの様に変化した目

が…まるで目覚めたと言つよう輝いた。

『――――!!』

吠えた。

彼等の乗るワイバーンとは別の別の生き物の声で：

『…なんなんだあれは…』

自分達の乗る竜と同種だと認められない。変貌したワイバーンを見て沸き上がる生理的な恐怖と嫌悪感。しかし同時に進化を見たような、新たな誕生を見たような、神の領域の神秘を見た様なある種の感動も少し。

身体は二周り大きくなり、皮膚は金属を思わせる硬質な光沢、装甲の様な黒と金の装飾、基本色は白だ。変貌したワイバーンを仮に白いワイバーンと呼ばうか。

『――!!!』

白いワイバーンは身体を震わせ：誇示する様に高らかに誇らしげに鳴く。それは他のワイバーンが思わず惹かれる程の歓喜の声。白い怪人、ダグバを見詰める。自分をワイバーンという枠から外し一体化した昆虫の様な何かの主と言える存在に対して近付く。

目の前までくると白いワイバーンはダグバの前に身を伏せる。恐怖に屈した姿でない。自分はこうあるべきとでも言うように、まるで主の前で膝まずく忠誠心溢れる臣下の姿。白いワイバーンが自身の身に起きた変貌に感謝し進んで配下に下つた様に見えた。

ワイバーンにダグバは歩みより背に騎乗。王が乗馬に乗る。そう見えたのは自分達の世界に王がいる騎士たちだけでなく現代人の銀座の人達もか。ダグバが白いワイバーンの背に乗ると鎧の首筋部分にある金の石が淡く輝く。まるで石が喜んでるようだ。

バサリ！バサリ！と羽が羽ばたく。白いワイバーンは重そうな外見を裏切りダグバを乗せ軽々と飛翔。ダグバが白いワイバーンに乗り空に舞う。建物の影で監視していた騎士たちは呆然と見送つてから、ハツと正気に戻りどこに行くのかと考える…向かつた方向は…『逃げた奴等を追うつもりか!?』

白いワイバーンが飛び立ち向かう先には逃げたワイバーンたちが

いる。後ろから来る相手に気が付く。そのシルエットはワイバーンだが：

『あれは飛竜：か？』

『アイツだ！アイツが乗っている!!!』

上に乗った存在に彼等は恐怖した。それは当然だろうか。彼等の仲間は焼き殺されるか刺し殺されるかダグバに一方的に命を奪われ、彼等は勝ち目がないと逃げたのだ。

『くそ！追いかれる！』

『な、なんて速度だ』

『なんだ！あれは！この世界のワイバーンの亞種なのか！いや！生き物なのか！？』

追い付かれた事からわかる通り、白いワイバーンに見える生き物は速度は他のワイバーンよりも遙かに速い。武装した騎士達よりも重そうな白い怪人を乗せ、外見では通常のワイバーンより確実に重いと思えるのに。

『くるー・くるー・くるぞ!!』

『に、逃がさないと言うのか』

『後ろに矢を放て！』

『や、槍もだ！少しでも身軽にするぞ!!』

騎士が槍を投げる。ボーガンも射つた。遠距離に攻撃出来る総てを出し尽くす。効くか効かない等は考えていない。身軽にする為と足止めもあるが、大半は恐怖からの行動、極端な言えば幼児が怖いものにモノを投げ付けるのと同じ行動か。

「……」

白いワイバーンは旋回し回避をしようとしたが、主に突き進む様に指示された。ダグバは鎧と共に押借した剣を数本纏めて持つてきていた。

握る剣が変化する。剣は一つに纏まり形を変わっていく。纏まり明らかに質量を無視して大きくなる。剣はダグバの背丈を越える巨大な白い金の装飾がされた大剣へと変貌。その剣の形状はタイタンソードと呼ばれる剣に良く似ている。ただ大きさがタイタンソード

よりも巨大だ。

見掛け相応の質量があるのかワイバーンは一瞬バランスを崩したがすぐに持ち直す。そして剣を持ったダグバは背の上で立ち上がる。上昇する白いワイバーンの背と言う立てる訳がない足場だが、まるで足に強力な磁石でくっついてる様に安定した体勢で立っている。さらに空気抵抗がどうなつてるので速度は下がっていない。

追われてる側の立場からすればたまたまつたモノではない。

ダグバは出来上がつたばかりの大剣を真横に構えている。何らかのエネルギーが剣に伝わつてゐるのか放電する様に輝く剣。剣を振るう。エネルギーは放出されエネルギーは衝撃波と突風となる。白いワイバーンに近いビルの窓ガラスが割れる。そして騎士たちが必死に投げた槍や射つた矢は碎け散つた。

『ゆ、 ゆれる!?』

『体勢を立て直せ！ 落ちて死ぬぞ！』

ワイバーンの元にまで猛烈余波が襲う。台風に翻弄される小鳥の様にワイバーンは必死に羽ばたく。騎士も落ちない様に必死にしがみついた。そんな混乱の中で白いワイバーンは追い付いた。

ダグバは剣を構えた。

『ヤツがもうきて…!?

そのまま白いワイバーンが密集地から抜けると、ダグバは“剣を振つた後の体勢”になつていた。

『通り抜けた…だ…』

視界がズルリと落ちた。

ワイバーンごと身体を二つにし堕ちた。

その数は一人や二人でない。

『だ、 大丈夫か』

騎士が自分の上に居る殺された騎士の近くを飛んでいた同僚に声をかけた。返事がない。下から同僚の足は見える。しかし血が垂れている。怪我をしている。ワイバーンが下降してきた。

『怪我はどれ…』

返事がないのは当然だった。

騎士の上半身は無くなっていた。

『うわああああ!!』

戦闘にも人死にに馴れている騎士が思わず悲鳴の様な声をあげてしまう。

白いワイバーンは旋回し戻ってきた。

『くるなああ!!』

『ああああ!!』

空で行われる白兵戦。

ドッグファイト。

いや鬼ごっこか。

捕まつた後のペナルティは命という鬼ごっこ。

白いワイバーンの飛行能力は通常のワイバーンと比較すると何倍の差か。プロペラ機と現代の戦闘機程の差か。白いワイバーンの圧倒的な速度で接近された後にはダグバから繰り出される大剣が襲う。騎士が剣で防ごうとしても、そのまま防いだ得物ごと真つ二つにされてしまう。

白いワイバーンは縦横無尽に飛び回り、ダグバは大剣を重さのない枝の様に振るう。斬つて、斬つて、切り抜く。騎士はまるで殺される為の存在かの様に躊躇され逃げ惑う事となつた。

『もうー!やめてくれー!降伏だ!降伏する!』

遂には降伏を叫ぶ騎士も出てきている。言葉は判らないがダグバは命乞いの様な言葉を吐きながら逃げ惑う姿に、まるで理不尽な被害者だと言いたげな姿に…ダグバの瞳には欠片の同情も哀れみも憤りすらもない。ただ楽しい遊びの続きを…

「……!」

そこでハツとダグバは止まる。泣いている侵略者を斬ろうとする寸前に止まる。目の前の大剣を見て白目を向いて気絶している侵略者を無視してダグバは大きく首を振る。自身を動かす衝動に耐える様に止まつた。

その隙に氣絶した騎士を乗せたワイバーンは逃げていく。他のワイバーンも同様、既に完全に敗走する空の敵、逃げるのに地上に降り

ている。ダグバは地上を見る。門が見える。いつの間にか門の上空近くまで戻つてきていた。

逃げるワイバーンは門の中に入つていく代わりに続々と出てくる誰かがいる。

『―――!!』

門から援軍なのか大群が出てきているのが見える。これから銀座の各地に散らばるだろう魔物の様な亜人の大群が出てくるのを見て、ダグバは白いワイバーンから飛び降りた。

降りたのは上空だ。

当然だが落下してしまう。

ダグバが墜ち亜人の密集地の中心に落ちた。傍の亜人は衝撃で吹き飛んだ。

『な、なんだ!? 蛮族の攻撃か!』

『白い奴が…』

巨大な剣を持つたダグバが出てきた亜人達の群れの中、そして軍勢に立ち塞がる位置にいた。

『な、なんだア!イツは…』

『そ、空から降つてきたな』

『鎧：いや、この地の亜人：か?』

『何者で有ろうがどうでもいい! どうせ蛮族の手先であろう。自分から敵の中に入つて攻撃に動かない間抜けだ。さつさと排除しろ』

一番偉そうに馬上で排除を命じる騎士。

異質な姿であり常識外れな大きさの大剣を持つてゐる。しかし単機で敵中にいる。命知らずな馬鹿と思つたようだ。もし逃げてきたワイバーンの騎士達から情報を聞いていればまた行動も違つただろうが……不幸にも聞いていない。

『―――!!』

命令に従い直ぐ様に数十の亜人達が一斉にダグバに飛び掛かつた。亜人達に飲み込まれ白い怪人は姿を消す。あたり前の結果に拍子抜けした様な顔をした。

『派手に登場したのに抵抗一つしないのか』

『なんだつたかしらんが。間抜けな奴だ』

『見掛けは少しほう手強そうだつたんだがな。見かけ倒しだつたか』

『簡単な方が良いだろう。やることは他に色々と有るのだ』

『ああそうだな』

『いや、また、身に付けていた鎧や剣は豪勢だつたな。鎧は駄目だろうが剣が無事なら戦利品に持ち帰らなければ』

『はは飾りには売れそうだな』

『確かに飾りでなく実戦に使うには重くて振れないモノだろうな。亞神でもなれば…………まさかな』

『さて雑談はソコまでだ！進軍するぞ！將軍が先陣の奴等が不甲斐ないと愚痴を垂れていたからな』

『予定より遅れてるんだつたか。先程もワイバーン部隊の一部が慌てた様子で帰つてきていたが、何かを見付けたのかね』

『知らんが俺達も遅れたら何を言われるかわからん。急ごう』

『そうだな。おい其所の奴等は何時まで山を作つてるんだ』

『亞人の山は出来たまま動かない。』

『おい、そこの奴等、いい加減離れろ。やることは他にまだまだ有るのだぞ』

『まだ動かない。』

『流石に可笑しいと騎士たちも感じだした。』

『なんだ…命令を拒否してゐるのか』

『突如として亞人の山が燃えた。』

『む、燃えた』

『さつきのヤツが自分を燃やしたのか』

『捨て身だつたか…』

『ゴオゴオと燃え上がる。始めに無謀にも敵陣に突入してきただとおもつたが、あれは自殺などでなく自爆しにきた相手だつたのかと解釈した。』

銀座で猛威を振るつていた発火を連想していない。どうやら発火の事は伝わつてなかつたようだ。炎は亞人達の肉どころか骨すら燃

やして最後には黒い灰しか残らなかつた。

灰の山が風で飛ばされ中からは剣を持つた白い怪人が再び現れる。

『なに!? 生きて出てきた!?

『…燃えた痕がない』

ナゼ燃えた様子がないのか。少し前にワイバーンの部隊が感じた驚愕を彼等もまた味わつた。

わからないが危険な相手だと即座に亜人に攻撃を命じる。ダグバに先程より多くの亜人が襲いかかる。一人に対しても馬鹿げた程の過剰戦力だ。その一人の戦力が常識の範疇ならの話だが

ダグバは軽く走るように亜人に向かうと剣を振る。目の前にいた亜人は腹から先が地面に落ちた。大きなオーラのような亜人がいる。ダグバはオーラを頭から一刀両断。二つに別れたオーラが崩れる前に、続けざまに剣を横に振り抜きゴブリンの様な亜人の頭を7頭同時に刈り取る。ダグバは頭を無くしたゴブリンの首から血を噴出させる前に、次の獲物を選び更に死体を量産。ゴブリンの首から血が噴出する時には数十の犠牲が出ていた。ダグバは止まらない。被害の数が二桁から三桁、四桁に上つても勢いが衰えない。

『ば、化物』

騎士も亜人も等しく同じことを思うことになる。多くが逃げ腰になるなかでチャンスを窺う者も居る。小さな家ほど大きいオーラがダグバの背後に回っていた。背後からダグバの頭を碎かんと殴り掛けた!! オーラの丸太より太い拳の威力は人なら文字通り碎くだろう。

ダグバの肉体に当り鈍く響いた打撃音。

オーラの渾身の拳はダグバの体に命中していた。ダグバの体は微動だに動いていない。

『――!?

逆に殴った拳にダメージをおつたのか苦痛に呻き拳を抑えていた。

ダクバは振り向くと呻くオーラの腕をとり軽く捻る様に、自分の腕の何倍もあるオーラの腕を肩口からもぎ取つた。

『――――!!』

激痛に叫ぶオーガ、

煩いとばかりにダグバに頭が碎かれ叫び声は無くなつた。ダグバは先程亜人をけしかけた騎士を見た。ダグバはオーガの腕を投げた。一直線に砲弾の速度で飛んでいく。

『早くアイツを…グゲア!?』

腕は煩く指揮をしていた騎士の胴体に突き刺さる。それをみて兵士達は後ろに下がつた。亜人たちは下がることはできなかつた。

『お、お前ら何をしている！や、休まずに攻めろ！』

使い潰すつもりとしか思えない兵士の指示に前に出る亜人。顔には恐怖がある。ダグバに対してもだが兵士にも恐怖している？ダグバは魔物の様な亜人は奴隸の様な立場なのかと考えた。

白い怪人は同情した訳でもないが試してみる事にした。

『―――』

ダグバは思念の様なモノをワイバーンに送れる。なら亜人にも出来るかと考えた。

思念で伝えた。

この地から去れ。

残るなら“駆除”すると

意味が正確に伝わつたかは不明だが確實な事はある。自分達に向けられた強烈な殺意、此処に居れば殺される事だけは伝わつた

『おいでこに行く!!』

戦争用に調教された亜人達の大半が門へ我先に戻つていく。中には兵士も混じつていた。

『何故亜人どもが…おい!!!おまえら逃げるな！』

逃げるなど叫ぶ兵士がいる。だが周りに居る数が少なくなると逃げるなどと言う叫びを忘れたのかさつさと逃げて行く。多くが逃げ出したが残つたモノたちもいる。

警告はした。

ダグバは亜人達に警告した。

残れば駆除すると

警告は二度もない。

いや、亜人にしか警告はしていない。人には警告はしていないが、そもそも魔物に見える亜人は騎士が魔物使いで使役されてる様にみえ警告はしたが、兵士に対しては警告の必要も無いと分別していた。それに脅しは十分にやつた。十二分に我慢をした。

逃げないなら覚悟はあるだろう。

本格的に獲物として狩りを開始した。

どれだけ時間が経つたか。

本来なら争乱を止める筈の自衛隊が来た時には争乱の殆どが終わり、白い怪人の姿は消えている。残つたのは細かく散つた残党や大量の死体と隠れている亜人や兵士、灰、門のみ。

後に銀座事件と言われる騒動は一応の終わりを迎えたが、この銀座事件は物語の始まりに過ぎない。

後悔

数日前に東京の銀座で起きた事件は日本どころか確実に世界の歴史に残る事件だ。歴史の教科書にも乗るだろうが、これまでの地球の歴史から考えれば相当に異質なモノになる。現代の歴史に神話が紛れている感じか。

事件の通称は銀座事件。

先ず初めに事件について詳しく聞いた後の反応として、銀座事件が本当にあつたと信じた人は殆ど居ない筈だ。映画か下手な冗談か白昼夢や幻覚を見たと言われるのが至極当然の反応。大雑把に言えば異世界、魔法、魔物、これらが現実に存在していて銀座を攻めてきたと言うことになる。何処の漫画やアニメの話か。真っ当な現代の社会人が事件を信じられる訳がない。

しかし五桁、六桁はある当事者の証言、銀座で撮影された映像、捕虜となつた地球に存在しない生命体、門、残つた多数の物証が現実だと証明している。現実だと納得させると、銀座事件は世界を騒がせた。

注目されたキーワード。

銀座に現れた門。

異世界

そして仮面ライダークウガのン・ダグバ・ゼハ

最後のは単体の存在でながら銀座事件総ての話題を喰うほどに注目されていた。

ビルの上に居る黄金の装飾を纏つた様な白い怪人。白野は歩きながらスマホのトップニュースを写る“自分の画像”をみて呟いた。

「……肖像権無いのかな」

白野弥己は銀座事件から数日ぶりに家に帰ってきた。

「ようやく帰つてこれた」

目の前に有るのは両親は他界した事になつてゐる元々自分一人しか居ない家。氣力が尽きそう。それでもようやく帰つてきたぞマイホーム！と玄関前で腕を上げて喜ぶ……のは止めとけばよかつた。見てた学生の女の子達がいた。

学校からの帰りかな。

顔を向けたら顔を逸らされた。

不審者扱い。下手したら冤罪で危険人物扱い。

と、数日前に自分がやつた事を思い出すと危険人物扱いされても何も言えないかな。

数日前がネットで4年付き合いのあつた伊丹さんと直に初めて出会つた日。言い換えると銀座事件のあつた日。ダグバの姿で力を奮つた結果、少し予想よりも厄介な事態になつてた。

騒ぎにはなるとは思つてたよ。で、最初の予定なら後は知らない顔をつもりだつた。けど、事件直後にネットの反応を見たら、放置したらちよつとダメそうな問題があつたの気付いた。別に放置してもいい気もしたけど…個人的な理由があつたから解決に動くことにした。あの姿に関連した問題と、あと個人的な欲求もあり家に帰らずに実は事件のあと撤退してく兵士に紛れてあの門に入つていたんだ。門の向こう側には侵略者がきた別の世界が広がつてた。

向こうの世界でやる事があるけど直ぐに終わりそういうにもない。この数日だと向こうの世界の見学を少し終えられたぐらい。まだまだやる事がある。今回は一時的な帰宅をしていた。

日帰りのつもりだつたのに家を何日も留守にしてたのと……事件について世間の反応も気になつたからね。

数日ぶりにようやく家に帰つてきた。

特には家に問題はないみたいかな。

家に入つて買つてきた雑誌と新聞を取り出してみる。うわ表紙が銀座の騒動の時の伊丹さんの写真。紙面で「デカデカ」と伊丹さん、二条橋の英雄とか書かれてる。あの避難の功績で英雄に祭り上げられたのかな。伊丹さんが英雄かあ…うん言われるだけの事はしてたと思うけど何だか笑える。絶対本人は英雄とか言われるの面倒だと思つてるだろうなあ。伊丹さん大変だろうな。なにか忘れてるような。つて、あ。

忘れてた。

伊丹さんと別れる前に連絡するとか言つてたよね。あれから数日：不味いかな。数日前だから死んでるとか誤解されてないかな。伊丹さん誘つたから気にしてそう。とりあえず読む前に無事つて伝えとかないと。

ネットみると…

さて無事と書き込みはしたから伊丹さんの事は一旦それで良いとして、数日ぶりに世間の反応の確認をしないとね。

適当に買つてきた雑誌と新聞の内容は…内容はまあ微妙。

『ダグバに似た生物、本物なのか？専門家に聞く本物の場合の危険！』

『仮面ライダークウガ外伝映画撮影開始』

『激論！！未確認生命体による人類の危機！』

『ダグバ似の生物は排除すべきか！』

『グロンギは人に混ざつている！』

『銀座に現れた門とダグバの関係は？』

『行方不明事件はグロンギの仕業か！？』

『グロンギのゲゲルは発生している！？』

『クウガDVDボックス再発売』

『ダグバ探索に各国が日本に工作員を送つていて！』

『靈石があると主張する宗教団体について』

『ダクバ似の生物は人体改造か。日本の生物兵器！？』

——こんな感じ。まあ変なの多いけどゴシップ雑誌だし気にしなくても良いけど…似てるだけの別生物扱いはないのかな。クウガに出てたグロングのダグバだとわりと信じる層は居るのかな？まあ力と姿が一致してるとクウガのダグバと思われるのかも。

少し読むと…

好意的なら第4号、クウガみたいな人間の味方でないかつて話になつてる。少ない。過激な場合なら自分達を何時殺戮してくるかわからない危険生物つて話になる。此方の方がが多い。普通に危険生物扱いが多い。一応銀座の人を助けたんだから少しあはクウガ寄り扱いされると思つたけどダメだね。ほんと結構気を使つて戦つたんだけどな。

銀座事件のあれ、自分の映像があるのかな。スマホなのか監視カメラなのか知らないけど銀座事件での活動中の映像が結構ある。Y○u T u b 再生回数の桁数が日本人口軽く越えてる。収益ありなら感謝して貰いたいね。

動画を一つ見たけどわりと酷い。

悪意ある編集…はされてないね。そのまま流してるね。こう：実際にしてると時は十分に遠慮してやつてたつもりなんだけど、実際に見ると…ちょっと…危険生物つて言われても否定ができないかな。

危険生物扱いの他は、クウガの新作とか商売的に便乗されてる感じのは、ファンとしたら大歓迎。リメイクか過去編か小説版かな…まさかダグバの物語が造られたりなんて事になつてないよね。面白そうだけど…流石にボクの事があるから無いかな？

テレビを見てみる。

『私は楽観論者に強く警鐘を鳴らしたい！一部にある楽観的な仮称ダグバが危険な相手ではないという声についてです!!何を考えているのか！フィクションの情報を除いてもあの銀座事件でのダグバによる殺戮の被害は五桁になるんです！たつた一日の被害ですよ！なぜ此で危険は無いと考えられるのか！早急に見つけ出ししかるべき対処をすべきでしよう！』

『この映像を見てください、なんて惨い。…酷すぎる。こんな危険な

生き物が日本に居ると思うと夜も眠れませんよ…』

『クウガ新作の撮影についてですが海外からも協力の話が出ていて…』

『…おぞましい殺戮です。確実にクウガ原作に登場したあの極悪非道なダグバと同じ性格でしょ。銀座の住民に手を出して居ないと言う話も有りますが、今回のターゲットが偶々侵略者であつたとしか思えません』

『日本政府には市民の安全の為にも、早急に仮称ダグバに対しての有効的な対策を打ち立てもらいたいです』

テレビでダグバ関係ばかり、門とか銀座事件の話もあるけど……門とかよりダグバ対策を優先にしてない？それと虐殺なのは否定しないけど、侵略者側の虐殺場面が抜かれて、一方的に自分が殺してる様な編集されてるなあ。此方が完全な加害者みたい。

『ダグバを擁護する一部の人達はこの残虐なる殺戮を肯定すると言うのですか。ダグバの行動は決して許されるモノでは有りません』

ん？彼らを殺したのダメだつたのかな。自衛隊にしても殺してたろうし結果は同じなんじや。正体不明の自分でなく日本人の自衛隊が殺すべきだつたって事かな？それか殺さずに捕虜にすべきだつたとか？どれにしても助からない人は確実に増えてただろうけど……。

あ、ダグバを殺せるかとか眞面目に討論してる番組もある。討論はあるとは思つたけど：討論してるこの人つて平和の敵とか軍靴やら自衛隊を目の敵にしてた人だ。平然と兵器の話をしてる。

眞面目な内容で仮面ライダークウガの映像も流してる。ダグバの場合は最終決戦の名シーン。ダグバがちゃんと出てたの最後しかないから仕方ないかな。シユールんだけど

倒しかたについては、グロンギは警官の銃弾でも一応ダメージはあるけど再生能力がある。なので包囲して再生が追い付かないレベルで飽和銃撃。小細工無しの真っ向からの力押し。銃弾が無理なら大型ガトリングや対戦車 bazooka を撃ち込もう。象でもミンチに成りそうな攻撃があ。特撮だとまず使われない強力な兵器での攻撃……。効く効かない以前に、実行するなら人の居ないところに移動させない

と被害がとんでもない事になるんだけどうするんだろ。周りを巻き込んでやるのかな。

一発でも危ない化学兵器。

クウガの原作のあつた世界だとグロンギ的に致命傷にもなる神経断裂弾は人間作。造るのに必要なモノが確かクウガを殺しかけたキノコみたいなグロンギの胞子だつたかな。この世界には無い筈、けど効果は似た科学兵器が造られるのかな。テレビで神経断裂弾の開発について話してる。他にも危険な毒を用意してそう。研究所まで紹介してる。別に開発してる研究所を襲撃する気なんてないけど、報道して良いのかな。ボクを呼ぶことに成るとか思わない?おびき寄せる罠とか?

最後の対策はG3みたいなアーマードライダー、パワードスーツ開発だね:是非ともパワードスーツは見てみたい。けど実際に戦うと考えると……中身を燃やしたら装甲云々関係ない。

あとはベルト破壊、原作でダグバが死亡する原因のベルトの破壊か……靈石が埋まつててグロンギ全員の急所。ボクの体に靈石とか埋まつてるのかな?普段の姿だとお腹を触つても特に何もない……あるのかな。ダグバの姿の時にはベルト、ゲドルードはある。

最後に周囲の被害を無視して純粹に火力でミサイルとか戦車、戦闘機の攻撃。これは:正体が判明していく不意打ちされたら不味いかな。

『やはり仮称ダグバにはクウガ原作のように人の姿はあるのでしょうか』

『存在する可能性はあると思います。原作と同様だとすれば人間なのが本来の姿でしようし』

『人間体があつた場合ですが刺青がないか調べれば判別できますよね。グロンギと同じとすればですが』

『そうですが……その確認方法には問題がありますよ』

『なんでしょうか』

『清水さん服を捲つて腕を見せてもらえますか』

『セクハラですか？』

『いえいえ！そんな意図はありませんから！刺青が服に隠れていれば確認するのは難しいと言いたかつただけですよ！』

グロンギには刺青とかあつたね。この身体にはグロンギの特徴の刺青みたいのはない。見掛けは本当に人と変わりない。靈石があるならレントゲンがアウトぐらい？人の体と何処まで同じかな。

ネットの掲示板を見てみた。

向こうに行く事にした問題についての：

男はみんな上半身裸でいればグロンギの入れ墨あるか一目瞭然だ！これを全国で実地すれば！ダグバが誰かわかる！

下半身にある可能性もあるぞ

なら証明するのに全裸にならないといけないな！

までダグバの中身が女の子だつたらどうする
え

ダグバ抜きにグロンギに女性がいる。グロンギ探しに女性でも脱いで確認しないといけない。

口リツ娘グロンギという可能性もあるんだよ。つまりグロンギか確認するのに合法的に口リの裸にしないと！

天才か！

いや変態だ

此れじやない。

此だけどこれじやない。

自称グロンギがまた逮捕されたらしい。

昨日のを今さらかよ。

いや今日のだよ

また新しいのか！

これで何件目だよ！

確か10件は越えてる。偽者ばつからしいけどその内本物が混

ざつてそうで笑えるな！

愉快犯なのか刺青をいたされた自称グロンギが出てたりするそう。今は笑い話みたいに放置されている。だけど何かあつて加熱して魔女狩りみたいな事が起きないとも限らない。

あと不安と言えば門の向こうの世界の人間がボクの事を探れないかどうか。世界の移動が可能な世界だし、ドラゴンボールの占いババみたいな超常的な手段で人探し出来ないとも言えない。家を狙つてくる可能性もある。そんな手段がないか確認するつてのが向こうに行つていた理由の一つ。

家に問題がないか確認を終えて買い物に行つた。それで買ったものを銀座の時に背負つてた石が無くなつたりユックに買った食糧やら生活物資を色々と詰めこんだ。

荷物を持つて家中から消える。次に居た場所は銀座の騒動の時に登つた屋上。原作でもダグバはテレポートとできるという憶測があつたけど、それが実際に可能だつた。可能で無かつたとしても使えた。実際に使つて解つたけど自分が可能だと思えば大抵何でも実現できるんだよ。

力のコントロールとか難しいと思つてたんだけど、うん……やつてみたら別に変身しないでもテレポート出来た。…クウガを考えると靈石の侵食が脳にも入つてるから簡単なのかな。

体の中身について考えなければ便利だよ。事件後にネットでダグバが他のグロンギの能力使えるかとか討論あつたけど、試したら出来たりしたよ。銀座事件の前に知りたかった。

銀座のあの門の前は自衛隊の人が結構いる。警備してる様な人もいる。

警備が厳重なゲートを潜るミッショソ。

センサーに捕まらないようにテレポートで一気に、メタルギアみたいにダンボール被つて突破してみたいな。バレるかな。バレてダンボールからダグバが出てきたらどんな反応するかな？

で、流石にそんな真似は出来ないからテレポートで無事に通れた。

銀座の門の先は丘。

異世界だけど一見したら地球と変わったように見えない。

この丘に自衛隊の人が基地みたいなのを造つてる。少し遠くに砲撃した跡みたいのがある。演習で砲撃したとかなければ此方の軍隊が攻めて来て返り討ちにあつたのかな。

門から離れて自衛隊の人の視界に入らない所まで行つてから思念を飛ばした。空を見ればワイバーンが飛んできてる。石と融合した白いワイバーン。銀座の時は驚いたよ。石からのお願いに従つたら融合したしね。

転生してからずつと有つたけどゴオラムの石とか知らなかつた。石があつた理由は、たぶんだけど：ダグバはクウガの対みたいな物で、ダグバにもクウガの相棒のゴオラムみたいなの居るかなつて転生の時に考えてたからかな？まあオマケかサービスみたいなモノと思う。

ゴオラムと同じならバイクと合体するべきとは思う。けどバイクでなく生き物との合体は可笑しくないんだよね。ゴオラムって元々生き物と合体するモノだよね。クウガのゴオラムも元はバイクでなく馬の鎧つて記述だし、ゴオラムは古代の產物、古代にバイクなんて有るわけないし。馬からバイクよりもワイバーンの方が正しい。

因みにワイバーンは融合の解除をずっととしてない。融合の解除したらクウガのバイクみたいにワイバーンがボロボロになりそうだけど、解除しないとそれはそれで負担が有りそうな気もするから解除しようとはしたよ。けど本人が解除しなくても良いと拒絕したからそのまま。

石でなくてワイバーンの意識はある。不思議と懐かれてる。肉体

を勝手に改造した様なものだし、前の搭乗してた騎士は潰したし、むしろ恨まれて可笑しくないとと思うんだけど、床に落とした騎士がよほど嫌な相手だつたのかな？

白いワイバーンが結構な速度で飛来してくる。飛び上がって高速で飛行するワイバーンの上に立つ。……今の姿を撮影したいな。映像撮つて投稿してみようかな？

これから向かう先は門からそれなりに離れた所にある森。森には見掛けエルフにしかみえない住民の村がある。近くには別の村もある。

主目的はエルフの村と交流すること。ファンタジーの代名詞。ドワーフの村があつたら其方にも行きたい。勿論趣味以外の目的もちゃんとあるよ？

この世界に來てる目的は自分の消息を掴む手段があるか探ると、この世界について知りたいって欲求があるから。もつと言えば物語について調べたい。転生させた何かが語った物語があるかどうか。もし物語の主流だと思えるモノを見つけたとしたら…見てみたい。悪く言えば野次馬をするつもりだね。

野次馬になるなら言葉を学ばないといけない。字幕抜きの外国語の映画を見てる様な意味不明な事になる。言葉を学んだら先ずは物語に関係しそうな事と魔法について聞きたい。厄介な魔法が有るかどうか知りたい。探索系とか

話を学ぶには交流しないと。

選んだ相手はエルフの人達。

選んだ理由はイメージでエルフなら魔法に詳しそうつてのと比較的、今の姿で反応がマシだつたから。

此処に来たときから姿はダグバ。この世界に居るときは人の姿になる気はない。どう考へても交流するなら元の姿の方がいいけど、人の姿を見せるのはリスクが大きいからね。

あと自衛隊が来る時に出来たらこの世界にダグバが居たと言う証言をしてもらいたい。ダグバがこの世界出身だと誤解してくれたら地球のグロンギ騒動は収まる可能性が少しはあるこれは運が良ければと思つてる。

エルフの村の近く。この世界に来てから活動拠点にしてる場所に降りる。少し開けた小さな丘みたいな場所には突貫で建てた木製の小屋がある。

なにか小屋の近くに居るね。

居るのは動物でもない。人ぽいかな。近くに住んでるエルフの人

が様子でも見に来てるのかな?違うみたいだ。

「――♪」

鼻唄を歌つていたのは中学生ぐらいの女の子。耳の形を見るとエルフじゃない。外見が普通の女の子には見えない。

デカイ斧に黒いゴスロリ、見てきた限りゴスロリなんて一般人が着れる世界観じやない。貴族とか…貴族なら一人でこんな所に居るわけないから違うかな。盗賊とか普通にそこら辺に居たりする世界だし。斧を持つてし盗賊相手にも戦えるのかな。……あれ斧だよね
斧に見た目相応の重さが有るなら持てるわけない。少女の腕は細い。筋肉がない。女の子があんな斧を気軽に持てると思えない。アニメや漫画でも無いと……物語の世界だつた。

強いのかな…

「……」

此方に気づいてたのか。鼻唄を止めて意味深に此方を見てる。この姿でそんな反応か。何だろう。強さは判らないけど…厄介そうな相手なのは確実かな。

斧もちのゴスロリ少女、キヤラが濃い。

この世界の物語のキャラクターかな。

友好

銀座に現れた門の先の世界は、竜が居たり魔法を打ち込まれた時点でお察しの通り、地球とは異なつた人種やら生き物が存在するファンタジーな世界。エルフや獣人に似た種族の存在を白野は確認してゐる。

エルフの女の子、獣人の女の子、男のロマンと遭遇した。

ロマンつて……実際に見ない方が良い場合もあるよね。

まあ個人的な、あくまでも個人的な意見だけね。残念ながら、ホント残念ながら、リアルだとエルフや獣人の女の子は……コスプレとあんまり変わんない。特に獣人。

あとエルフや獣人が美人や若い娘だけとか無い。当然だけどエルフにも獣人にもブサイクもオツサンも。マツチヨもいる。脂身なオツサンの猫耳、ムチムチな中年オバサンのネコミミ姿……ダグバの姿で吐血しかけたよ。

そこはどうでもいいかな。思わず八つ当たりに銀座を襲つてきた國を襲撃しに行こうと思つたけど、思い止まつたしね。

エルフや獣人、他には魔物、亜人がいる。銀座を襲つてたゴブリンやらオーケやラトルだね。亜人が居るこの世界ならダグバの姿も大丈夫かと思つたんだけど、普通に警戒される。

それなりに色んな所に行つたけど今の所、唯一警戒や怯えや敵意と違つた反応をしてくれたのは……黒いゴスロリ服を着た女の子のみ。正体不明の女の子。

二度目に来た時に何故か拠点を作つた小屋に居て話し掛けてきた。襲つてきた。戸惑ついたら何処かに行つた。毎日じやないけど結構な頻度でやつてくる。今日もやつてきて今傍に居る。傍に居る理由は不明。

着てる服も持つてゐる斧もこの世界をザツと見た限りこの娘だけの特徴、特に服装はこの子ぐらい。偉い立場としか思えない。けど何時も一人。

初コンタクトの時から何かを話すと持つてた斧で斬りかかって来た。どう考へても殺す気の攻撃なんだけど不思議と殺す気の攻撃と思えなかつた。

細い腕で斧を振り回して岩とか壊した。格好だけでなく身体能力も一般人にしては可笑しい。常人の身体能力じやない。流石に単純なスペックは此方が上だけど戦闘技能は逆に向こうが上。一応は戦つて、手加減はしたけどそれなりに戦いの形にはなつた。初めの戦いはお互いに遊びの範疇の戦いで終わつた。

黒い少女については一応襲われた形だしやろうと思えばやれたと思う。今のボクだと対応がキツい筈なんだけど、あの時は倒す気にはならなかつた……女の子だからつてのも有るけど、最低限の歯止めと言ふのかな。相手に此方を殺す気がないなら此方が殺すのは止めとくみたいな？

で、一応の戦いが終わると笑顔で話し掛けられた。楽しそうに戦いの感想を話してたと思う。

戦闘民族かな？今の僕も大概似たようなモノか。

少女はそれからボクの作った小屋の所にたまに来ると、襲つて來たりせずこちらをジッと見てくる。少女は何か自分に関しても目的があるとは思う。戦つたのも目的に関係あるとは思える。目的は気に入る。聞きたいけど言葉がまだ判らない。敵意はないと思う。だから今は放置していた。

あと少しで言葉は判ると思う。

此方の言葉を何となく理解できてきてるしね。

『何処に行つてたの？』

何処に行つてた的な質問かな。もう此れぐらいなら理解できる。未知の言語をこんなすぐに理解できるとは思わなかつた。クウガのグロンギは言葉を短期間で習得してるから、同じグロンギだから言葉を学習する速度が早いのかもね。

質問に答えるように門の有る方角を向くと少女が満足そうに頷いた。

小屋の前の切り株に座つて小屋を造つた余りの丸太をテーブルにしている。上にはカル〇ーのBIGポテトチップス（コンソメ味）。この世界特有の何かを食べたいけど……話が聞けないとどんな食べ物があるのかもわからない。

袋を真ん中から裂く様に開けて丸太の上に配置。ポテトチップスをパリパリと食べる。…ダグバの姿で食べるの罰当たりな感じが少しね。

『貰つても良いかしら?』

この言葉も理由できる。頷くとゴスロリ少女が此方の膝を椅子代わりにしてきた。膝の上でポテトチップスが食べてる。なんで乗つてるのかな?…何がと言わないけど、鎧ぽいけど、皮膚が変質したモノだから感触はあるんだけど…猫が膝に乗ってきた様な感じで無理矢理降ろそうつて気にも成らない。

パリパリ

森の中、ゴスロリ少女を膝に乗せてポテトチップスを食べるダグバ…………そこら辺の動物でも捕まえて丸焼きにして食べた方が良いかな?

ポテトチップスを食べ終わると休憩は終わり。ゴミを回収して、休憩終わり。次は日課の行動、ビニール袋に入れてと森を歩いて…エルフの村に向かう事にする。ゴスロリ少女は当然の如く着いてくる。

『バンデズギデグス?（なんで着いてくる?）』

「ふふ」

クスクス、笑うだけ。因みに別にグロンギ語でなくとも話せるけどキヤラ付け……此方の言語が出来るようになつたら変えるけど、今は会話は出来ないからグロンギ語を使つてる。

それにしてゴスロリ少女は当然の様に斧を持つてる。斧は端から見ると大きさ的に少女じゃなくてダグバの武器っぽくないかな?少女に武器を持たせる悪党ぽいなあ。

エルフの村についてた

この村に最初に来たときは弓とか魔法で盛大に歓迎をされた。黒

い少女とは違つて殺意あり。シャレに成らない衝動は沸いたけど、まさか会話をしたいのに暴れる訳にもいかない。エルフと関わる為なら我慢しようとも思う。

スゴスゴと帰るしかない。帰つてからストレス発散も兼ねてそちら辺の野性動物を手当たり次第に狩つた。野性動物は焼いて食べたりエルフの村への手土産にした。何度も繰り返したら攻撃は止んだ。いまだと入る度に悲鳴を上げたりするぐらい

今度はゴスロリの女の子と一緒にきてる。ゴスロリ少女がマスクコット桦になつてくれて少しは警戒を緩めてくれないかな。ゴスロリ娘さんを引き連れてエルフ村に入りをした。相変わらず悲鳴でのお出迎え。攻撃が無いだけとても改善はされてるつて悲しいね。

ダメか。

マスクコットどころかゴスロリ少女にも怯えた視線が向けられてる。やつぱりデカイ斧とか剥き出しに持つてるし怖いよね。ボクより怖がられてない?

何とか仲良くなりたい。

現状これでも一番期待が出来る村だしね。

此処とは他の村にも行つた経験はあるんだけど、その時は、傭兵みたいな相手に襲われる。兵士を呼ばれる。兵士を死なない程度に倒した後だと生け贅ぽい女の子を差し出される。攻撃がないだけまだマシ……

さて今回は手土産を持つてきた。大人は難しいから先ずは買ったお菓子で子供を餌付けして懐柔しようと思う。：犯罪みたいな感じがするね。

子供たちは：

逃げてるね。

姿が子供のヒーローの敵だから仕方ない？ダグバの姿だけなら子供に人気が出そうな格好いい姿と思うんだけどね。なんで誰にも警戒されるんだろう。これが異文化の感性の違いかな。避けられるボクを、ゴスロリ少女がポテトチップをパリパリしながらニヤニヤ笑つて見てる。：盗み食いされてる。

食べてる姿に子供がドンドンと興味を示して。結果的に釣り餌に成ってるね。子供がゴスロリさんの元に、子供の対処に苦労してるゴスロリを今度は此方がニヤニヤと見ておこうか。……なんでそんなドン引きした顔をするかな？

それから繰り返しエルフ村に頻繁に行き慣れて貰うた。地球にも何度か戻つて世間の反応を確認したりもした。世間的には門の事やダグバの事も未だに騒がれてる。門は仕方ないけどダグバについても相当に…。

良いニュースとしては言葉の学習には成功した。

言葉を学習した結果、ゴスロリさんはローリイちゃん。異世界から来た自分の事を確認する為に傍に居たそう。ローリイちゃんはエムロイってこの世界の神さまに仕える、神官で亞神という存在だそう。：異世界から来たの知られてた。

亞神は人から外れて何れ神になる存在らしくて、ローリイちゃんによるとボクも別世界の神に仕える亞神という認識らしい。大きく外れて無いような気もするし否定はしなかつた。で、ローリイちゃんには堂々とこれからも監視をするために傍に居ると言われた。

まあ監視は良いけど…それより、この世界に居たつて証明をしたかったのに、別世界から来た事はロウリイちゃんとかは気付かれた。他にも気づける人はでそう。やっぱりこの世界出身で事にするのは無理だと思うしかない。なので聞かれたらある程度は本当の事を話した方がいいかな…

何度も通ったエルフ村。今日もまたゴスロリ少女を伴いエルフの村にやつてきた。何度も来たお陰か警戒も随分と薄くなつたよ。仲良くなれそうで良かつた良かつた。

「仲良くは成つてないと思うわー」

ローリイちゃん人の独り言を聞いてバツサリと本当のことを言うのはどうかと思う。

仲良くは少し今は無理だけど会話は出来る。エルフの人々に魔法については聞けた。特定の誰かを探す感じの魔法は知らないらしい。

けど存在しないとも言えないらしい。

魔法の学術都市ができるぐらい魔法の研究をする魔法使いは沢山居るらしくて、人探しの魔法を作つてる魔法使いが居ても可笑しいなそう。つまり魔法使いが居る限り探し出される可能性は無くならない。まさか厄介な魔法使いを殲滅するなんて訳にもいかないしね。
…うん、流石にダメだよね。

「あら？」

ロウリイちゃんが何かを見てた。

空に影がある。

うちのワイバーンが来たのかな。

どうやら違うか。

色が赤い

随分と大きい。

まるで怪獣みたいなドラゴン。

此処がモンスターハンターの世界なんて可能性は無いかな。
あ、炎吹いてきた：

銀座事件から何ヵ月か。

自衛隊は特地への潜入を果たしアルヌスと呼ばれる丘に拠点を造つたが、拠点に現地の軍が進軍してきた。当然ながら自衛隊は迎撃した。

自衛隊と特地の現地軍の力の差は歴然。

現地軍は何万か。単純な総動員数は現地軍の方が遥かに多かつた。
しかし戦力には数だけでなく質もある。

自衛隊は当然現代兵器

現地軍は中世相当。

極端に言えば弓矢を持った百人とミサイルが射てる一人ならどちらが強いか。現地軍は銃撃や砲撃に晒され攻撃が届く位置に辿り着く前に殆んど撃破される。万の数でも武装が中世相当だと、正面から重火器相手では勝負には成らなかつた。

勝負の結果は現地軍の壊滅。

自衛隊の戦死どころか負傷者もいたかどうか。

容赦ないとも見えるが近付かれれば自衛隊の被害が甚大になる。それに自衛隊はあくまでも襲われた被害者側だ。銀座で殺戮をしてきた加害者相手に手加減しろと言うのは酷だろう。

銀座で市街地で散々な戦いを味会わされたあとの戦闘、戦つた実感すら感じない圧倒的な勝利をおさめた自衛隊、銀座ゲートと繋がったアルヌスの丘を拠点とし周辺の偵察活動を開始。偵察には、最大限の警戒をするよう命令がされた。

地球と常識も違う敵地で油断しない様にするのは可笑しくない話だが、自衛隊の最大限警戒している仮想敵は居るかどうかもわからないうまかどうか決まっていない相手だ。

自衛隊はこの世界の情報を必要としていた。
だから偵察を出した。

自衛隊の偵察部隊の1隊。二条橋の英雄と呼ばれる事となつた伊丹二尉率いる第3偵察隊。隊長を任された伊丹率いる第三偵察隊はジープで移動しながら雑談をしていた。雑談をしながらも警戒はしているが、油断しない程度には緊張感は薄いようだ。隊長の伊丹の影響だろうか。

「隊長つてあの銀座事件の時に居たんですね」

「ん、あーまあ一応」

「銀座の英雄が一応ですか」

「英雄（笑）さまだぞ」

「自分でカツコ笑いとか言わないでください」

「で、銀座に居たからどうした」

「いえね。話題のあれを隊長は直接見れたのかなって」

「それ……門から出てきた奴等のことじゃないよな?」

「白いお方の事つすよ」

「見てない見てない。いや遠目に何か見えたけど当時は何か判らなかつたぞ。テレビで見て初めて知ったわ。意味不明な発火そういう事だったのかつてその時にようやくわかつた」

「それは残念でしたね」

「ハツキリ生で見れなかつたことがか?まあ残念と言えば:残念か?」

「ぎ、残念なんですか?白い怪人……あのダグバがハツキリ見える距離に居るなんてゴメンじやないですか」

「あのダグバって、もしかして栗林は仮面ライダークウガ見たことあるの?」

「ありますよ」

「え、見たことあるんだ意外?」

「ああ見たのは銀座事件の後ですよ。隊長みたいにオタク趣味があるとか誤解しないでくださいよ」

「ああ自衛官幹部が銀座事件の後に、ファンタジー系の本を色々と書店で買ったみたいな話があるけど、栗林もそれか?」

「そんな感じです。少しでも事前の知識が必要と考えてクウガ全話見たんです。見るのに苦労しました」

「借りれたの?ダグバの影響で全店でDVDは貸し出し中になつてるとニユースになつてましたけど」

「…借りれなかつたから買つたの。DVD高過ぎ」

「あー買つたのか。で、見た感想は?」

「感想?まあその、面白かつたです。……子供向けとバカに出来ないモノでした。アレ本当に子供向けですか?」

「作品じゃなくてダグバの感想だよ」

「感想もなにも……なんですかあれ、やる気になつたら単体で日本を壊滅させれるとか。核も無効に出来るとか……ダグバだけ他のグロングと桁違いすぎませんか」

「それ設定とか考案:DVD以外も相當に見てるつすよね」

「まあ特撮の設定はブツ飛んでるの多いからな……問題はそのブツ飛んでる設定まんまの強さかどうかだよ」

「現実に確定してる強さは……銀座での話ですよね」

「銀座事件だと死体とか残つてないから推測だけど、五桁の被害らしいな。クウガ原作でやらかしたダグバ並みの事はしてるぞ……」

「銀座の民間人に被害を出した話しは有りませんが、正直……襲撃犯より恐ろしいですね」

「ダグバって警戒しないといけないんすかね」

「何万も人間を焼き殺す危険生物よ。警戒しなきやいけないに決まってるでしょ」

「いえ、危険なのは否定しないんですけど、ダグバのお陰で銀座の人があ勢助かつたんすよ。テレビの学者さんの話だとダグバのお陰で犠牲者が二桁ぐらい増えずに済んだみたいですし……恩人を警戒し過ぎるのもどうかと」

「恩人ね。テレビでも言つてたけど今回の殺戮のターゲットが銀座を襲つた連中だつただけつて懸念が有るからなあ……『予先がどうなるかわからんのだし恩人つて事で警戒しないのは絶対にダメだろ』

「ターゲットつて、グロンギのゲームみたいなことがあるんすか?」

「無いとも言えないだろう」

「……ダークヒーロー路線とか想像してたつすけど、そう言われるとダグバ怖いっすね」

「あれで終わりでもう二度と現れないって事なら一番ありがたいんだけどな」

「本当に現れて欲しくないですよね。少なくとも私達の前には、見掛けたら対話を試みろつて上からの命令ですし」

「無茶な命令つすね」

「無茶でも上の命令だから従わないどダメなんだよなあ……他に居るかどうかとか確認したいってのはわかるけど」

「隊長は他、ダグバの他にグロンギ族が此方に居ると思いますか」「どうかね。：一応居ると考えとこ、判つてると思うが此方の現地民をなるべく怒らせるのは止めてくれよ。その怒らせた相手が偶々グ

ロンギとかゴメンだからな」

「そんな話をされたら住民と出会うの怖いですよ」

「小さな村だと思つて入つたら、村人皆グロンギなんて事が？」

「だから怖いこと言わないでよ！」

「村どころか町規模でグロンギ居て敵対したら、下手したら自衛隊どころか日本が終わるな。ま、ダグバ一体だけでも日本終わるって言われてるから誤差かハハハ」

「……隊長それ笑えません」

「……スマン……」

「ダグバの事を話してたら出会わいか不安になつてきたつす。居ないつすよね」

倉田は双眼鏡で周りを見た。

「ダグバと偶然会うなんてどんだけ運が悪ければあるんだよ」

伊丹が笑うように言う。

倉田も冗談のつもりだった。

「あの森に情報にあつた集落が……隊長！」

双眼鏡を覗いた倉田が緊迫した声を出した。

「どうした」

「も、森を見てください」

「……煙が出てるな。森が燃える？」

「あの煙より遙かに不味そうなものが見えるんですけど」

「あ、見えてるの、幻覚じやなかつたか」

「……」の世界、どこまでファンタジーなんだ

第三小隊は森を燃やしている犯人を見付けてしまう。犯人、いや火事の元凶らしき生物とは相当に離れた距離にあるが、望遠鏡が無くても見えてしまうほど大きい。

赤い鱗を纏つた怪獣サイズのドラゴン。

「とんでもなくデカイ蜥蜴だなあ」

「隊長、トカゲつてどう見てもドラゴンですよあれ。……つてドラゴンの様子が可笑しく有りません?」

「可笑しいってドラゴンが居るのが……確かに動きが可笑しいな」

目視では龍が何もない空中で暴れている様に見える。何かに殴ら
ているみたいに仰け反つたりしている。

「ドラゴン悲鳴あげてないか？」

双眼鏡で見て いる倉田だけはドラゴンが悲鳴をあげてる理由がわ
かった。

「た、隊長!!これで見てください！・ドラゴンの周りを」

倉田がそう言いながら自分が使つていた双眼鏡を伊丹に渡した。
伊丹は嫌々双眼鏡で龍を見ると龍の近くに何か居る。ドラゴンか
ら見ると人形に見える大きさ。大きな剣みたいなのを持つて いる。白
い鎧のーー伊丹はそつと双眼鏡から目を離しこう言つた。

「…………よし！撤退！ビルみたいなドラゴンが居ることを本隊に伝
えよう！」

「え？…………その、ダグ「あんなデカイドラゴンが居るなら早急に下がつ
て本隊に連絡する必要あるよな！」あ、はい」

倉田は良いのかなと思うも伊丹の言葉に頷いた。

「ドラゴン居るしな。隊の安全の為に彼処に近づけないよな！」

「あ、ドラゴンが飛んで逃げていきました」

ある意味ベストタイミングで栗林が言う。

伊丹は飛び去るドラゴン（行かない理由）を見送るしかない。

「チクシヨウめええ！」

ちよつとドイツの某首相が乗り移つた様な叫びだ。ドラゴンしか
見てない隊員には何でそんな反応なのかわからない。見るからにヤ
バ そうなドラゴンが居なくなるのは良いことじゃないか？まるでド
ラゴンよりもヤバ そうな相手でも見たとでも……察した。

「隊長、：居たんですか」

ベテランの富田が代表して聞いた。

それに対して伊丹は深い溜め息をついてからいつた。

「……フラグつてあるんだよ」、

「フラグ？」

伝わらなかつたようだ。

伊丹は言葉をかえた。

「こう言う言葉あるだろ、お化けの話をしてたらお化けが出るみたい
な……」

沈黙があった。

ドラゴンの前には何の話をしてたか…。

「隊長…それはつまり…銀座事件の時の白いお化けが居たと」

「いたんだよ」

察した事が間違いでないと理解して全員が沈痛な面持ちになつた。
「はああ…行くしかないよな…倉田三曹！」

「は！」

突然やり手の上司の様に威厳を出した伊丹に背筋を伸ばした。

「これから向かう先で現地の住民と遭遇する可能性がある。その時の
対話役を君に任せる！」

「了解しま……い、いやいやいや」

倉田は反射的に了承しかけて慌てた。此れから向かう先の現地住
民とはあれだ。貧乏くじを押し付けられそうになつてゐる事に気づい
た。

「た、対話でしたら、男より女性の方が良いですよ!!なのでいざという
ときのことも考え白兵戦能力が高い栗林一曹のほうが適任では」
「はあ！……此所はやつぱり誠意を持つて隊の代表たる隊長が逝くべ
きでしよう」

「おい！絶対いくの文字が可笑しかつただろ！」

「気のせいです」

「なら目を逸らすなよ」

他の隊員も巻き込んでの押し付けあいに発展した。巷で有名な英
雄の部隊なのにグダグダだつた。時間を無駄に消費して…誰かと言
わないが何かが去るまでの時間稼ぎをしてないか？。

「あ、…対話役には必要ですね…グロンギ語とか」

「…グロンギ語…」

「対話役はグロンギ語を使えるのは必須ですね。…隊長つてグロンギ
語を覚えてると自慢してたつすよね」

「ハハハ、なにを言うのか倉田くん、倉田くんもグロンギ語いけるよな？」

「これで候補は二人に絞られた。

お互ひが無言で牽制しあつた。

一人の女性士官がまるで巻き込まれない様に視線を逸らしていた。
「なあもしかしてクリもグロンギ語いけるんじゃないかな」

「え?!なんでしつ…」

この反応…実はグロンギ語いけるなと二人の男は確信した。今度
は三人で牽制しあうことにならなかつた。

「お三方が対話役でいいですね」

これ以上グダグダは嫌だつたのか有無を言わせず衛生兵が纏めた。

「……」

円満に対話役が決まり偵察隊は森に入る。ドラゴンが居た方向に
森を進んで行くと…

ファンタジーの王道のエルフの村を発見。エルフだ!と喜びたい
オタク自衛官が部隊の中に二人も居たが、どちらもそれどころじやな
かつた。

銀座で大暴れした白い怪人と遭遇した。

接触

銀座で離れた白野くん。

白野くんは無事で良かったよ

騒動の後始末を終えてから連絡したけど返答がなかつたから心配したんだよ。犠牲者の名簿とか調べてもなかつたけど、まだ遺体が見付かって無いか……遺体が無いって可能性もあつたから、連絡が来るまでもしかして俺が誘つたせいでつて、あの時送らなかつたせいつて考えて怖かつた!! 連絡が着くまでは白野くんがあの世に居つてないかずーーーっと心配してた。何日かして返信があつて安心した……まさか次に自分があの世に行かないか心配になるとは（白目）いや元から職場柄、命の危険は有るもんだけど：

日本の陸上自衛隊、俺が就職した職業。

名前の通り勿論日本の防衛が仕事の職業。護るのは日本。日本以外にはまず行かない。海外に行くの怒られる組織だし。あ、支援に海外に行くことはあるか。支援先が戦場近くでもなるべく戦つたらダメと制限を付けられる。日本からは攻められない。

日本は攻められた。

自衛隊初の専守防衛。

戦争、専守防衛の行き先として……外国どころか地球を旅立つてしまふ俺達自衛隊。信じられるか俺つて今、異世界に来てんだぜ。現実世界にいきなりS F の世界観が混ざるとかパワップ○か。

銀座から移動時間なら隣の県に行くのより近い異世界。あの銀座事件で来た襲撃者が残した銀座ゲートを通つて来れるお手軽な異世界。攻められた側の住民で無ければファンタジーな世界を少しは楽しめたかなあ。

偵察に出ていた道中で俺たちは暇潰しに色々と話していた。中には……銀座においてになつた某白い怪人さんについても話してた。そんな話をしてた少しあと……フラグさんつてあるのな。フラグさ

ん何で現実にフラグさんが仕事してんの？フラグさんは働くかなくて良いのよ

銀座ではコミケに行つたら侵略の現場に遭遇、そして今回は多分自衛隊初の、火を吹くビルみたいなドラゴンの発見、で、今度はフラグさん達成！白い怪人の発見！偶然にしては酷すぎるだろ！ドラゴンだけで十分すぎるんだよなあ。なんで二連でおそろしいモノに遭遇すんのさ。

なんだよオレ主人公か！主人公でヤバイのに遭遇する主人公補正か？波乱に遭遇する主人公補正でも俺についてたのか？オツサンに主人公何てあるわけないな！それでも主人公気取りで叫ぶか。不幸だああ！

つて、実際は状況的にそんな台詞は叫べないから心のなかで。周りに居るの部下、特に望んでないのに昇進して今じゃ隊を率いる隊長つて立場。叫んだら部下に転属願いとか出されるだろうなあ。冗談で思つたけどマジで有りそう。

「不幸だあ！」

ケモナーの倉田このやろう。俺がやりたかつたことを!!悔しくなんてないからね！てかなんで倉田が言つてんだ！あ、いや、そう言えば倉田も体験的に言えば殆ど同じか？

倉田もあの日に銀座近くに居たそうだ。今回ドラゴンの出会つたのも同じ…てことはコイツが主人公かもな。主人公か、引き寄せてハピニングと遭遇する主人公か？…何処かに置いていこうか？

「あ、あの隊長？叫んだの悪かつたんですけど、車から降ろそうとしないでください」

「冗談だよ…対話役（生け贋）に必要だからな」

「不穏な副音声が聞こえたつすよ」

「じやれてないで下さい……森の火が消えますよね」

森の火がいきなり消えるつてなんだよ。あんな大火事な感じの火がいきなり消えるつて、…そんな事ができそーうな犯人予想できるわ。森が焼けてないなら暫く待つてようとか出来ない。

態々火を消すつて繩張りなのかな。

ちようど戦つてた辺りだよな

あと……

「集落あるつて情報あつたのこの森だよな…」

集落つて…グロンギの?

もう転属願いとか出されてもいいから駄々こねて行くの嫌がるか。ダメか。ダメだろうなあ。無駄に社会的に死ぬだけだしなあ。物理的に死ぬよりましだけど……今さら行くの止めるなんて無理だよなあ。あー白野くんにもしもの時の為にHDDの中身の破壊をお願いしどけば良かつた。

森だから車から降りて移動。焼けた臭いのする森を進んで第三偵察隊が辿り着いた場所はまだ火の氣の燻る村。：建物だけじゃなくて人の焦げた臭いもする。さつき見たあの怪獣みたいなドラゴンに襲われたのかね。

「……グロンギの村では無いですよね？」

出迎えたのは震えているこの村の住民らしき現地民。あんな怯えた感じのグロンギ（怪人）は居ないよな。てか！現地民のあの耳、見た目がどう見てもエルフ（仮）だな！それとゴスロリの少女が何故か一人……。

そして、

居たよ

普通に居たよ。

白い怪人、本気で見掛けがまんま『ダグバ』だ…。着ぐるみには無い生物らしさがあるよ。なんでここに居るんだよ！なんで俺が出会うんだよ……此方をみた。

敵意はない、か？

腰が抜けそうな威圧感は有るけど攻撃する気は…無いよな！？

「銃を向けるなよ」

「りよ、了解」

俺自身も銃を構えそうになるのを必死に止めてそう指示をだした。仮称ダグバさんは何をしてらっしゃるんだ。俺達をチラツとみただけ、酷い火傷をしたエルフさんに触れてる？火傷が消えてないか!?工

ルフさん達の治療に見えるのは……気のせいじゃないよな？ グロンギに治癒能力あつたし出来るのは理解できる。治癒してるのが理解できない。仲間：つてのと違うよな。

治療されてるエルフさんたちビビってらっしゃるし。

…部外者つて感じがするな。

白い怪人さん相手へのエルフの反応的に村の住民では無さそう。あのドラゴンを狙つて偶々立ち寄つた？ それか：俺達みたいに情報収集目的…

「……隊長」

話さないとだめか…こんな絶好の機会を見過ごして、後から敵対なんて事になつたら目も当てられないしやるしかないよなあ。やらなきやダメかな？…はあいこうか。

あ、木が倒れてきた。

バキッと素手で軽く粉碎した。

うんやつぱムリ。

向こうにヤル気がなくても小突かれるだけで死ねる。頑丈さが足りない。対話役に一条さん呼んでこいおら!!

「隊長」

俺と一緒に対話役として選ばれた倉田と栗林が目が語つている。『無理です』どうやら同じ意見の様だ。

「隊長、行つて「な、何て事だ！ 村が壊滅的な被害を受けてるじやないか！！ きっとあのドラゴンの仕業だな!! 人道的に救援しなきや（使命感）」いや、あの」

此処は勢いで突つ切るしかない!!

「これより第三偵察隊は被災者の救助活動に全力で当たる！ 各員良いな！ それ以外の事は後回しだ！」

「え、それは」

「俺達が最優すべきは民間人らしき負傷者の救急治療だ!! まさか地球の人間でないから優先度が低いとは言わないだろうな！」

「いえ、そう言ふことはないんですけど」

何も可笑しいことはない！ 自衛隊として、いや人として怪我人を早

く助けないとな！ダグバさんとの会話は後だ。：治療してゐる内にどつか行つてくれないかな。それかなんとか倉田か栗林だけに押し付けられないかな。

「救助を開始します！しなし隊長、救助は俺達でしますので隊長は彼方の方と話を」

裏切りやがつたな倉田ああ!!
人として恥ずかしくないのか！

「いや！救助に隊長の指示は必要だろう。だからもし行くなら…」
栗林と倉田どちらかを見た

「私は救助をします。倉田曹長は救助より対話をしたいようです」「そういう訳じや。ん？曹長…なんで二階級特進してゐんすかね!?」
無視しよう。

「ちよつ！放置ですか!?」

民間人救助の邪魔をする倉田を置いて早く救護活動をする。いや正直後回しにして良い問題じやないのは判つてるよ。けどほら：向こうも懸命に？治療してゐる感じだしな。治療してゐるのもう味いしせめて後の方でつて事だ！！…………ホントだよ？

隊員達は爆発物を刺激しない様に離れて救護活動を開始。なんかコンビニのポテチとかの袋があるんだけど、誰かツツコメよ！オレがツツコメ？やだよこわい。

うん…どうしようか。

足しげく通つていたエルフ村で襲われた。襲つたのはワイバーと比べ物にらない程に大きな赤いドラゴン。ドラゴンはファンタジーモノに出てくると人以上の知性があるなんて事もあるよね。だから話しあいをしようとした。知性があると信じてね。

ドラゴンに火炎放射をぶっぱされた。直火を浴びた。知能なんてない相手だった。気付いたらドラゴン相手に突つ込んでた。後から考えるともう少し落ち着けよと思うけど、思考が過激に成つてゐるからね。

喰おうとしてきたから牙を碎いた。尻尾は引き千切つた。折った爪を剣にしてザクザク、動物愛護団体に怒られそうな事をしてたらドラゴンは退いた。追撃は止めといた。巻き添えでエルフ村が酷い事になつてたしね。

それにしても巨大バスとか仮面ライダーの世界観だと強敵だけど、まあ何とかなつた。

火事が起きてたけど火を消した、エルフの人達の損害は火傷の怪我人ばかり、死人は出てない感じだけど、それはまだつてレベルで、火傷で死にそうつて感じ。持つてきたモノに包帯とか消毒液とかあるけど意味がない。

死なれると折角これまで対話の為に頑張ってきたのに努力が無になる。

やつてみたことは無いけど治療を試してみた。作中でグロンギには治療とかする能力あつたしね。ボクも出来るかも、ダメで元々、死ぬような火傷みたいだし、今死ぬよりはきつとマシだよね。

エルフの人達を治療の実験台にしてたら治療をしてたら自衛隊の人等が来た。多分ドラゴンか火事を見てだろう。遠目に見えたけどやつぱり自衛隊の人達……ファンタジー世界観で車で来るつて違和感すごいな。

自衛隊を率いてたの…まさかの伊丹さんだつた。

本当にまさかだよね。自衛隊だし会う可能性はあるかもと思つてたけど、なんで自衛隊との初遭遇で伊丹さんと遭遇するかな。相手に自衛隊の中に英雄(笑)の伊丹さんが居たらイタズラ心も、じやなくて友人として去るのはどうかと思う。他の自衛隊なら治療したら去ろうと思つたけど会話をしてみようかな。

その内関わろうと思つてたから丁度良い。

関わるの伊丹さんからに成るとは思つてもなかつた

そう言えば、伊丹さんと初対面で銀座の時にゲートを目撃して、そして今回は伊丹さんが近くに来てる時にドラゴンの襲撃。自分が言うのはなんだけど伊丹さんつて可笑しい。

今まで平穏だつたのに伊丹さんと直に出会つてから一気に騒動に

巻き込まれてる…と言い換えないかな。物語で事件か騒動がある所には主人公がいる。伊丹さんって『ゲート』の主人公なんて事は、オタク自衛官が主人公、そんなの無いとも…言えないかな。30代既婚者のファンタジー作品の主人公…有るかな?

攻撃はしてこない。なら接触をはからうとしてくるよね。どう接触してくるかなと治療をしながら待ち構えてたら伊丹さん達も治療を始めた。

流石は海外で評判のいい自衛隊。

人道支援優先なんだ。

ボク後回しにして良いのかな?

治療が優先なのは間違つてるとは言えないけど、身構えてた分肩透かしを喰らつた。

伊丹さんがチラチラ見てきてる。

ダグバのファンかな?

写真撮影頼まれたらどうしよう。

ロウリイちゃんがいつの間にか来て自衛隊を面白そうに見てる。

珍しいからかな?それかボクを監視してたのと同じ感じ?

さて、そろそろ重症なエルフさん等の治療も終わる。意外と治療は上手くいった。

自衛隊の人達もソロソロ接触してきてもいいんだよ?相変わらず見てくるだけ、あれかな、大好きな有名人を見て緊張するファンみたいな感じなのかな。他の自衛官は知らないけど伊丹さんならそんな感じだよね。

「隊長、クリ坊、倉田……怪我人の救護は後は俺達だけで出来ます。本当にそろそろ役目を果たして下さい…」

「見なかつた事にしない」

「頑張つてください。治療をしてましたし、とても良い人(?)だと思いますよ」

「ドラゴン殴りとばす良い人と話せる度胸は無いなー。グロンギ語以外もいけるかもしぬないし別に黒川が対話を試みてもいいよ?」

「……隊長最低です」

あれ伊丹さんでも駄目なのか。

プルプルプル、ボクは悪いダグバじゃないよ。ちょっと悪人を（数万ほど）燃やしただけの平穏なダグバだよ。動物には優しいよ。証拠に悪いトカゲ（炎龍）は博愛の精神で逃がしたよ。…これ言つたらどうなるか試してみようかな。キヤラ崩壊なんてもんじやないし止めておこうか。

「じゃんけんしない？」

「往生際が悪いですよ」

本気で怖がってるのかな。本気で怖がってあんな会話を本人の近くで出来ないんじゃないかな。日本語理解してると思つてない？ グロンギ語とか言つてたしグロンギ語で話し掛けてくるのかな。…グロンギ語は勘弁して欲しいかな。ちょっとダグバ感を出したくて銀座でもやつてたけど、会話とかやりにくくしね。

「ほら行つて下さい。向こうも待つていてくださつてる感じですよ！」

「……はあ、もう！」

あ、小柄な女の人が来た。

伊丹さんの腕が掴まれてる。

「あ、俺も行くんですね」

伊丹さん隊長なのに……扱いが…

対話の言葉はどれかな。

初めはこの世界の言葉かな日本語かなグロンギ語かな。一番イヤなのはグロンギ語だよ。

「ぐ……グボギジョギゼグバ（少し良いですか？）」

グロンギ語…翻訳すると言葉が可笑しくなつたりするんだよ。

「パセパセパジゲギダギギンゼグ。ガバダドダギパゾギダギゴベガギギラグ（我々は自衛隊員です。貴方と対話をしたいお願ひします）この女性、重度のクウガマニア？それとも自分との対話に自衛隊で練習してたのかな？態々練習したなら悪いとは思うんだけど、此れからずつとグロンギ語で会話は嫌かな。少しキヤラ崩壊してもいいか。

「…………ニホンゴデオツケイ?」

対話

此殆どが焼け落ちた森の中の村。まだ火の氣が燻り焦げ臭い。村の被害に反して助かったエルフは多い。しかし村の修復は難しそうだ。まだ一から作り直した方がましだろう。

そんなエルフの村の跡地から少し離れた場所。

其所に居るのは伊丹と栗林。彼等の前に居るのは銀座に現れた白い怪人。

リアルな着ぐるみだという説もあつたが、間近で見ると判る：着ぐるみじやない。

白い怪人は近くで見ると生々しい部分が見える。鎧の様な部分も生物のそれだ。この世界にダグバに似てるだけの生物が居たと考えようにも、醸し出す気配が：本物のダグバだと納得させられてしまう。

「（ああ、この年で漏らしそう）」

一つの物語りの始まりであり終わりでもある悪の集団の首領。物語の中では思想や目的もなく…ただただ純粹に大好きな戦いの為に戦つたとしか思えなかつた最後の敵。

ン・ダグバ・ゼハ

「君達ノ言葉ハワカルカラ、スキニ喋ツテイイヨ」

姿と銀座で見せた力を考えれば、ダグバの同位体にしか見えない相手が伊丹と栗林に気さくに話し掛けて来ている。軽い感じの方がむしろ怖いだろう。

「ふふ」

白い怪人の隣、二人の反応に可笑しそうにクスクスと笑う正体の判らない黒いゴスロリ服を着た少女。デカイ斧を持っている。ダグバの隣に居なければまだ変な少女と済ませられたが、ダグバの隣に居るとなると…：

「（この子、グロンギ…）」

クウガの物語でのグロンギは大体は良くも悪くも特徴的な服を着

ている。ゴスロリで斧まで持っていたら…まあダグバの隣に居ることも合わせグロンギだと疑われても仕方ない。

認識としてはグロンギ2体。片方は銀座で数万焼いて消滅させた存在。想定される力を最大限に見積もるなら世界がヤバイ、核のような戦略兵器並みの評価、鍛えた軍人でも恐がるのは仕方ないことだ。伊丹が栗林に話すように目で促す。部下に嫌なことを頼む。栗林の米神がピクリと動いたが、流石に相手を前にして押し付けあいをするわけにもいかず栗林は自分が話すことにする。代わりに（栗林の）ただできえオタクだと嫌われてた隊長への信頼感はマイナスに振りきれそうだ。

「ドウシタノカナ」

「い、いえ、なんでもないです。お言葉に甘え日本語で話させてもらいます。…では…、初めまして、私達は日本国から来ました自衛隊員のモノです。私は栗林、隣のは一応私達の隊の隊長である伊丹二尉です。お聞きしたい事があるのですが少しお話しを窺つてよろしいでしょうか」

「伊丹サンニ栗林サンデスカ。ドウゾヨロシク。ソレデ聞キタイ事ハ何カ…ナ」

ダグバの言葉が少し不自然な形で途切れる。キャラ付けに片言でエセ外国人を演じてるようで笑いが込み上げてきたのだ。

相手の反応に二人はダラダラと汗を流す。反応が予想できない。相手が相手なので次の瞬間に炎上して灰になつても可笑しくない。栗林は小柄な女性だが勇敢な自衛官だ。例えば多数の敵が轟めく中に突っ込む程の胆力もある。それでも体が震えてしまう。

「スミマセンネ。ドウゾ聞キタイコトヲ」

「あ…ありがとうございます。…では…先ず貴方があの場に居た経緯について教えて頂けないでしようか」

言葉が色々と足りない。

「アノバ？」

「あ…す、スマセン！あ、あの場とは一月ほど前に襲撃がありました銀座の事です！」

栗林は慌てて補足する。しかし補足も足りない。相當に緊張して
るようだ。

「ウン……ソレハ門ノ先ニアル銀座カナ?」

ダグバがフオローするように聞く。銀座という単語が出たことに
少し引っ掛かる。日本語が出来る事と良い…ダグバが日本に何日も
居たと推察が出来る。

「は、はい：それであつています。少し前に私達の世界の国、日本の銀
座は此方の世界の住人に襲撃を受けました。その襲撃時に……貴方
が居たと多数に目撃されています。もし目撃されたのが貴方で有つ
ていたのでしたら：何故あの場に居たのか……目的なども含めて教
えて貰えないでしようか」

質問をした栗林はもちろん、隣の伊丹、遠巻きに聞いている自衛官
たちも息を呑んだ。最悪の答えも予想できてしまう質問だ。

「襲撃ノ時ハ……居タ理由ハ偶然トシカ言エナイカナ」

ダグバがチラリと伊丹を見たが二人は気づかない。

「ぐ、偶然、偶然というのは…」

「ボクハ銀座デ観光ヲシテイタンダヨ。ソノ時ニ偶然アノ襲撃ニ遭遇
シスタンダ」

二人はお互に顔を見合せた。

「か、観光ですか。あの、え、貴方は銀座に観光ニ：ア、日本語が使え
るのは観光してたから…え、日本で観光を？い、何時から銀座に居た
んでしょうか…」

栗林は混乱しながら聞いた。

「銀座デハナイケド、日本ニハ結構前カライタヨ……アア、不法入国ニ
ツイテハ申シ訳ナイ。パスポートハ無クテネ。ケドソレ以外ハ滞在
中概ネ君達ノ國ノ法律ニ違反シタ行為ハシテイナイカラ安心シテホ
シイ」

本人としては緊張を解すための单なる冗談のつもりだつた。

受けとる側としては……あの襲撃の日ダグバがやらかした事が法
律上問題無いのかと言われば、発火現象みたいな超能力は立証出来
ないのであれば、それ以外に立証出来るモノで大量殺戮やら銃刀法

違反やら法律違反のオンパレード。証拠画像もスマホの撮影や防犯カメラ等で豊富。あとポテチなど…日本で買ったとしたら、買つたお金の出所は?

「(色々とアウト!……つて言えるか!!)」

アウトとも言えない。逆にセーフとも言うことも出来ない。後日に万一にも日本で法律違反者とダグバが扱われたらどうなるか。問題無いと言つた後に追求されたらどうなるか。

グロンギは作中で狙つた獲物は逃さない。どんな手段を使つて追跡してたのか不明だが逃げれたターゲットは……更に言えば自分だけで済むのか、相手を考えれば関係ない身内や関係ない民間人も巻き添えになる可能性は大いにある……一人の心臓はバクバクと破裂しそうだ。

因みに本人的に返答は求めてない。仮にどう答えるても友人の伊丹はもちろん友人の部下の栗林達に何かする気は欠片もない。何かするつもりはない。しかし二人にはそんな思惑なんて友人の伊丹すら気づける訳がなかつた。

「(質問もういいのかな?)」

ダグバが無言で見てくる。早くどう思つてると答えると催促してゐる様に見える。二人にとつて自分達の命は次の発言に掛かっている。いや!相手を考えると、下手をすると自分のどころか多数の日本国民の命も天秤に乗つているかもと思えば、幾ら勇敢でもない若い真つ当な良心のある女性の心理的なストレスは限界値を越える…。「そ、その…あの…」

まだ自分の命だけなら大丈夫だつたが、若い身空で多数の命を背負つた(勘違いの)責任のプレッシャー、意識を旅立たせかける栗林。「クリちゃん…クリちゃん大丈夫か!」

伊丹は意識を飛ばし掛けてる栗林の肩を揺さぶる。一人で残されたくない一心だ。間違い。伊丹は部下を心配している。

伊丹の肩に手が置かれる。

白い硬質な手。

誰だと考へるまでなくダグバの手だ。

伊丹の下腹部から何かがチョロツと漏れかけた。

「ななな、なんでしょうか！」

「体調ノワルイ女性ハ休マセテアゲタラドウカナ？話ナラ伊丹サンダ
ケデモ聞ケルダロウ？」

ダグバの対応はとても紳士的だ。栗林をこんな状態に追い詰めた
のが誰かは置いておくとして。伊丹は頷きたい心情もあるが頷けば
一人で対応することになる。伊丹は辺りを見回した。

治療の済んだエルフ達と部隊の仲間は遠くから見守っている。
まったく心強くない。伊丹はいい大人が涙目で目線で誰か来てくれ
と訴えるが、返答として目が逸らされた。

「……そうですね」

「何故泣キソウナノカナ？」

「イエナンデモ」

伊丹はまるでダグバの様な片言で答える。だがそんな伊丹に救い
の手が差し伸べられた。

「す、すみません大丈夫です。話を続けさせてください。」

若い女戦士の復活。

栗林が伊丹だけに任せてられないと責任感で復活する。伊丹がそ
れだけ栗林から頼りならないと思われるてる事が伊丹の救いとなる
とは何とも皮肉な事だろうか。

「無理ハシナイ方ガイ。ヤスメル所マデハコボウカ？」

「い、いえいえ！大丈夫です！ここにいます」

白野は考える。なんでダグバの姿の自分からそんなに離れたくな
いのか？ 聞きたいことが有るとしても質問は伊丹に任せたらいい。
体調が悪いのに自分から離れたがらない。そう言えば彼女（栗林）は
グロンギ語が出来た。一度は自分を想定して自衛隊全体でグロンギ
語を学んだと思ったが：

もしや：クウガの熱烈なファンの可能性は無いだろうか？ グロン
ギ語が出来るのもクウガが好きだから、体調が悪そうなのもファンだ
から感動して興奮し過ぎて…それで…納得してしまった。

白野としてクウガ好き仲間と思えば仲間意識も出てくる。そして

仲間と思うと親切をしたくなる。離れたくないならせめて座る場所だけでも用意する事にした。

座れそうな岩は有るが、サービスとしては…ダグバラしくモーフィングパワーで椅子を造つてみる事にして……もつと良さそうな事を思い付いた

思念による呼び出し。

幸い相手は近くにいた

「スコシキヲツケテ」

そう言いダグバが見たのは空。

伊丹達も釣られて空を見上げた

「な、何だあれ？」

空には鳥の様な影。影は猛烈な速度で伊丹達が居る場所に向かって来てきている。戦闘機並みの速さが有るよう見えた。そんなのが降下してくる。いや降下というより墜落、ゾツと青ざめたが、速度が落ちいく、速度が緩まると姿もハツキリと見え影の正体が伊丹達にもわかつた。

「あれって銀座の…」

白いワイバーン

「ウオ!」

ワイバーンが着陸と同時に地面を削り進み偶然なのか計算したのか、ピタリとダグバの前で止まる。突然の登場に呆然としていた伊丹達は正気に戻ると、咄嗟に銃を構えるが、当のワイバーンが伊丹達を無視している。通常のワイバーンの皮膚の鱗は警官の拳銃を弾いた。伊丹の持つた銃を警官のモノよりは威力はあるが、白いワイバーンはほぼ機械の竜の様な感じだ。自衛官の持つ銃の銃弾でも弾かれる未来が想像できる。いや効くかどうか以前に射つて敵対する訳にもいかない。

「頼ムヨ」

白いワイバーンが頷き。

ワイバーンは伊丹達の方を向く。

伊丹と栗林は何を頼んだ!?と後ずさる。

「な、なんですか!? 何をするのですか!」

サイズはゾウ並みにある白いワイバーンが一人を見る。どう見ても肉食動物、当然ながら見られる二人は生きた心地がない。

「ダイジヨウブ、キケンハナイ」

仮に野放しのライオンが目の前に居て危険がなく大丈夫と思えるだろうか? 白いワイバーンは伊丹や栗林にノツシノシと近づく。そのまま固まる栗林の後ろに回り寝そべった。

「サア彼女二座ルト良イ」

言葉を理解するのにタツプリ十秒かかった。

善意の発言…?

白野は思ったクウガ好きならゴオラムと同類に乗れるなんて嬉しい筈と……ワイバーンが怖いものだと言う認識が抜け落ちていた。

栗林は恐る恐る寝そべるワイバーンを見る。ワイバーンは食事をした後なのか: 口からは何かの血が滴っている。食事を中断してきてないかと疑問がでる……お腹が空いていない?

お腹が空いた肉食動物に座る。

自殺と同義でないだろうか。

座ろうとした瞬間に首が動いてバクリと…

「お、お気遣いされなくても大丈夫ですので! はい!!」

「顔色ガワルイヨ。エンリヨセズ二座ツタ方ガイイ」

善意の様な追い討ちだった。

本当に善意なんだろうか。

実はエサにしようとしてないだろうか。

助けを求めるように藁にもすがる気持ちで伊丹を見た。

「栗林三等陸費、御親切に甘えて座らせて貰いなさい」

藁どころか塵だった。

いや伊丹からして断る理由が見付からないので仕方ないだろうが、栗林の中の伊丹の評価表の数字の横にマイナス棒が付加されて…。

「ホントウニ顔色ガ悪イ。早ク座ツタ方ガイイ。イヤ、ドウセナラムコウノビヨワインマデハコボウカ」

ダグバはさらに善意の追い討ちを掛ける。このまま栗林

は連れ去られそうだと思う。むこうつてどこの病院だろうか。この世界の病院：下手すれば日本の病院に送られるのだろうか。医療レベルが不安な世界の病院は嫌だが：日本の病院だつた場合は騒ぎが…

栗林は退路を塞がれた。

ならまだマシと思える方を選ぶしかない。

「ス、スワラセテモライマス」

栗林を見るワイバーン。腰を落とし栗林はワイバーンに座つた

「…………」

座つた栗林の表情は微妙だ

ワイバーンの外郭の硬度が異常な金属の鎧から出来てるので、栗林のしかめた顔が座り心地を露骨に語つていた。

白い怪人はナゼか満足げだ。

食べられる心配は無いなどほつとした伊丹は、栗林を見ないように対話を続行することにした。

「其では話を続けさせて貰います。此方の世界が襲撃を受けたあの時の事件に偶然に遭遇したそうですが……何故貴方はあの襲撃者達と戦つたのでしょうか」

世間が最も気にする質問の一つだつた。

「あの時か」

思わず漏れたような声、伊丹は聞き覚えがある声だと思ったがダグバの目を見てゾッとした氣のせいだと思った。

「観光中二偶然二此方ノ世界ノ帝国軍ノ非道ヲ目撃シテネ。見逃スノハダメダト思ツテ介入シタンダヨ？タダノゼンイダヨ。観光ヲ邪魔サレタ腹イセモアルカナ」

「……腹いせもありましたが、アレは善意でしたと？」

「イケナカツタカナ？」

「……いえ……俺としてはアナタに感謝していますし、アナタに助けられた人も（ネットで）貴方に感謝しますよ」

狙いはどうあれ結果的には助けられた形には成つたので、複雑な思

いは有るが感謝しているのは本心ではあつた。

「ソウカイ？ ソレハ良カツタ。君達ノ国ノ人間カラハ危険ト思ワレ
テ、ボクヲ殺ソウトカ言ツテルト思ツタヨ」

伊丹が顔を引き繼らせた。

「は、ハハハハ……い、一部にはそんな事を言つてる人も居ますね」
「え、ええ！ そうですね！ 一部、一部には居ますよ！ 勿論私達はそんな
事は少しも思つてませんから！」

大多数の意見でも一部とも言えるかも知れない。二人は流れる汗
で脱水症状が起きそうだ。

「ソウナノカイ。攻撃サレナケレバナニモスルハナイケド攻撃サレレ
バ報復ハスルカラ氣ヲ付ケテネ」

太い釘を刺された。

「こ、攻撃の報復つて……その一一攻撃した本人だけですよね？」

「ウン、ソウダネ。関ワツタ相手ニ報復スルヨ？」

ヒエツと思わず悲鳴が漏れた。

関わつた相手……攻撃を決めるのに関わつた相手として、現地の自
衛隊、政府、もつと言えば民主主義的に政府の行動の責任は民間人、民
間人全てが報復の対象になる……もし命令が有れば攻撃をしないと
いけない。それが日本の大惨事の引き金になるかも知れない。伊丹
としては絶対に攻撃なんてしたくないが、自衛官だと命令次第でどう
なるかわからない。

伊丹はこれは絶対に伝えとかないとと思いながら次の質問に移る
ことにした。

「……で、では次の質問をさせてください……質問なのですが、貴方は
どういった御方なのでしょうか？」

伊丹の質問はひどく曖昧だ。

「……ミタママダヨ？」

返答もまた曖昧だつた。

「……見たままですと、貴方の姿は私たちの国で創られた仮面ライ
ダーという物語に出てくる、グロンギと言う種族のン・ダグバ・ゼハ
と言う存在にひどく酷似してるのでですが」

「ソウナノカイ?」

知らないと惚けて見せた。

「は、はい、そうなんです……ハツキリと聞かせて貰いますが、貴方はグロンギのダグバでこの世界の住人なんですね」

「チガウヨ、コノ世界ノ住人デハナイヨ」
この世界の出身でない。

そういうふうなると……

では門の先の世界の
「ソレモ違ウカナ」
地獄で産まれたのですか

肯定されたら地球にグロンギがいたと言うことになる。そんな最悪の答えも違うと返答された。伊丹は良かつたと思うがそうなると何処から来たのかという謎が出来た。

さか別の世界から?』

伊丹はグロンギの居る別の世界もあると考えた。その上でダグバがこの世界に来たのは銀座の門が関係あるんだろうかと考える。

「神様に……？」

「正確二ノ神様ホイナ二太二夕衣」

んだ。

【何が目的があつて送られたんですか】

「貴方自身に目的などは？」

物語を見る

「…………え——そ…………うですか…………別の世界からと言う事は貴

方と同族の種族の方はこの世界に居ません?】

「ボクハミタコトハナイネ元ノ世界フクメテネ」

「……元の世界でも」

元の世界でも同族を見てない。

相手はダグバなんだろうか。

「今更ですがお名前は」

「名前…名前ハ（この姿では）特ニナイカナ」

名前が無い。同族を見たことがない事も合わせると……別の世界で天涯孤独だつたか。それか記憶喪失なのか。デリケートな問題としか思えずストレートに聞けないと思つた。

「な…名前を誰かに呼ばれる事は無かつたんですか？」

「（この姿では）ナイカナ」

誰も呼んだことがない。別の世界で会話が出来なかつたと思えない。なのに名前を呼ばれた事がない。どんな生き方をしていたのだろうか。

そんな悩む伊丹の様子を見て白野は勘違いをした。

「……ヨビナニ困ルナラ伊丹サンガヨビナヲ決メテクレテモイイヨ
？」

「お、オレがデスカ！」

伊丹は若干自分のせいでの突然のムチャブリを受けた。伊丹は悩んだ。悩んで…此れしかないと決めた

「……に……似てると言つてたダグバでもよろしいでしょうか」

「……ウン、イイヨ」

伊丹の圧倒的に無難な選択。

白野はガツカリだよと思いながら受け入れた。

「あの、この世界に居られる理由は」

銀座での報復が続いてて此方には来たのかと考えて聞いた。交渉相

手が下手したら消滅してする可能性が…

「ドンナ世界ナノカキニナツタカラダヨ」

「…ですか」

他にも聞きたいことはまだあるが最低限の事は聞いたと伊丹は思う……で、どうしよう。このまま別れても良いのだろうか？

「す、スマセン、もう一つだけ良いですか？」

栗林が声をあげた。

「ウン？ ナニカナ」

「……彼女はどういった方でしょ？」

栗林の言う彼女は、ダグバと伊丹を興味深気に見ている黒いゴスロリ少女の事である。グロンギだという疑惑を持っていたのにダグバ本人が同族は居ないといった。なら彼女は？

ダグバはどう答えるか少し悩んでから答えた。

「一番近イノハ……ウン……ストーカーカナ？」

日本語を知らないはずのゴスロリ少女は文句ありげにダグバを見る。

「ストーカー！」

ダグバをストーキングする少女。

余計に少女の事がわからなくなつた。

特殊な好みのストーカー少女なんだろうか？

「…（声？）」

二人は困惑し顔を見合させる。そんな二人とは別方向に何の脈絡もなくダグバは顔を向けた。ダグバは突然歩きだした。伊丹と栗林は顔を見合させてから慌ててついていく。何をしに行くのか気になつた：そして何より、ワイバーンと残されるのは怖かつた。何だか残されたワイバーンがションボリしているようだ：

伊丹達が追い付くとダグバは井戸を覗き見ている。悲鳴が聞こえた。井戸の中からだ。伊丹はダグバへの恐怖を意識から外し走りダグバの横から井戸を覗きこんだ。

「誰か居るのか！」

伊丹がライトを井戸の下に向ける。井戸の中にはエルフの少女がいた。

「女の子が井戸に落ちてる！」
「直ぐにロープを持つてきます！」

伊丹が叫びと栗林、そして自衛官たちは救出に動いた。ダグバは伊丹を見つめた後、ダグバは井戸の中に入る。井戸の中に階段を造りながら降りた。

「え！あの！…」

トドメを刺しに…なんて誤解は仕掛けたがエルフの治療をしてて其はないだろうと、助けに向かつたと思い止めれない。

井戸の中の悲鳴が消えた。

一応いうが井戸の中のエルフ少女の肉体的にはなにも起きてない。肉体的には

ダグバは井戸の底で何かを掴むと井戸を登つた。ダグバが出てくると片手に金髪のエルフ少女を抱えている。濡れた金髪の少女はガタガタと震えていた。震えるのは水に濡れた寒さだろう…きっと。「彼女ノ身体ヲ拭クモノハナイカナ」

タオルをもつた黒川二等陸曹がやつてきて恐々とダグバから少女を受け取つた。エルフ達が無事で良かつたと声をかけた。特に助けられた少女と同じぐらいのエルフの少女が喜んでいた。

そしてエルフたちはダグバに感謝した。

土下座で。

「…」

ダグバは何か言いたげだがその気持ちを誰も察しない。いやダグバの心情を察した様にゴスロリ少女はクスクスと笑っていた。

エルフの少女救出後、伊丹はこれからどうするか悩む。ダグバの事もあるが…住む場所を失くしたエルフ達のことでもだ。

エルフの代表格らしき人物が伊丹に接触していた。現地の言葉は伊丹にも一応伝わる。英語を習い始めたばかり中学生程度の英語力で英語で外人と話すようなモノだが、それでも対話は成立した。エルフの代表は伊丹たちに礼を言う。此れからどうするのか伊丹が聞くと村から離れるといった。

村がダメになつた事もあるが、逃げたドラゴンがまた来る可能性があると判断したそうだ。

「で、隊長はそんなエルフたちを近くの村まで護衛するのを引き受けたと…重要な事があるのに」

「ま、まあ近くの村にはどうせ行くことになるしついでだし良いだろ」自衛隊、エルフの残りゴスロリ少女、ダグバ+白いワイバーンを引

き連れエルフの村の近くにある村、コダ村に出発。自衛隊、エルフ全員の心情は一致していた

「（なんでついてくんの!?）」

ダグバが当然の如く付いてきた事に自衛官の内心は一致していた。離れるのも問題なのだが着いてこられるのもどうすれば良いのか。本隊に連絡はしたが、兎に角敵対しない事を優先に臨機応変に対応する様に丸投げされた。

伊丹は先ずは厄介後とを一つでも減らすことにする。厄介ごと、もといエルフを連れてご近所のコダ村について……新たな難民（厄介ごと）と合流する事になる。減るどころか増えた。

ドラゴンが近場に出たことを恐れて村を破棄する判断をする。身内が他の村に居る村人は其方に向かうそうだが、往く宛もない人達も多い。エルフ達も含めて百人は居る。

「ドゥスルノカナ？」

何故かついてきてるダグバが伊丹にどうするか聞く。ナゼか隣にいるゴスロリ少女共々面白そうに伊丹を見てる気がした。

「……はああ

伊丹は難民を自衛隊の駐屯地にまで連れていく事にする。別にダグバに聞かれたからという理由では一切ない。もしダグバに聞かれても伊丹は同じ行動をするだろう。白い怪人と黒いゴスロリは天を仰ぐ伊丹を面白そうに見ていた。

自衛隊の本拠地に向かう伊丹一行。

人員はコダ村の難民が増えた。

あとダグバも…

「どうしてついてくるんです!?」

「友人が居るから手伝つてくださるとさ…」

「手伝つて…エルフを送るのですか?」

「それより友人つて誰なんですかね…エルフの誰か?」

「ゴスロリの娘じやないか?」

「あの娘はストーカーって言われてましたよ」

エルフや村人は遠巻きにしてて友人らしい素振りの相手が居ない。
伊丹達はダグバのいう友人が誰なのかわからなかつた。

そのまま駐屯地に戻つた伊丹の第3偵察隊は……

多数の難民も引き連れ戻つてきた。

道中で襲つてきた炎龍を返り討ちにして返り血で血塗れなダグバ

と一緒に

報告

冷や汗をタラリと垂らした銀座の英雄と呼ばれる自衛官。伊丹は不真面目さの欠片も表に出さずに立不動で立っていた。伊丹の目の前には笑顔の壯年の男性が居た。

「顔は笑顔だ。顔だけが笑顔だ…」

「さて……伊丹二尉、何か遺言は有るかね……」

言つた相手次第で生存に直結する台詞。言つた相手が伊丹からして関わる事はない派遣部隊のトップ、狭間陸将ならどうだろうか。

「……遺言は冗談だ洒落だよ」

狭間の顔は笑顔だが目がマジだ。養豚場の豚相手に向ける視線だ。洒落や冗談という言葉の信用性が水の味になるまで薄められたカルビス並み。救援フォローを頼みたいが周りに人は居るが視線は狭間に似たり寄つたり。伊丹の味方はいない。

明日には出荷される豚、いや伊丹は笑つた。

「は、ハハハ、お、面白い冗談ですね」

全力で媚びる愛想笑い。世渡りが上手いとは言えない伊丹が人生で一番会心の出来だとできる愛想笑い。それはもう尊い（自分の）命が掛かつてるので必死だ。

上司の顔が（ヤバイ）笑顔からピクリとも動かない事に泣きたくなる。あと近くに居る同僚達の顔をもう一度見ても似たり寄つたりで更にキツイ。

「ああ…ははは…そうか面白いか。ああ改めてーーー何か言いたい事は有るかね」

『改めて』と『何か』の間に”最期に”と聞こえたのは伊丹の幻聴だろうか？幻聴だろう。幻聴と思つた方が健康的に良い。伊丹は自分が何をしたのか考えてから爽やかな声でいつた。

「えー小官は自衛隊の末席を汚すものとして最善の行動をしたつもりであります！」

「ほう」

漫画みたいな青筋ができていた。

リアル上官の額に：

同僚たちは呆れた視線やら上官と同じく血管が。

「そうか。……そうか。それが最期に言いたいことか」

伊丹は今度はやけにハツキリ最期つて幻聴が聞こえたなと思う。

伊丹のやらかしたことは大きく分けて二つ。

一つは無断での難民保護、難民を連れてくるのを連絡で伝えてない。しかも一人二人ならまだしも相当な人数がいた。途中で炎龍を恐れて逃げた近くの村から合流して人が増えた。

敵地の様な所で多数の非戦闘員を抱えるリスク。衣食住を用意しないといけない。難民は信用できるのか。懐に入れた後に敵になるなんて悪夢もありうる。あと：日本側に漏れたら大変面倒になるとなると断言できる。

情報と現地との交流を考えれば自衛隊にメリットが無いわけでもない。現地の情報が欲しくて伊丹たちは偵察に出されたので成果と言つても良い。……数が数人ぐらいなら。

二つ目の問題

ぶつちやけ1つ目は大した問題だと思われていらない。問題としては本来は大きかったのだが、伊丹の持ち帰った二つ目の問題があると霞む。例えると致命傷なら打ち身ぐらい気にならないか、小さなボヤがナパームで消し飛ばされたみたいな感じの感覚か。

伊丹は避難民と共に連れてきたのが：一月前に銀座に現れて、軽く数万人を消滅させた：

白い怪人。

元々白い怪人との接触は可能ならするようにとの命令が出ていた。しかし大方の予想で白い怪人の居場所が特地でなく地球と思われており、接触の可能性は念の為というレベルだ。居ると言う想定はあつたが、誰が早々に接触して対話が成功して連れてくるとか思うだろう。

存在が核兵器。力の全貌は不明なのにヤル氣なら一部では日本が

終わる国家存亡の危険な存在と言う声もある。少なくともこの地の自衛隊ぐらいなら軍事的な意味でなく眞の意味で全滅に出来る。そういう予想している自衛官の数は少くない。銀座を攻撃した国家よりも脅威は上と認識されていた。

そんな目下自衛隊が最大の脅威として警戒してる相手を連れてきたのが伊丹。起爆装置がどうなつてると不明な核弾頭を持ち帰つてきたと言い替えてもいい。

流石に戻つてくる前にダグバについては連絡は来た。ダグバから攻撃をされたら関係者に報復の攻撃をすると言われたのも含めて、因みに難民についてはダグバの事が手一杯で伝え忘れたと宣つた。

ダグバが来る前に丘にいる全自衛隊員に攻撃禁止の通達が出された。もちろん混乱がおきた。ダグバと接触したという情報が来た時にはパニックが起きた。先制攻撃をすべきなんて意見も出た。

で、伊丹は連れ帰つてきた。刺激すればどうなるかわからない。刺激しなくともどうなるかわからない。どう対処すれば良いのかわかるわけがない白い怪人を。

しかし言い換えるとそんな危険物と平和的な接触をして連れ帰つてきた、自衛隊としては理想的な展開とも言える。成し遂げた伊丹を賞賛してもいいかもしれないが…それでも…感情的には伊丹をちよつと殴りたいと多くが思つたのは、まあしかたないことか。殴るのは駄目だと理性は思う。しかし腹は立つ。なので精神的にイビつた。

どうするかと頭を悩ませた。

仮に本人がなにもしてこないとしても白い怪人が居ること自体大きな問題だ。

白い怪人と接触したと知れば国内は勿論、他国の動きがどうなるか。只でさえ銀座にある門の存在で他の干渉が頻発しているのに、知られれば干渉が更に情熱的に加熱する事は確実。白い怪人を刺激したらどうなるか。大きな利益もあるかも知れないが危険度も同等、政府、自衛隊の本音としては触らぬ神に祟りなしと言う感じで関わり

たくはなかつた。

この駐屯地に、政治的にも物理的にもアウトな危険物を連れてこられた駐屯地責任者としては、改めて伊丹を見る。先生のお説教が早く終わらないかなと思つての小学生の顔だ。面倒を持つてきた伊丹をまっさ……更に精神的にイビリたくなるのも当然だろう。

問題を持つてきた伊丹は自分は下っぱなので、（丸投げして）上の人の奮闘に期待している。そんな伊丹の上司は白い怪人の世話係を伊丹に（押し付け）任せようかと考えた。素敵な信頼関係だ。

部屋を出るよう言う上官に伊丹は去りたいとは思つてたが、伝えておかなければいけない事があつた

「あのダグバから聞いた事なんですが…」

伊丹は上官のお怒りが少しは静まつたとみるや爆弾を投下することにした。全員が伊丹に注目していた。お前白い怪人相手にちゃんと聞いてたのかよという視線が多数。その視線の意味は白い怪人相手に聞けると思つてなかつたのか、誰かの信用度の無さなのか。

「聞いたとは…それは、何処から來たという事もか」

「ええはい」

「何処から來たと言つていた」

白い怪人について色々と気になる事はあるが目下一番の問題はそれだ。特地なら問題ないが、もし日本ならどうなるか。ダグバ延いてはグロンギが地球ち居ると言う事になる。門と同レベルかそれ以上に日本が大変な事になる。固唾をのんで伊丹の返答を待つた。

「別の世界から神様に送られてきたと言つてました」

「は？」

「神様から送られたそうです。地球でも特地でも無い所から」

「……なるほど」

狭間が精神的な病気なのか真剣に検討するのも可笑しい事でもない。精神的な病気になる切つ掛けは多数ある。しかし魔法やら世界を移動できる手段があつて、ダグバを送つた神の様な何かが存在しても可笑しくないと思い直す。頭が可笑しくなりそうだと思う。

「別世界から来たか…別の世界か……」

常識人だと脳が受付を拒否してしまう。それでも現実逃避も出来ない立場、一旦は置いておくことにした。

「何の為に送られたのだ？何かしらの目的が有るのではないか」

何の理由もなしに別の世界に送られるとは思えない。思い付くのは：銀座を襲った国がその神様とやらを怒らせダグバが送られた？後は白い怪人の存在が危険だから神から追放されたという可能性か。「特に何も無いそうです。あと本人としての目的は物見遊山の見物が目的だと…」

神様に送られて特に何の目的もない…そんなの有るのだろうか当然疑問には思う。本人の目的も本当なのかどうか…もし何の指示もなく送られたとすると、別の世界に送ること自体が目的か。神様の目的は追放か？

別の人間が質問した。

「…………別の世界から送られたそうだが、初めは何処に送られたと言つていたんだ。地球か此方かどちらだと」

事件の前に門の近くになのか。銀座事件の時に直接に銀座か。質問者はそう言う想定をしていた。他者の想定にもそれほど違いはない。

「聞いてませんが、恐らく地球かと、結構前から居たような事を言つてました」

「事件の前から地球に居たと!!」

狭間だけでなく周りの隊員たちも声を出して驚くしかない。一部悲鳴も聞こえた。

「日本語での会話が可能でしたので嘘は無いかと思います」

「……そ、そうか。他に聞いたことは」

狭間は別の事を聞くことにした。

内心で報告したらどんな事になるか頭を抱えながら

「他は…グロンギはこの世界でも元の世界でも見たことが無いと言つてました」

「……見たことが無いか…」

これは有難い情報か？本当かどうか。本當でも本人が知らないだけでこの世界にもいる可能性が無いとも言えない。因みに長崎の某所の調査などは現在進行形でされている。

伊丹は会話の内容を隠さずに洗いざらい全て上に投げつけた。後は任せた！という気持ちで清々しい気持ちで、それから伊丹は解放され：白い怪人の世話役を申し渡される。処刑を言い渡した様な顔で言われた。伊丹の思いを理解した上でお前を逃がすか！という意思。伊丹はごねる。上官の権威で押し付けようとする。どういうわけか一進一退の攻防になる。

そんな可笑しな攻防が繰り広げられる避難民+怪人のやつて来たアルヌスの丘、自衛隊員が騒然としてる自衛隊駐屯地。

自衛隊からも避難民からも遠巻きにされてるダグバこと白野。自衛隊からはあまり良い視線が向けられていない。避難民からは：自衛官と同じ感じと思えば正反対の感情……災害の赤龍を正面からボコボコにして、再生染みた治療を無償でやっていた。神様の部類と思われても仕方ない

そんな正と負どちらの視線も向けられて遠巻きにされてるダグバの近くには、伊丹の部下は他にやることがあるので、じやんけんに負けた栗林一人だけ残させていた。災難である。

「（……胃に穴が空きそう）」

此處にいて良いのかな。

門のある丘、自衛隊の人とか多いね。

上の人との話し合いに行くと思つたのに伊丹さんだけ行つて放置されてる。

自衛隊員の人の顔色が：青ざめた感じだよ。今考えたら伊丹さんとか栗林さんも青ざめてた？ファンみたいな感じだし違うかな？栗林さんはまた傍に居るしね。

まあ自衛官の人の反応はわかる。わからないのは、エルフの人とかは何かな。：拌んでる感じ。コダ村の人もだけど、道中でまた襲つて

きたドラゴンと戦闘した後から対応が変になつてない。怖がられるよりはまし何だけど、中間的な反応はないのかな。マシなのロウリイちゃんぐらい。あとこつちを観察する様に見てくる青い髪の娘もかな。

今後どうなるのかな。

物語がだよ？

自衛隊次第かな。自衛隊の人は何時まで此処に居るのかな。謝罪と賠償を求めるのと逮捕つてニュースでは言つてたけどそれだけで済むのかな。資源の少ない日本が此所で資源を獲られる何て話もあつたしね。物語はどんな方向に向くのかな。

此方じやなくて外国が日本で何かするとかあるかな。外国と言えば外国でのボクへの反応はどうか確認してなかつた。日本よりマシンのかな。日本より危険物扱い？ どんな反応してくるか気になるし時期を見て戻つたらネットの確認しどこう。

時間帯はもうすぐお昼。

ご飯が必要。

…………やつてみようかな。

ここに来る前にまた襲つてきいたドラゴンからもぎ取つた尻尾がある。ファンタジーの定番でドラゴンの肉は高級食材つて事で持つてきた……待つってるだけだと暇だし時間も昼だし試して見ようかな。独り暮らしだし料理ぐらいはできる。料理できるけど……ドラゴンの料理方法なんて知らない。調理方法つてどんなのが云いかな……煮込みが良いかタレ焼きが良いか。シンプルに塩コショウ。調理方法があるかもしれないしエルフの人に聞いてみよう。

エルフの人聞くと知らないと言われた。

別に土下座なんてしなくとも…。

特に頼んでも無いロウリイちゃんがなぜか笑つて料理する事に協力してくれる事になつた。炎龍に何か含むところがある？ あとボクが言うのもなんだけど料理出来るのかな？

それからなんやかんやり、ジックリコトコト、カレーを作ることになつた。

火事みたいな強い火の上にはモーフィングパワーで造った特大の寸胴鍋。鍋の中身はドラゴン肉入りのカレー。最悪ドラゴンの肉が美味しくてもカレーなら大丈夫と判断したんだよ。それに大量に作れて毒味：他の人にも食べてもらえるからね。カレーなのは自衛隊だからカレーつて連想から、自衛隊のカレー食べてみたいよ。

ルーや野菜、そしてお米は栗林さん経由で自衛隊の人がわけてくれた。

ローリイちゃん意外と料理の手際はよかつた。長く生きると料理ぐらい出来るようになるとと言われた。：見掛けより年が有るのかな。聞いたらすごい年上だつた。四桁近くつて、ロウリイさんだね。リアルロリBBAと誰かが呟いたの聞こえた。命知らずかな？

カレーの作製、自衛隊、現地の人、どちらも遠巻きにして見てる。食べたいってことなのかな？

一番近くに居るのはまず栗林さん。

料理の手伝いをしてもらつてたんだけど…

「……女子力で負けてる…？」

ナゼかショックを受けていた。

女子力つて何かあつた？

「こんなにスペース入れるの、とんでもなく豪勢な食事ね」

スペースを興味深く見てる。スペースって昔は金より高い時代もあつたんだつけ、此方だとそう言う時代なのかな。

ロウリイさん好奇心旺盛な子供：じやなくて年齢的に頑張つてるおばあちゃんかな。そう言えば年齢が若く見えるの人間と同じに見えるけど人間とは違う種族なのかな？それか亜神だからかな。

料理中に本人に聞いたところ年齢が若く見えるの亜神だかららしい。亜神は神さまの使徒、それと神になる前段階で、将来的に神様になるそう。仮面ライダー的には自称神様が敵のパターンが多い：ローリイさんの仕てる神様とかが敵じやないよね？

因みにボクも亜神と神様どちらとも似た気配がしてるとか、この体は神様関係だし亜神つて事でも間違いないかな。

口ウリイさんから少し離れた位置の蒼いロリツ娘。魔法使いぽい。興味津々な様子。

もう一人は井戸の中にいた金髪のエルフの娘：お手伝いをしようつて感じだよ。

女の子ばかりで特徴的な娘ばかり。

ヒロインぽいと思うの変かな：

誰のヒロインかと言えば最有力なのは伊丹さん。栗林さんは部下、ゴスロリ、エルフ、魔法少女と伊丹さんが偵察する所にいた。銀座事件やらボクの事も含めたりすると、考えれば考えるほど主人公が伊丹さんとしか思えないかな。

物語があるなら伊丹さん中心に進みそそうって思える。伊丹さんこれからどうなるか見てみたい。物語もだけど友人としても気になるし。自衛隊と接触もしたんだし伊丹さんの周りになるべく居ようかな。

ただ傍に居るだけなら迷惑だからたまの手助けもしないと、手助けと言つても戦闘ぐらいしか出来ないけどね。

「カレー美味しいですね」

この食感は歯応えの矢鱈ある鶏肉かな。

うん、この肉が、これがそうなのか……

ドラゴンの肉。

ドラゴンの肉

ファンタジー世界でドラゴンの肉のカレーを食つてるつてスゴいよな!! 料理人はダグバさんだ!! ……スゲーーナ!! 意味わかんねえな!!

「……いやなんでだよ……」

「カレー美味しいですね」

確かにカレー旨いな。スペースのバランスが良い。店に出せるレベルだな!! 味覚がちゃんと働いてるかわからんねえ! 何か上司との楽しい()話し合いから戻つてきてたら、ダグバさんがカレー作つてたんだよ。

(レイ〇目の) 栗林がカレーよそつてた

部下の皆にカレー渡してた(巻き添え)。

引き返そうとしたオレにも(逃がさないとばかりに掴まれ) カレーが渡された(超大盛)。

カレー旨いんだよ()。

食べてる時にドラゴンの肉だつて教えられたんだよ。それはもう…吹き出しそうになつた。未知の肉つて毒とかない? 検査とかしないよな。あとでどうにか成らないか怖い。あと人を食つたり普通にしてそうなドラゴンの肉だし……食べなきや良い? ……ダグバに見られてる状態で食わないなんて選択できるか? おい? ああ??

誰だよ。ダグバにカレー作りなんて教えたの。誰も教えてない? ……嘘だ!! ならなんでカレー作れてんだよ。まさか:日本で観光してるときに学んだ? ダグバが? 料理教室? 本で? 誰かに聞いて? テレビ? ネット? ……ダグバがどれで?

「カレー美味しいですね」

さつきから栗林が同じことしか言つてねえよ。

まあカレー美味しいしいいや（思考停止）

それにして……周りの自衛官の空気がアレだわ。そんな死にそ
うな顔をするなよ。未知の肉のカレーを食べてたつてのも関係ある
けど……俺の伝えた事も原因あるなあ

駐屯地に戻る前：ダグバさんを連れて戻る事とダグバさんが攻撃
されたら、関係含めて報復するつて発言してた事だけは伝えた。隊員
の誰かが攻撃して反撃で大惨事なんて事に成つたらイヤだし其処だけ
はしつかりと伝えた。

で、戻る頃には部隊全隊にどんな事があつてもダグバに攻撃するな
と厳命を出されてた。ちゃんと攻撃した場合の危険性についても伝
えられたんだよ。

反撃関係なくその気になつたら駐屯地が即座に地獄になる怪人、そ
んな怪人が居るのに攻撃は禁止とされる。これはなんだろ。エ○リ
アンかプレデ○ーみたいなモンスター・パニック映画で、モンスターが
隣に居るのに攻撃不許可みたいな感じか？誰かしら限界がきて血
迷つて爆発したりしそうで……。

報復の事については本気だと思われてる。なら他の聞いた話しに
対しては、本当の話しと思うか嘘と判断するか。俺個人としては嘘つ
てことは無い気がする。気がするだけな。

別の世界から来たつてのが本当かどうか。

出来れば別世界から来たつて話は本当であつてほしい。この世界
にも地球にも、グロンギが居ないつてことになるからな。本当ならグ
ロンギは居ないつていう朗報になる

いや朗報でないような。

グロンギは戦闘が殺戮をゲームとしてやる集団、他の仮面ライダー
の世界征服やら人類抹殺やら人体改造する組織ばかりの悪の組織と
比べたら遙かに安全だな！な訳ない。

グロンギにはルールの制限があつて犠牲者は決まつた数になる：
だからルール無用な他の悪の組織の方が被害の規模は大きい筈。た

だそれで他の組織より安心かと言えば…無いな。個人的な感想としては恐怖感は随一。個体毎にやり口の違う殺人ゲーム、人の命がゲームのポイント扱い。生々しい恐ろしさがあつた。

だから殺人ゲームをする他のグロンギが居なくてよかつた……と言えるかはちょっととな

作品だと大体のグロンギは律儀にゲームのルールを守つてた。ゲームのルールでゲーム外での殺人は避けてた。ダグバですら最初の虐殺以外はゲームの終わる最後まで何もしなかつたんだよな？少なくとも派手にはなにもしてない。作品のラストでダグバが大暴れしたけど：ルールが無かつたら犠牲は桁違いに増えてたよな。

グロンギが居ないって事はゲームもない！つまり：大人しくする理由のないダグバは何時でも気紛れに好き勝手出来るつてことだ…。気分次第で大惨事ありうる怪人。グロンギが沢山居るより好き勝手できるダグバ単体の方が…怖いかは強さ次第かな。

ダグバの強さがどうなのか不明。そもそも原作のダグバも強さは不明か。

ラスボスなのにダグバに戦闘シーンが無い。クウガとの決戦では能力は相殺されて戦闘なんて殴り合いぐらい。殴り合いの末にクウガに殺される。ラスボスとの戦闘シーンが無いってとんでもない演出だよな。：戦闘シーンは無いのに強さはこれでもかと感じさせるとか本当に上手いよな。

強さが不明だからこそ強さは予想になる。

設定の強さは平成のラスボスと比べればぶつとんではない。ぶつ飛んでない。最強ランキングには名前が出てて殴り合いのスペックだけなら最強みたいな説ある。公式な設定が忘れたけど、クウガ世界の話だろうけど、現代と其ほど変わると見えない日本を数週間で壊滅させられるとか…。

此処に居るダグバの強さは不明だけど、クウガのダグバより劣つてるなんて楽観できないよなあ。だから強さの想定は日本を壊滅させる事が出来るつてレベルになる……。

銀座を除けば、今のところクウガのグロンギみたいな危険な性質は

見てない。襲ってきたドラゴン以外に攻撃をしてない。エルフの治療やテュカの救助もしていた。会話もできた。

だからダグバは安全…なんて考えられないよなあ。銀座の事を考えたら…殺戮に対して躊躇いがないし。切つ掛けがあれば日本人相手にも殺戮をする可能性は十分にある。

強さがそれだと安心するには本人が信用できるかどうかの話になる。

俺はダグバから敵意を一度も向けられてない。不思議に思うぐらい友好的な対応をずっとされてる気がする。会話をなんどかした。会話をすると…正直まるでずっと前から何度も話した事があるような親しみすらも感じた。それでも俺はダグバは怖いし恐ろしい。

ただクウガのダグバの力と姿があるからって理由じやない。

エルフの村で出会つて質問した時に銀座事件の事を聞いた時の話。銀座事件の事を聞いたあの時のダグバの目は…………楽しい思い出を思い出したみたいな目をしてたからだ。

ダグバの人じやない感情の判らない目だけはわかつた。戻つてくる時に二回目に遭遇した…飛んでるゴジ○みたいなドラゴンに見下ろされた時よりも寒気がした。あの目を見て、クウガのダグバと本気で同じか似た存在なんだと思わされた。信用できる訳がない。

…つて訳で俺はダグバさんをむっちゃ警戒して危険だと思つてゐるんですよ。難民を連れ帰つてからはや数日、なしてダグバはんは俺の傍に居ることが多いので…なんかそのせいで変な誤解受けてるし！俺はダグバさんと仲良しとか!!あり得ない誤解!!ねえよ!!危険視しとるよ!!だから上は俺にダグバさん任せのやめて…やめて…何で親しいみたいな勘違いされるんだ……。

ダグバさんの他にも近くに良くいる三人。ゴスロリローリイ、エルフのテュカ、魔法使いの女の子レレイ、三人とも美少女……エルフ属性、ゴスロリ属性、口リ属性、お前変なフェロモンとか出してないかとか言われるわ。んなフェロモンあるわけねえ。てか三人とも俺が目的で近くに居るんじやねーよ。

テュカはダグバさんの付き人みたいな感じだろ。魔法使いの娘、レイは知的好奇心：ローリイもレイに似た感じ。女の子三人ともダグバ狙い。俺の近くにダグバが居るから結果的に居るだけだ!!ダグバさんの狙いは俺だから三角関係：倉田くん恐ろしいことを言うなよ。

ダグバさんが近くにいる

女の子三人がいる

色んな意味で他の視線が厳しいんだあ…

ただの小市民なんでキツイっす。

もうやだおうち帰りたい。帰して

それか書類のお仕事ください。

書類系の仕事してる内は四人とも離れててくれるんだ。俺が仕事に逃げるつてよっぽどだぞ。

真面目なフリして机で書類と向き合つてたらレイがきた。
「イタミ少し良い」

なになに避難民がお金を稼ぎたい。まあ殆んど何も持たずに逃げてきた避難民だし。自衛隊の支援も何時までかわからんし。お金は早急に必要か。それは良いけど、お金ってどう稼ぐんだ?自衛隊で仕事とか用意できなきぞ…………身体を売つて稼ぐとかマジで勘弁してくれよ。絶対に騒がれるから。

「これを売りに行く」

ワイバーンの鱗に…赤い鱗?なんかその鱗は何処かで見たことがあるような。あのドラゴンのか!何処から持つてきたんだ。鱗は貰つた?誰に?該当者一人しか居ねえ。

「ダグバさまに赤龍の鱗を貰つた。ワイバーンの鱗と一緒に売りに町まで行くつもり」

やつぱりダグバさまか。

頼んで貰うとかすごいわ()

頼んだのレイだよな。レレイ、自衛隊の人間にも知識目的なのか話してるけど、ダグバにも話し掛けてるよな。度胸があるのか怖いモノ知らずなのか。まさかダグバが危険じやないと思つてるとか無い

よな。いや危険じやないと思つてて変じやないのか？

この世界の人間のレレイからすれば…悪く言つてもダグバは見掛けが厳ついだけか、銀座事件とかクウガとか知らなきや……つてレレイ赤龍をボコボコにしたの見てたよな。倒したの見た人が信仰するような怪物だよな？やつぱレレイ度胸あるわ。

レレイは師匠の知り合いの商売人を宛にして、此処から離れたイタリカつて町に売りに行くつもりね。特に止める理由はないな。待て、此処から離れた町…治安的に警護が必要…

「よし！レレイ町は遠いだろ！俺が町まで届けてあげよう！」

「……良いの？仕事が忙しいみたいだけど」

「なに！遠慮しなくて良いぞ！町を確認するのと、物を売るなら物価を知るつて仕事に入るからイケル！イケル！…あとこれ仕事をしてるフリだし」ボソツ

「……」

最後の咳きに呆れた顔をされた。

さあ！今はダグバさん出掛けてる！部下に伝えて上に報告して早々に出発だ！車に乗車してるのは少女なのに代表に選ばれてるレレイ。何でだろ。レレイが優秀だからか？情に訴えられる可愛い女の子だからか？それか押し付けられたか。レレイは自衛隊によく話しかけるから自衛隊に一番関わりが有るからか。

部隊だから当然俺の部下も着いてくる。あと……テュカ…ロー
リイ……ダグバさん……

うん：知つてた。

伊丹さん助手席でグツタリしててるね。
疲れてるのかな。

やつぱり部隊の隊長つて大変なんだろうな。
気持ちはわかる。下みたいな相手が傍にいると疲れるよね。部類は違うけどボクにもいる。いつの間にか気付くと難民の一部から扱

いがおかしい。避けられてた時の方がまだマシかな。さま付けなんかイヤだよ。

ローリィさんが言うにはドラゴン、赤龍を二回もボコボコにしたかららしいよ。赤龍は災害みたいなモノで、本来なら赤龍に狙われた時点で全滅は確定していた。それを二回も救つてくれたボクは神様みたいなモノだと……。襲われたから反撃しただけなんだけどね。

面倒くさい。面倒だけど特にどうこうしてくる事も無いから実害は無いから放置してる。過剰に反応されたり、世話役なのかテュカさんとか若い娘・見掛けは若い娘を傍に派遣されたりするの実害かな。

敬う感じの避難民の居る丘に居づらい。これで自衛隊の人が何かしてくるなら丘に居られなかつたかな。自衛隊のひとたちは意外と何もしてこない。

たまに伊丹さんが質問してくるぐらい。その質問も最初にした質問の補足ぐらい。軍人の偉い人が関わってくるとかまるでない。呼び出しだもされると思つてたのに、ずっと放置、別にいいんだけど：いいのかな？

アルヌスの丘に来てからは、伊丹さんの傍で何か起きないか待つてたり、丘から離れて近くを回つたりして過ごしてたりしてた。自衛隊の居る丘でも何も起きない平穏な一時つて奴だね。

ワイバーンで遠くの町に行つてきたりした帰り、丘に戻つてきたらテュカさんが早速に来た。ボクが思うのもなんだけどダグバに自分から近付くつて何だかね。警戒されるのもイヤだけど安全つて思われるのもつて複雑な心境、テュカさんから伊丹さん達が町に行くと聞いた。

良し行こうと思つた。町に行きたいからね。色々な所の町には行つたけどボクだけだと警戒されて町に入れない事も多いし。町に入れてもこの姿だと警戒されて警戒されて……だから便乗しよう。

テュカさんに教えてくれたことにお礼を言って別れようとした。テュカさんも着いてきた……。テュカさんも町に行くのか聞いた。できれば来ないでほしい。

「はい、ダグバさま行かせて貰います。あと呼び捨てで良いですよ」

そう言われても……前世足しても年上だからね。年齢三桁……前世の祖父母の倍、ロウリイさんもだけど、この世界で話をできる知り合いで年齢的に見た目通りなのレレイちゃんぐらい。中学生ぐらい。下は未成年、上は見掛けが若いだけで年増つて次元じゃない……年齢をしつつも普通に接してる伊丹さんたちが変だよね？

伊丹さんは普通に見えて普通じゃない。普通だから普通じゃないとも言うのかな。物語の主人公ってそう言うタイプ多いよね。現状伊丹さんへの主人公疑惑は半々、三人とも其々特徴的でヒロインとして物語に出てそう。伊丹さんのヒロインとして出てそうと思ってる。ただレレイちゃんが物語のヒロインとしたら、蒼髪に無口キヤラで15歳で名前はレレイ。……何かと言わないけどギリギリ過ぎない？あと伊丹さん下手をしたら娘ぐらいの娘がヒロイン……

まあ兎に角伊丹さん達と町に行く。

何か起きそう。伊丹さんが向かうから……伊丹さんの事を抜きにも起きそう。向かう先は帝国に所属する町。

銀座を襲つたのが帝国。

たまに話が出来る人に聞くとこの地域は覇権国家帝国の領土。丘を含めたこら辺は帝国の繩張りみたいで銀座を襲つたのは帝国としか思えない。

帝国といえば銀河英雄伝説。金髪でなくて門閥貴族の帝国みたいで評判はすこぶる悪い。自国民の扱いもそんなに良くない。その下の帝国に支配された相手は良くて隸属、奴隸、悪くて文字通り殲滅したりしてるそう。

銀河英雄伝説の帝国と言えば焦土作戦とかあつたけど……自衛隊対策にやりだしたりしないかな。

そんな帝国側の町にまでついた。

自衛隊を見たら襲つて来ないか心配しながらついた町は……なんだろう。

襲われた後じやないかな？

煙も見えるし銀座で喫いだ人の血の臭いがするし。襲われるか心配してたのに襲われてた。

これはまた意表をつかれた。

伊丹さんが居るとやつぱり何か起きるね。

主人公疑惑が益々高まる。

襲つたの盗賊？町は高い堀に囲まれてるし。襲うにしてはリスクが高いと思う。リスクを無視するだけの何かが町にある？それか帝国が本当に焦土作戦を実行してるのかな。

帝国の評判的に村ぐらいなら見捨てそうだけど、これぐらい大きな町なら救援の部隊が来るんじゃないかな。此処が何処か考えると帝国の兵隊が。

「戦いの香りがするわあ」

襲われた町を見ながら口ウリイさんが嬉しそう。……まあ何が起きてるか少し楽しみにしたボクも不謹慎とか思えないか。

どうみても危険地帯になつてそうな町、面倒ごとはごめんだと帰ろうつて提案が出た。

反論はレレイちゃん

「今後の活動に支障が出る可能性がある」

町から距離はあるけどもう見張りぽい人が見てる。町が盗賊に襲われる最中だとしたら、自衛隊が盗賊の一昧と言われる可能性があるそう。遠目でしか見られてないけど車もそうだけど自衛隊の特徴な緑の服は目立つ。⋮ボクも特徴的か。

自衛隊が野盗の一昧だという噂が拡散される心配がある。單に近付いたの見られただけでそんな噂が出るのかな。現地の人の意見だし噂されるのかな。実の本音は売り物を売る前に引き返されたら困るとか無いよね？

で、迷つてたらレレイちゃん達が行つた。

度胸があるのか、自衛隊への恩返しのいつかんなのか、それだけ物を売りたいのか。

「はあ行こうか」

女の子だけ行かせるのはあれなのか伊丹さんが行く判断を出した。レレイちゃんを追い抜いて自分が一番前に行つた。自然と誰かを庇つてる感じだ。銀座事件の時にもそうだけどやつぱり主人公気質

だよね。

十中八九ぐらいは面倒な事に成りそうな気がする。伊丹さんが向かう先には結構な確率で何か事が有りそう。

伊丹さんが門の前にたつた。

さて何が出てくるかな。

伊丹さんはノックしてもしもーしつて事をしようとした。

面白いモノが見れそうとは思つたけど、思つたけどね。やっぱり伊丹さん主人公？

「ぬおう！」

町について門の前までいって伊丹さんはドアをノックしようとした。伊丹さんの顔面に勢いよく開かれた門が強打。伊丹さんが氣絶。いきなりそんな光景を見るなんて……しかも氣絶させた相手は自分が高そうな騎士姿の美女とも言える相手、装飾品が良すぎる様に見える。武装したこの町の領主？ それか高位の貴族……まさかお姫様とか？

「え、これ私の…せいいか？」

普通に考えてお姫様とこんな遭遇なんて考えられない。もしお姫様としたら…

伊丹さんもう主人公確定で良いかな？

それはともかく氣絶した伊丹さんをそのまま放置なんて出来ないし運ばないと、この場合一番力がある人が運ぶのかな…それだとボクか。ボクが伊丹さんを運ぶのか。まあ友人だからそれぐらい良いかな。率先して動いてボクが伊丹さんを抱えようとした。なんで動搖した様な声を出すかな。

さあ運ぼう

どう抱えよう。

脇に抱えるのは酷いかな。

背中はこの姿だと抱え難い。

両手で持つように抱えてみた。人を抱えるなんて初めてだからかな。何か恥ずかしいな。いや何かこの体勢が恥ずかしいモノの様な

?

そう言えばこの抱えかたつて名前が……なんだつたかな？ド忘れ
した。お姫様疑惑の女性が視界に入つた。

ああ、お姫様だっこ…

……あ…

亜神

「現在イタリカは600は越える野盗に襲われていて危機であり…貴女は帝国の皇女のピニヤ殿下…」

「そうだ…です」

いや気絶から覚めたらね。

イタリカの町の領主の館に居たんだよ。

誰かに運ばれたんだと思う。

運んだのたぶん部下の誰かだよな。

此処まではわかる。

で、起きたら町の現状とかを何故か居た帝国のお姫様に教えられた。帝国つて銀座を襲つた国。敵国のお姫様が何で居んの、救援の先発隊らしい。先発隊：お姫様合わせても四人しか居ない。因みに気絶されたのお姫様らしくて謝られた。

まあ気絶したのは不幸な事故つて事で特に怒りとかない。お姫さまが謝るつてちょっと驚いたぐらい。帝国のお姫様のわりに腰が低いの俺達の事を知ってる？

敵国の兵士と遭遇したお姫様、お姫様工口ゲーみたいな事になりそう。ヤル気は一切無いけど仮に工口ゲーみたいな事をしようとしたら…俺がグロゲーのグロ担当になるな。

助けて欲しいこともぶつちやけられたのは、盗賊が六百人は居るからか。町の方は兵士と言えるのはお姫様入れても四人。あとは素人の町の人。町が劣勢過ぎて猫の手も借りたいぐらい助けが欲しいのは伝わる。

お姫様がそんな状態の町を見捨てて逃げないのは好感は持てる。単に逃げれないって場合もあるか。何にしてもこのお姫様は運良さそうに無い。俺達が来る辺り悪運はありそただけど。

此処まではわかつた。

まったくわからんのが。

気の毒そうな視線、目線を逸らす、ひきつったような視線、興味深

そうな視線、嫉妬した視線……

オレが気絶した間に何かあつた!?

特に嫉妬の視線はいつたい?

嫉妬される様な事がマジで想像つかない。

誰かに聞こう。

先ず目についたのは見ると思わず現実から目を背けたくなる仮称ダグバさん。存在感がデカイんだよ。ダグバさんは相変わらず何を考えてるかわからなくて怖い。聞くの無理。なにか後悔してる感じに見えるような…気のせいいか??

次に目についてたのは口ウリイ。ふと思つたけど黒いゴスロリつて色合い的にダグバさんの対ぼくも見えるな：亜神つて変身しないよな?

口ウリイは面白そうにこっちを見る。此方は相変わら……口ウリイがなんでカメラを持つてんの?カメラ、撮影でもした?撮影してたなら見れば何が起きたか見ればわか……なぜかカメラの中身に関わつてはダメな気がした。

てか俺、何で一番聞きづらい相手で考えたのか。此処はコイツに聞くべきだろう。

「倉田、ちょっと説明頼む」

「俺っすか!?説明もなにもきつきお姫様が話した事以外は知らないつすよ」

目えー逸らすな。絶対に俺が聞きたいことわかつて誤魔化したな。「……聞きたいのこの町について気絶した後の事だよ。何かあつたよな」

「……隊長…気絶してからは…此処まで運ばれて来ただけつす…何も起きてないつす…おれウソつかないつす」

へーーそうなのかな。ゆっくりボイスの棒読みみたいな感じで言われて信じられるかバカ!!!

「本当に…知りたいッスか?」

え、なにその真剣な顔。か、考えてみると視線の種類的に知つたら絶対口クな事あると思えない。知らない方が良いな。追求はしない

ようにして。そうしよう。

それから、助けを求められた事はオッケイと答えた。ケモミミのメイドさんに案内されて防衛する事を頼まれた北門に行く。そして俺は案内が済んでメイドさんが去つてから言つた。

「館にケモミミ、獣人のメイドさんばかりだつたな」

「先ず第一声がソコですか」

呆れた視線を向けられた。

イヤだつて誰でも其所が気になると思うんだ。

「この町の領主が獣人の保護をしてた人だかららしいですよ」

やはり倉田（獣人スキー）は気にして聞いてたか。

確か獣人はこの周りでほぼ奴隸みたいな扱いだつたか？服装とか顔色的に普通より良い扱いされてたと思える。この町の領主さんは人権擁護をしてる立派な人だつたんかな。メイドにしてるけど、メイドだから仕方ないけど女性ばかりだけど……倉田（特殊性癖）と同類つて理由じやないよな？

そういうえば町の領主としてつて紹介されたの小学生ぐらいの少女……つと、親が亡くなつてやるしか無いつて状態だつたか。幼い少女が領主なのに町を滅ぼせる規模の盗賊が攻めてきてるか。

うん？ 待てよ亡くなつた領主……亡くなつた時期が最近とか無いよな？ 病気とかでないなら……領主が戦闘に出て戦死とか：丘に襲撃してきた軍隊の中に居たとか……町の戦力もその時の襲撃に参加してて、前の領主と一緒に戦力も無くなつたから盗賊が攻めてきた？ あれ？ 殆んど推測なのに何だか有りそうな気がするぞ？

まあ事実は不明……ふめい。

仮に正解だとしても申し訳ないとかそんな思いは持てない!! 事実だとしたら向こうが襲撃して殺そうとした加害者側だしな！……なんて割り切れないよなあ。

襲われてるのは敵国の町、相手がテンプレ的な傲慢な貴族とかなら助けるの超嫌々になるけど、気弱そうな幼い系の領主に、本来なら奴隸なそうな獣人のメイドさんたち、低姿勢なお姫様……男は少ししか見てない。助けを求めてるの殆んど女子供ばかり、心情的に助けな

いって選択肢がとりにくいやーー!!!

つて、まあ、流石に救援を承諾したのは心情的にって理由じゃ無い。俺だけならともかく心情だけで部下の命を掛けるなんてあかんし。敵国のお姫様、交渉する時の取っ掛かりとしては大きいよな。

で、問題は勝てるかどうか!俺たちだけじゃ絶対に無理!!六百人居るなら相手が武装をろくにしてなくとも町の防衛はキツイ。手が足りない。六百てただの盗賊なのか?此方の集落幾つ分だ?賊に偽装した軍隊じやないか?

「で、隊長どうするんです」

「そら俺たちだけじゃ戦力足りないし救援を頼むしかない」

「襲撃が予想されるのはそれほど先では無いですよ。時間的に救援を頼んでも間に合わないので」

「第4戦闘団ならなんとか間に合うだろ」

「…戦闘ヘリですか。盗賊相手に過剰戦力ですね」

今回の場合は過剰戦力で良いんだよ。お姫様に力を見せ付けないといけないし。力を見せたら仲良くしたいと思うだろ。力がある相手には配慮する。これはどの世界でも変わらない。ダグバさん相手の俺達みたいにな!

後でこんな助ける理由をロウリイに説明したら、ロウリイから変な誤解をされた。恐怖を魂に刻み付けるとかねえよ。

「よくわからぬけど助けを呼ぶの?ダグバさまだけで盗賊ぐらい軽く蹴散らせるんじや」

おう面倒な事をいうなテュカさんや。

テュカもそうだけど、避難民の人らダグバについて良い方にしか考えてないよな。テュカ達からすれば見返りもなく無償で助けてくれた相手。災害のドラゴンもブツ飛ばせるほど強力な力もある。で、そんなに強いのに普段は穏やかに見える。そら崇めるよな。俺達は無理だ:祟り神も鬼も神様と崇める日本人的な感性なら崇められるか?

で、盗賊についてはダグバさんは興味無いつてかんじで、見物客み

たいな感じだつた。なのにテュカが俺に聞くから反応した。

ダグバさんが俺を見た。

「ヤロウカ?」

俺は全力で首を横に振った。

ロウリイが面白そうに笑つてるのが見えた。

いや、おれ断つたやん。

彼はエムロイを信仰している兵士。

強さも頭の良さも並み。

特に珍しくもない大多数居る兵士の1人。

彼の居た部隊は連合軍の一員として丸ごと召集された。連合軍なんてカツコよく言つても、実際には帝国に対し意見なんて出来ない弱い国の兵士の集まり、悪く言えば負け組の寄り合い軍、帝国に侵略者を迎撃してと要求、いや命令をされて集まつた軍だ。

相手が本当に侵略者か怪しんだとしても帝国には逆らえない。帝国に逆らえばどうなるか。見せしめに逆らつた国の町の1つか2つ、女子供を含めて皆殺しにされかねない。それが悪質な憶測と成らないのが帝国の歴史だ。

証拠とも言えないが自衛隊への対処として帝国では焦土作戦が検討された。民から食料を奪い井戸に毒を落とす。自國の民の村や町に対しても。実行はされなかつたが、理由は税収が減ることと文句があるからと言つた自国民の被害は欠片も考慮されていない理由の却下。自国民でさえそれで他国の人間ならどうなるか。

そんな帝国からの要求だからこそ、短期間で集められたのに何万もの軍勢が集まつた。覇権国家たる帝国に対抗できると思えるほどの程の軍勢だ。

集められた国はあくまでも帝国の軍事力に屈していただけで、所属はバラバラだが共通して帝国に好意的な国は無い。しかし集められ

た軍勢で対抗は出来ても打倒出来るとまで言えない。失敗すれば滅亡と考えれば賭けにも出れない。もしもこの時に帝国の軍事力が減っていた事に気づけば結論は違つたかも知れないが、知らなければ意味がない。

帝国の策に嵌まり帝国の思惑どうりに動いた。

連合軍はアルヌスの丘まで進軍し帝国の言う侵略者に戦いを挑む。彼の部隊は先陣を任せられた。彼は信仰するエムロイに恥じないよう誰よりも先頭を走つた。後ろから彼の所属する部隊も続いた。

先陣の彼等でもまだアルヌスの丘が辛うじて視界に入るぐらいの距離に居る時だつた。まだまだ彼等の認識ではとてもお互いに攻撃が届くような距離ではない。

兵器と言うのは射程と言うモノが重要。正確には射程と言うよりも如何に自分が有利に安全に効率よく攻撃出来るかが重要。

日本で言えば長さを伸ばした槍。戦国時代に織田信長が活用した火縄銃。時代が進めば戦車、戦艦、そして戦闘機と時代が進ごとに新たに有利に攻撃できる兵器の開発が進められる。

アルヌスの丘に居る侵略者、いや自衛隊は兵器の開発が制限されるとはいえ世界大戦の後の兵器群がある。翻つて攻めてきた彼等は魔法等があり一概には言えないが、火縄銃すら無い事から技術で言えば戦国時代未満。

陣形、戦法、兵器のレベルというのは数年ほど世代が違うだけで大きな差が生まれる。数年で蹂躪される程の差が生まれる事もある。なら世代が数百年ぶんの差が有ればどうなるか。

戦闘は虐殺となる。

数万の軍勢に攻められる自衛隊が相手が憐れに思うほど、しかし遠慮すれば殺されるのは自分達になる。容赦なく砲弾がまだ戦闘が先と油断した連合軍に打ち込まれた。

轟音が鳴り響き地が破裂、火山から吹き飛ばされた火の岩が連續して着弾した様に次々と破裂する大地。天変地異が起こつたと錯覚するほど。

先陣を行つていた彼の後ろに球が着弾。彼は後ろから来た未知の

衝撃に馬から放り出され意識を失った。次に気付いた時には数万の軍勢が見る影もなく壊滅している光景。彼は意識を長く喪失した訳でもない。短な間に最強である帝国と渡り合えると思えた軍勢が消えてなくなっていた。

彼は自分の後ろに居た部隊を探そうとして有るものを見付ける。それは彼が気を失う前に走つていた所に出来た穴、そしてその穴の周りには……仲間達のモノと思わしき『残骸』が飛び散つていた。

敗戦の様相であり仲間も……。

選べる選択肢は一人でも戦うか逃走か。

彼は後者を選んだ。彼は天涯孤独の身でただ1人だけ生き残りたいとも思わない。此処で戦死して仲間の元に生きたいとも思つたが……逃げることにした。

仲間を殺した相手が何なのか知らない。軍隊は壊滅し仲間は殺されたのに相手が何なのかすら解らない。解つてるのは天変地異を起こせること、そんな事が可能な相手が人である訳がない。炎龍みたいに挑んではいけない存在だろう。なら単身で挑むのは戦いでなく自殺だとえた。

彼は逃げた。逃げていく敗残兵の集団に彼は入った。集団の中では丘に居た何かへの恐怖と帝国への憎しみや怒りが噴出していた。

自分達が集められた理由。

帝国が丘に居た何かに手を出して負けた。幾ら帝国でも天変地異を引き起こせる存在に勝てるわけがないと、恐らく帝国が手を出して返り討ちにあつて軍事力が相当に減つた。軍事力が減つた事を俺達が知ればどうなるか。当然帝国を打倒しようと動く。だから帝国はそれが発覚する前に急いで不穏分子の国から兵士を集めてアイツらにぶつけた。最初から俺たちは帝国のクソヤロウに殺される為に集められた!!と風評と憶測と推測だつたが間違いは無かつた。彼も帝国ならやりそุดと納得した。

敗残兵の彼等は二通りに別れる。

帰る場所があるか。

帰る場所がないか。

帰る場所があるなら帰還を目指せばいい。しかし帰る場所が無いなら野垂れ死にする気が無いなら生きていく為に：相當に運が良いれば何処かの村や集落等に紛れ込み真つ当に生きる事も出来るが、可能性は少ない。

残されるのは野盗への道……

野盗に成らない場合には先ず死ぬしかない。兵士とは武器を持った人殺しをしてきた集団。此処は帝国の領地、帝国には怨みある。言い訳に武力もあり野盗に成る道を選ぶのに迷うこともない。

敗残兵が野盗の一団を結成。

彼も野盗の一味に成ることにした。

生きていく為と言うより、エムロイの元に堂々と逝くには戦つて死ななければいけない。アルヌスの丘の場合では自殺、だから別の戦場を求めた。イタリカという大きな町を攻めると聞いて参加する事にした。大きな町なら相当な抵抗もあり率先して戦えば堂々と死ねると考えた。選ばれた町からすれば迷惑そのものだ。

まあ彼の様に悪い意味で極まつた野盗は多くもない。

イタリカを攻めたのは600という数の野盗だつたが、イタリカ程の大きさの町相手には数は足りるかどうかというぐらい。帝国からの援軍が来れば負け、激戦が予想された。

しかしイタリカの抵抗は想定よりも低い。兵士は殆んど居らず住民が反抗してくるぐらい。彼が率先して戦つても怪我をする事もなかつた。大多数の強奪目的の人間からすれば喜ばしいが、少数の彼の様な終わりの場所を求めた元兵士は落胆した。

彼は落胆する必要はまるでなかつた。

再度の襲撃で異変がおきた。

彼の信仰するエムロイに仕える神官であり亞神、死神と字される程の黒い亞神が乱入してきたのだ。

見掛けは小娘だが中身は彼が産まれる遙か前から戦い続いている古強者の戦士。幾つもの伝説に語られる存在。その戦いぶりは一見すれば理不尽な死そのものだが、死ぬ覚悟がある戦士にとつては惚れ惚れする様な輝く死の舞い。亞神の怪力任せに暴れてるよう見せ

て、積み重ねられた経験に裏付けされた珠玉のような卓越した戦闘技術。戦士にとつての到達点というのを見せ付けられた。死神と一緒に来た緑の服の魔術師も凄かつた。

しかしそんな緑服や死神よりも気になる白い何かが居た。

暗い中でも目立つ白い存在。

豪華な白い鎧を着ている？

鎧には金色の装飾も見える。

粗忽な鎧と真逆に目立ち過ぎている鎧。彼等の持つ認識で一番近いモノは伝説に存在する古代の王だろうか。絵物語の英雄にも見える。

始め白い存在は死神を此処まで運んできた。お姫様を抱えるような体勢でだ。死神はそのまま此方に向かつて戦いを挑み白いのは何もせずに佇んだ。見学している様に見える。彼はその姿にむしろ警戒をしたが、無防備なバカだと見る人間もいた。そして略奪を目的とした野盗とすれば高価な戦利品は早い者勝ち。

人が空を飛んだ。

彼の頭上を越えて飛んでいきだいぶ先で墮ちた。腹部の部分には穴が空いている。生きてる訳がない。炎龍に撥ね飛ばされればあれだけ飛ぶだろうか？炎龍（災害や天変地異）の化身の様な何かがいるということか。

飛んだ方向を見ると居たのは白い何か。

殴った姿勢から元に戻るところをみた。

まさか殴り飛ばした？

彼はゴクリと息を呑んだ。

白い存在の近くには怯えた様な人がいた。装備を見ると元兵士でなく純粹な野盗。まだ若く経験も無かつたのか危機感を感じず白い何かの鎧が高く売れるとでも思つて狙つたんだろう。飛んだのもあの中の1人か。

打撃の威力だとすれば死神と同じ亞神。飛んだ人間と飛んだ先の

白い存在を見た誰もがそう考える。亞神とは總じて強いだけでなく不老不死の存在、黒い死神の暴れぶりを見れば戦えるような相手じゃないと判る。白い亞神を取り囲んでた彼等は血相を変えて逃げた。

白い亞神は何かを拾う。

野盜の誰かが落としたのだろう槍

ろくに手入れもしてないのかボロボロな槍。

拾つた槍が不自然に伸びた。そして廃棄品にしか見えない槍だったのにその外観は死神の持つハルバート並みに立派なモノと成っていた。

白い亞神は槍を持つて駆け出し逃げた盗賊の元に向かう。まるで戦いを挑んで逃げ出すのは許されないと言うように！

背後から槍を振り抜く。槍の見掛けだけが変わった訳では無い事を示すように、スパンと擬音が聞こえてくるような見事な切れ味を発揮する。まるで元からそうであつたかの様に肉体が二つに別れた。

他も同じ。亞神は一人目の二つに別れた体から血が噴出してる内に逃げた他の野盜にも同じ運命を与えた。白い亞神は逃げた野盜を1人残らず裂いた。どう判別してゐるのか他の野盜の中に紛れても逃れることは出来なかつた。

まさに死神。

白い亞神を見て黒い死神は艶のある恍惚とした顔で嗤う。自分も負けてないと言わんばかりに更に攻撃的に命を刈り取つていく。白い亞神は自分からは向かわない。しかし自分に向かつてくるモノの命は必ず奪つた。

二人の死神、亞神相手に勝ち目はない。

古くから語られる黒い死神と未知の白の死神が暴れる戦場。彼は自分が幸運なのかもしれないと思う。冥土の土産話にはこれ以上のモノは思い付かない、丘に行くのと同じで自殺の様なモノだが、まだ戦いの形にはなるから良いかとも思う。

彼は剣を持つて駆け出した。

他の元兵士も駆け出した。

白い新たな亞神に向かつて

彼は殆んど同時に駆け出した彼等に奇妙な仲間意識を感じる。同じ死に損ない何だろうと思う。そんな仲間意識の他に感じのが絵物語の中に居るような不思議な感覚。黒い死神に緑の兵士、今まで知られてない白い亜神が現れた戦場なら語られる伝説になる。伝説での役所は主役に蹂躪される賊の1人という端役の中の端役だが：語られる一部にはなれる。

彼は雑兵の一人として剣を振りかぶる。

白い亜神（主役）が彼を見た。

雷に打たれた様な震えが走つた。

：氣付くと彼は死んで自分の身体を見詰めていた。

頭が胴体から切り離された無残な有り様を晒してたのに、苦痛すら感じない即死だつたのか死顔は眠つたような感じだ。彼と一緒に走つていた奴等もいた。何処か満足げか。怯えて最後を迎えた賊もいる。泣いてる賊もいた。彼等は皆、黒い死神の身体を通してそのままエムロイの元に旅立つていつた。

この世界では死んだ魂は神の元に向かう。神にどうして死んだのかも伝わるだろう。こうして白い怪人は異世界の神にも注目される第一歩：赤龍の事も含め二歩めを踏み込んだ。

不安

昨夜あつた野盗相手のイタリカ防衛戦。

野盗の数は600と多く、更にその中には戦場で使う武器と防具を持つたままの敗残兵も多く実質的に軍隊と変わらない。

防衛する側のイタリカ側の戦力は：町にあつた軍備はある事情で領主ごと失くなり兵士は数人、その数人の内が戦力に数えるには危険な帝国の姫、マトモに戦つたこともない住民、一度の襲撃には耐えられたが野盗の再度の襲撃には耐えられるかどうか。帝国の援軍が来なければ滅びる状況、帝国には援軍を出す余裕がない。次の襲撃にはやはり帝国の援軍は来ず、増えたのは偶々襲撃時に外部から来てしまつた10何人のみ。

野盗は襲撃に来た。

イタリカへの援軍は野盗の襲撃が終わつて来ることはなく、本来なら奇跡でも起きなければ勝てない状態、しかしいタリカ側の勝利で終わつた。…イタリカの勝ちだと言うと語弊があるか。イタリカの勝利と言うよりも…偶々外部からやつてきた緑の人と亞神二人の勝利と言つべきだろう。

もつと言えば亞神二人の勝利か。

緑の人、伊丹たちも戦果を相応に上げたが亞神二人と比べると霞む。黒い亞神は暴風の様に暴れまわり白い亞神は戦う意思を見せた者を全て刈り取つた。亞神とは言うなれば不死の超人。片方はそんな超人の中でもこの世界を900年以上生き抜いた存在、もう片方は……。

亞神の活躍により救援の第4戦闘団、この世界の人とつて存在から理解できない戦闘ヘリが来たときには殆んど終わつたあと、何発か撃ち込んだだけで終わりパイロットが不完全燃焼に愚痴る程。それで見てる側の度肝を抜いたが。

野盗の事が片付いた後、伊丹に対して酷く怯えたピニヤと幾つか取

り決めを行う。取り決めにより自由が保証され今後はイタリカでの売買はできる。伊丹達が来た目的は達した。伊丹たちはアツサリと帰る事にした。

帝国の上との繋がりを持つ事が上手くいき伊丹はホツとしたが、それ以上にピニヤの方がホツとした事だろう。

ピニヤにとつて、伊丹たちには助けては貰つたが帝国の敵である相手だ。父である皇帝に戦うことを主張していたが、帝国に対して呪いの言葉を吐く死にかけた王と出会い、止めて野盗との戦いの後では意見は正反対となる……。

野盜を追い返したあとの方がある意味でピニヤにとつては辛い立場だろう。

伊丹たちが敵国の姫をどうするか。

マシな選択でも帝国相手への人質。最悪では死んだ方がマシ…言うのもばかられるような扱い。

地球でもそうだが王族でも貴族でも悲惨な事になる事はある。詳しく調べれば真っ当な感性の持ち主ならドン引きする様な事になる。死んだ方がまだマシという未来もあり得る。ピニヤにとつて最悪も想定できる野盜討伐後の話し合い。しかし結果は緩やかな取り決めだけで済んだ。捕獲した野盜に対しても人道的な扱いをする等の意味不明な取り決めもした。

恐らく地球側の多くの国でも意味不明だと思う取り決めだ。

ピニヤに對して特になにもしてこない。ピニヤはホツとした。敵国の姫を放置しても問題ないとする強者の余裕を見せられた気分にもなつたが心底にホツとした。特にホツとしたのは伊丹を氣絶させてから、頻繁にジツと見てきていた白い怪人が居なくなつた事か。そんなホツとした後に……伊丹がイタリカに出戻りした。

ボロボロの捕虜となつて……

捕虜にした犯人は女性騎士の団……

この団はピニヤがトップ……

捕虜としてお姫様の前にボロボロで氣絶した状態、ピニヤの設立した騎士団が連れてきた。

亜神二人と親しく人を殺す何かを吐き出す空を飛ぶ鉄の塊を呼び寄せる事が出来るジエイタイの隊長を、ジエイタイはイタリカを滅ぼしかけた野盜を討伐した。逆に言えば確定で意向次第でイタリカを軽く滅ぼせる相手となる……そんな相手が自分の部下によりズタボロ、一度は去つた危険が危険度を猛烈に上げて帰ってきた。

! ! !

ピニヤ心の中で絶叫した。

伊丹は起きた。

氣絶から目覚めたのはイタリカの領主の館だ。同じ館で二回も氣絶から起きると言うのは初めてだろう。因みに氣絶の原因は間接的なモノも含めるとどちらも某お姫様なる。

伊丹は女性騎士に捕虜にされ出戻った。イタリカから出たあとで遭遇した帝国の女性騎士、女性騎士は遭遇した伊丹たちに敵意を向けられる。此方は車で向こうは馬、逃げようと思えば逃げれる。蹴散らすと言うことならもつと簡単だ。

だが女性騎士の話から帝国の騎士でイタリカに向かう前だとわかる。折角野盗を倒して交渉の取つ掛かりが出来たのに話を拗らせる訳にもいかない。なので伊丹は刺激しない為に一人だけ説得するため残った。

相手にピニヤの約束が有ると話したが……伊丹の説得力が弱かつたのか女性騎士があれだつたのか、女性騎士はマトモに聞かず伊丹は捕虜となつた。

伊丹の部下は伊丹を残して撤退した。友人の白い怪人もいたが同じくだ。

薄情という訳でもない。少なくとも怪人は伊丹が流石に死ぬか余程に酷い目にあうと思えば助けるが、捕虜にされたが女騎士の話からすると伊丹の行く先はイタリカ。帝国の女騎士なら上はピニヤだろう。イタリカに居たピニヤが伊丹に危害を加えてくるとは思えない。

口封じはあり得そなうだが、自分達が居るので口封じはどう考へても悪手。捕虜となつても一応の安全は保証されていると考へられた。

あと此処からは怪人の個人的な考へだが、これまでの体験から伊丹を物語の主人公と半ばまで確信し、捕虜にされても大丈夫だろう。それにイタリカに戻る辺りお姫様もヒロイン枠なのかな?と考え友人のヒロイン枠を潰したいとは思わなかつた。質が悪い友人だつた。

行き先は予想通りイタリカ、伊丹は道中では氣絶するような強行軍を課せられたが無事に着く。お姫様により誤解は解けたようで伊丹はケモミミのメイドさんにお世話をされている。会話もわりと弾んでいる。……伊丹が不幸なのが不幸でないのかわからなくなる光景だ。

「待つてゐしかねないな」

状況を理解してから伊丹はそう判断した。

イタリカなら部隊の皆もその内に来てくれる筈、下手に外に出たら行き違う可能性もある。野盗との戦闘に馬に繋がれて強制ランニング、疲労も相当あるので、隊長として心苦しいが助けを待つお姫様ボジで待つ事にした。もちろん複数のメイドさん達にお世話をされながら…

「あー極楽だわ…」

メイドさんたちは町の恩人として甲斐甲斐しくお世話をしてくれた。…町を助けてくれた恩返しという理由もあるが、野盗を殆んど殲滅した武力が向けられない為のご機嫌とりという切実な理由もある。亞人のメイドたちは帝国と伊丹達どちらに立つかという選択を迫られる事も考えた。

イタリカは帝国の所属だが、野盗相手に苦戦して終いに助けてくれた恩人を捕虜にしてしまつた帝国、さらに言えば帝国では亞人の扱いが悪いので亞人であるメイドたちに帝国への好意なんてないだろ。逆に伊丹は野盗を殲滅する部下がいる。死神のロウリイに亞神どう白い亞神とも友好的な関係、特に白い亞神は伊丹をお姫様抱っこをされるぐいの友好関係。

メイド達が護りたいのは領主、ひいてはイタリカ。伊丹と姫が敵対

した場合、イタリカが姫側なら巻き添えになる。伊丹のご機嫌とりの為ならピニヤを始末する事まで考える怖いメイド集団。

そんな危険思考のメイドとは知らない伊丹としては扱いが良いという事実しかない。部下たちには何日かあとで来てくれないかなと考えてから部下から何日も放置されるなんて嫌だなと思う。白い怪人の事を思い出してやつぱりちょっと放置されても良いかなと思いつす。

(部下に放置されるのは悲しいけど……悪くない扱いだしなー。お世話をされて働くからでも給料が減るわけでもないし。暫く此処で良いかな!!三日…せめて二日ぐらい後に!)

部下が来ない間は休暇の時間。

「隊長無事そうですね」

伊丹の部下たちはやつて来た。

まあ捕虜とされた場所はイタリカからそんなに離れてないから妥当な時間、伊丹がなんでこんな早くに来るんだよと嘆いた事実はない。

「なんで!?」

嘆く前に部下の後に伊丹を捕虜にした女性騎士がやつてきて、伊丹は何故か殴られたからだ。

伊丹がもつたのは疑問。怒りでない。

しかし端からみて殴られて怒らないという事は、殴られる心当たりが?と思うだろう。

男の寝てる寝室に恥ずかしげに覚悟を決めた感じの顔をした女性が一人で来る。他の人が居るのを見て女性が顔を真っ赤にして伊丹を殴る。

例えば捕虜にした謝罪として身体を要求……それで覚悟を決めてきたのに談笑をさせていたからキレた?下手をするとそんな疑いを持ったれたかもしけないが、一緒に来ている白い怪人は伊丹がそんな事をするわけないと信じている。信じた上で……

「(修羅場かな?)」

主人公特有の女性関係のトラブルが起きたのかと思われた……ま

だ如何わしい誤解の方がマシかもしねない。

伊丹もまさか殴られた事でそんな事を思われる何て想像できない。捕虜にされて誤解が解けたと思えば理不尽に殴られる。殴られた事でひどい疑惑を持たれる。その災難ぶりは正に主人公か。

「何をしてるんだお前は!!」

まあ後から来たピニヤが謝罪に行つたのに殴るとは何事かと怒られてるのを見て誤解は解けた。女性の部下からゴミカスを見る目で見られる事は避けられた。…良かつた良かつた…白い怪人からはやつぱり主人公みたいなトラブル起こしてると思われたが…。

捕虜になつた伊丹が合流して一件落着。

伊丹は捕虜にされ殴られた事は恨んだかもしねないが、元から過激な思想とは無縁な性質、怪我はしたが大した怪我もない。誤解と判明した後で若い女性に報復なんてするつよりもない。と言うか出来るわけがない。

戦闘が関わらなければ日本人と……おおよそ変わらない平和な思考の白い怪人も何かするつもりもない。そもそもヒロイン云々の可能性で捕虜になるのを見逃しておいて後から怒れない。

被害者よりも現地の人間の反応の方が大きい。特に責任者となる帝国の姫たるピニヤの反応……

ピニヤ側は完全に条約破りをしている。

日本なら条約破りでも裏は不明だが表向きには、遺憾程度の意でナアナア…特地での条約破りは……条約を締結してから条約破りは宣戦布告の理由には十分になる。条約破りを理由の1つに戦争をし領土を拡大してきたのが帝国なので誰よりも条約破りの不味さを解つてている。騎士達は取り決めを知らなかつた?そんなのは言い訳にも成らない。…と、してきたのが帝国。

弱者相手なら条約を反故にしても相手が泣き寝入りとなるが、相手が弱小なんて思うことは不可能な伊丹たち、戦争をすれば帝国でも勝てるかどうか。帝国がそれなら野盗程度で滅びそうちつたイタリカがどうなるかは言わずとも、最悪を避けるために謝罪に行つた部下が：謝罪相手を殴つてしまつた。

それも他者の居る前で伊丹の部下にプラスして亞神二人もいる前で殴った。片方は亞神の中でも有名なロウリイ。帝国の姫であるピニヤとて貌下と敬わなければいけない相手の前でだ。

条約破りについて、帝国でも無視出来ない不死身の証人が居る。口封じなんて不可能、ピニヤの顔色が青色を通り越して真っ白。イタリカ壊滅への秒読みのカウントダウンが幻聴で聞こえてそうだ。

普通ならそんな状況ならやらかした部下の首を物理的に切つて詫びても可笑しくないが……ピニヤには良くも悪くも自分の部下を切り捨てる様な非情さはなかつた。

「い、伊丹殿、どうか謝罪の機会を与えていただけないだろうか」下の責任を下に押し付けず自分が取ろうとする姿勢には感心するが……そんなピニヤを見て被害者の伊丹本人はそんな大袈裟な反応しなくともと内心で思うだけだ。

「申し訳ありませんが伊丹隊長は急いで戻らないといけません。国会に参考人として呼ばれてますので」

「は!」

「こ、コッカイ?」

「え、なにそれ、オレも初耳なんだけど!?」

「隊長が捕虜になつた後に連絡がきました：隊長に色々と聞きたいようです」

色々と言うのに伊丹に心当たりは……有りすぎた。白い怪人をチラリと見る。此方を見ていたので慌てて視線を逸らす。白い怪人は若干傷付いた。

質問の内容を想像するだけで今からお腹がいたい。伊丹は部下達が来るのがもつとあとだつたらと本気で嘆きたい気分になる。もしくは迎えの前に単独でイタリカから逃走して一時的に行方不明か。いや……捕虜になつて直ぐ後に国会に送るのは酷くないだろうか？捕虜になつた事で精神的に病んだと言えば何とか休めないか、伊丹は無駄な足掻きを考えた。

「国会とはなに?」

レレイは知識欲を刺激されたのか聞いていた。

レレイは幼子の様に何でもかんでも気になつた事は聞く。自衛官に銃についても聞いている。軍隊と思える相手の武器を知ろうとするのはダメだろう。レレイが馬鹿か能天氣で危険を理解していないとも思えない。頭は良いが保身に関しては意識してゐるのか疑わしい。好奇心猫をも殺すという事になりそuddo一部のロリコ：父性溢れる自衛官に心配されてもいた。

レレイは国会の説明を受けた。

伊丹達の国にある最高位の議会だと理解した。

「どういうことだ」

そしてそんなレレイに更に聞いたたのはピニヤ。レレイは国会を帝国風に言い直して伝えた。

「イタミはこれから元老院に報告に行かなければいけない」

元老院とは高位の貴族が集まる場所で一兵士が呼ばれる様な場所じやない。つまり伊丹はただの一兵士ではない。そんな一兵士と扱われてない伊丹にやらかしたのが…。ピニヤの部下ひいてはピニヤ。

帝国の姫を助けてくれた恩人を帝国の姫の部下が捕虜としてボロボロにした。そして捕虜にした姫の部下が謝罪どころか追加で殴つた。伊丹にこれをそのまま報告されればどうなるか。

野盗を吹き飛ばした空飛ぶ鉄の塊が大群を成して帝都にやつてくる光景が脳裏に浮かんだ……

「わ、私も行かせて貰うぞ!!」

「え」

まさかのピニヤからの提案。伊丹としては面倒なだけだが日本としては帝国の上層の相手が来てくれるのは都合が良い。なので通信で上司に確認しても了承された。そうして伊丹は今度は帝国の姫と伊丹を捕虜にした女性騎士まで連れてアルヌスの丘に帰る事になった。

次は伊丹の国会行き。

伊丹は戻つてから捕虜になり精神的に病んだと言つたが欠片も信じて貰えない。国会逝きは免れなかつた。お前が捕虜に成つたぐら

いで精神的に病むわけ無いだろとはどういう事なのか

当事者の伊丹よりもしろ周りが頭と胃を痛めてたかもしれない。

帝国の姫を連れ帰つてきた。伊丹は外に出て爆弾を引き連れて戻つてくる事はこれで通算で二回目。偵察に一回出て二回。100%の確率。打率1。別に結果的に悪いことだと言えない事だが伊丹が何処かに行くと何か起きる。銀座事件に遭遇してゐる事といい……伊丹が国会に行けばまた何か起きると思う事は可笑しいだろうか？いや何か確実に起きると確信している。

伊丹の事を除いてもだ。

呼び出しの理由だが、誰が漏らしたのか伊丹が避難民を連れてきて犠牲者を出した事について聞きたいらしく。呼び出したのは野党議員。証人として特地の人間も連れてくる事も要求。

まだこれが政権にダメージを与える事が目的か、自衛官を目の敵にして英雄と呼ばれる伊丹を貶めて自衛隊そのモノへの攻撃ならまだ良いが：其だけでは無いだろう。

最近のマスコミは植民地の悲惨な歴史などを繰り返し報道している。どう考へても日本が特地を植民地にして非道なことをすると暗に言う報道を続けた。現代の日本が植民地支配なんて本気でやるなんて思う、日本人がいるだろうか？

日本マスコミの報道には海外勢力が強く干渉している。野党議員の後ろも考えれば同じく海外勢力が裏にいる。日本の行動には問題があると騒ぎ特地への介入を狙う為か。それか特地の人間を呼んだ事を考えれば誘拐が狙いか。

日本にもどるのは呼び出された伊丹は当然として護衛として伊丹の部隊、証人としてレレイ、テュカ、ロウリイの特地の三人娘、あと日本に行くことを希望したピニヤ、ピニヤの御付きに伊丹を殴つた女性騎士。

：問題に為るのは仮称ダグバだ。

アルヌスの丘に来てから何が氣に入つたのか伊丹の傍に居ることが多い。イタリカにも伊丹が理由で行つたと思われてゐる。なら日本にも一緒に同行すると言われたらどうするか。

仮称ダグバ本人の話では仮面ライダーのグロンギのダグバではない。本人の証言ではそうなるが、やはり外見と能力からしてクウガのダグバと一緒に近い存在だと思われている。

仮称ダグバがどうなのか…

仮称ダグバが避難民にも自衛官の誰かにも危害を加えた事などは確認されてない。交流のあつたエルフたちに確認した所でも危害は加えられてない。治療をしたりと善性も確認できる。

危険は少ないと思われるかと言えば…

伊丹から伝わった攻撃されれば報復をするという宣言、言い換れば何もしなければ安全だという宣言とも言えるが…これまで確認されたダグバの攻撃だが、銀座事件での殺戮は本人の証言では報復の一種。赤龍についても先に襲ってきたので正当防衛と言つても問題がない。新たに報告を受けた野盗に対しての対応の話だが、確認できる限りは攻撃をしてない野盗には手を出してないと報告を受けた。

ただ攻撃の意思を見せた人間は殺される。逃げたとしても一人残らず斬殺した報告も受けている。正当防衛どころか真っ当な報復とすらも言えないだろう。

戦場のど真ん中に行く辺りわざと攻撃させ殺戮したともとれる。報復での攻撃しかしないという話はある程度は事実と認めても：銀座での行為を合わせて考えて……本質は苛烈であり殺戮に対しても積極的だとしか思えない。

もしかしたら伊丹と共に自衛隊の所に来たのも攻撃の意思を向けさせて、報復をするつもりだつた可能性も想像できる。攻撃などは一切されてないが……仮称ダグバへの認識は変わらずに危険な存在。仮称ダグバが国会に行くのはどうか、

仮に仮称ダグバが国会に行つたとして、もし野党がダグバに対しても怒らせる発言をしたらどうなるか、報復と言うのは暴言に対しても無いとも言えない…。野党が地雷を踏まないと言う信用はできるだろうか？

仮に野党が国会で大人しくしても、与党はダグバに対してまだ方針

を決定出来てないせいか発言そのものを避けているが、野党の人間の何人か人気とり目的かテレビでダグバに対して相当な事を言つてしまっている。伊丹からの情報でダグバはテレビを見ているともされる情報もある……野党の発言を見てないとも限らない。

銀座事件以降でテレビでダグバに對して敵対的な発言をした人間で誰か襲撃を受けた話はないが……目の前にすればどうなるか。

国会が地獄絵図になると考えれないのは想像力が足りなすぎるだろう。

与党も自衛隊の誰も内心で野党が消えるのは……どう思うのかは不明だが、与党も自衛隊も国会が大惨事になるのは防がないといけない。

ダグバが行きたいと言った場合にどう止めようかと悩んだ。悩んだ末に、まだ同行するとも言つてない。とりあえず真っ当な議員には欠席するように伝える準備だけはしておくことにした…

そんな行動が関係あるのか無いのか。

白い怪人は伊丹には同行せず何処かに消えた。